
薬屋のひとりごと

うりぼう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薬屋のひとりごと

【著者名】

Z9636X

【作者名】 つじまつ

【あらすじ】

薬草を取りに出かけたら、後宮の女官狩りに遭いました。

花街で薬師をやっていた猫猫は、そんなわけで雅なる場所で下女などやっている。現状に不満を抱きつつも、奉公が明けるまでおとなしくしてこようと思つたが、彼女の好奇心と知識はそろはせない。

ふとした事件を解決したことから帝の寵妃や宦官に目をつけられる

ことになる。

早く市井に戻りたい、 猫猫はきょうも洗濯籠を片手にため息をつくのだった。

(露天の串焼きが食べたいなあ)

雲天を見上げて猫猫は溜息をついた。

周りは自分が今まで見た中で最も美しくきらびやかな世界、そして
瘴氣^{じょうき}蠢く濁つた澁^{おり}の中だった。

(もう三ヶ月があ、おやじ、飯食つてんだろうか)

先日、薬草を探しに森に出かけてみれば出会ったのは、村人その壱、
式、参という名の人そらいだった。

まったく強大で迷惑極まりない結婚活動、略して婚活、宮廷の女狩
りである。

まあ、給金はもらえるし、一年ほど働けば市井に戻れなくもないの
で、就職先としては悪くないのだが、それは個人の意思で来た場合
である。

薬師としてそれなりの生活をしていた猫猫^{マオマオ}にははた迷惑な話なのだ。

人さらいどもは、妙齡の娘を捕まえては宦官に売り酒代を稼いだか、
それとも己の娘の身代わりにさせたのか猫猫にはどうでもいい話で
ある。どんな理由があれ、とばっちりを受けたのは変わらないので
ある。

でなければ、後宮なる場所に一生関わりたくなかつた。

むせ返る化粧と香、美しい衣を纏^{まと}つた女官の唇には薄っぺらい笑み

が張り付いていた。

薬屋をやってきて思うこと、女の笑みほど恐ろしい毒はない。
それは殿上人の住まう御殿も城下の花街も変わらないのだと。

足元に置いた洗濯籠を抱え、建物の奥に向かつ。表とは違い、殺風景な中庭には石畳の水場があり、男とも女ともつかない召使たちが大量の洗濯物を洗つていた。

後宮は基本男子禁制である。入れるのは、国で最も高貴なかたとその血縁、あと大切なものを失つた元男性だけである。もちろん、そこにはいるのは後者である。

歪だと思いつつ、それが利にかなつてゐるからやつてゐることなのだろうと猫猫は考える。

籠を置くと、そばの建物の中にある並べられた籠を見る。汚れ物ではなく、日の当たつた洗濯済みのものだ。

持ち手にかけられた木札を見る。植物を模した絵と数字が書かれてゐる。

女官の中には字が読めないものもいる、なんせ人さらいのじとく攫さらわれたものさえいるのだから。富廷に連れ込まれる前に最低限の礼仪くらいは教えられるが、文字となると難しい。識字率は田舎の娘で半分越せばいいほうなのである。

大きくなり過ぎた後宮の弊害へいがいといえる、量は増えたが質が悪い。

先帝の花の園には到底及ばないものの、妃、女官合わせて二千人、宦官を加えると三千の大所帯だった。

猫猫はその中で最下層の下女であり、官職すらもらっていない。特に後ろ盾もなく、攫われて数合わせにされた娘にはそれが妥当なところである。まあ、牡丹のような豊満な肉体や、満月のような白い肌でも持つていればまだ、下妃の位につける可能性もあったかもしれないが、猫猫の持つのはそばかすの浮いた健康的な肌と枯れ枝のような手足ぐらいである。

(はやく仕事終わらせよう)

梅の花と『壱七』と書かれた札の籠を見つけると、小走りに歩く。重く曇った空が泣き出す前に部屋に戻りたかった。

籠の洗濯物の主は、下級妃嬪かぎゅうひびんである。与えられた個室は他の下妃に比べ調度の質が豪華うひやだが派手すぎる。部屋の主は、豪商の娘かなにかと予想される。位持ちともなれば自分専用の下女を持つことができるので、位の低い妃はせいぜい一人までしか置くことができない。ゆえに、猫猫のような特に仕えるべき主人のいない下女がこうして洗濯物を運んだりするのである。

下級妃嬪は後宮内で個室を持つことを許されているが、場所は宮内の端にあり、皇帝の目につくことはめったにない。それでも、一度でも夜伽よとぎを命じられれば部屋の移動ができる、一度目の御手付きは出世を意味している。

一方、食指じょくしを動かされることなく適齢を過ぎた妃は、よほど実家の権力がない限り位が下げられるなり、最悪、下賜かしされてしまつ。それが不幸かどうかは相手にもよるが、宦官かんがんに下賜されることを富女たちは一番恐れているようだ。

猫猫は扉を軽く叩く。

「ヤニにおりといひ」

扉を開け無愛想な返事をするのは、部屋付の侍女だった。

中では、甘ったるい匂いを漂わせた妃が酒杯を揺らしている。

宮内に入る前は誉めそやされた美しい容姿であるが、所詮、井の中の蛙だったのである。絢爛けんらんの花々に気圧され、鼻つ柱を折られ、最近は部屋の外にも出ようとしなくなつた。

（部屋の中じゃあ、だれも迎えに来てくれないよ）

猫猫は隣の部屋の洗濯籠をもひつて、また洗い場に戻つた。

仕事はまだたくさん残つている。

好きできたわけではないが、お給金はいたでいるのでその分の働きはするつもりである。

基本は真面目、それが元薬屋猫猫である。

大人しく働いていればそのうち出られる。

まさか、御手付きになることはありえないだろう。

残念なことに猫の考えは甘かったといえる。

何が起こるかわからない、それが人生というものだ。

齢十七の娘にしては達観した思考の持ち主であるが、それでも抑えられないものがあった。

好奇心と知識欲。

そして、ほんの少しの正義感。

この数日後、猫猫はある怪奇の真相を暴くことになる。

後宮で生まれる乳幼児の連續死。
先代の側室の呪いだと言われたそれは猫猫にとって怪奇でもなんでもなかつた。

2 一人の妃

「あーあ、やつぱりそうなんだ」「ええ、お医者様が入つていったのを見たつて」

汁物をすすりながら猫猫は耳を傾ける。広い食堂には数百人の下女あさげが朝餉あさげをいただいていた。内容は汁物と雑穀ざっごの粥である。

斜め前に座っている下女が噂話を続ける。気の毒うめそうな表情をしているが、それ以上に好奇心が目めの奥で輝いていた。

「玉葉ぎょくようさまのところも、梨花りつあさまのところにも」「うわー、一人ともなんだ。まだ、半年と三か月だっけ？」「そうそう、やつぱり呪いのかしらね」

でてきた名前は、皇帝のお気に入りの妃たちの名前である。半年と三か月というのはそれぞれが生んだ宮のことである。

宮内では噂話が闊歩する。それは、帝の御手付きの宮女の話やお世かっぽ継ぎについて、はたまたいじめや僻みひがによる悪評もあれば、うだる暑さにふさわしい怪談めいたものまである。

「そうよね、でなければ三人も亡くなられるわけないわ」

それは、妃たちの生んだ子ども、つまり世継ぎとなられる宮たちのことを指していた。東宮時代に一人、皇帝になられてから一人、どちらも乳幼児のころに見まかられている。幼子の死亡率が高いのは当たり前であるが、殿上人の子が三人ともとなるとおかしい。

現在、玉葉妃と梨花妃の二人の子どもだけが生き残っている。

(毒殺ではなかろうか?)

白湯を含みながら猫猫は考えるがそれは違つと結論に至る。
三人の子どものうち、二人は公主だつたからだ。男子にのみ継承権
の与えられる中で、姫君を殺す理由などほとんどない。

前に座つてゐる一人は箸も進めず、呪いだの祟りだの言つてゐる。

(だからといって呪いはねえ)

くだらない、その一言である。呪いをかけるだけで一族郎党皆殺し
となる法がある中に猫猫の考えはむしろ異端といえる。しかし、猫
猫の頭にはそれが言い切れる根拠となる知識があった。

(なんらかの病氣か? もしかして遺伝的なもの? どうこうふうに亡
くなられたのだろう?)

無愛想で無口と言われた下女があしゃべりな下女たちに話しかけた
のはそのときだった。

好奇心に負けて後悔するのはそれからしばらぐのことである。

「くわしくは知らないけど、皆、だんだん弱つていつたんだってー」

おしゃべりな下女、小蘭シャオランは猫猫が話しかけてきたことに興味を持つ

たらしく、その後も「お医者さまの訪問回数から、梨花さまのまつが重いのかしさ」に噂話を教えてくれた。

「お医者さまの訪問回数から、梨花さまのまつが重いのかしさ」

窓の桟を絞った雑巾で拭きながら言った。

「梨花さま」「自身?」

「ええ、母子ともによ」

医師が梨花妃のまつに出向くのは、病の重さといつより東宮だからであろう。玉葉妃の子は公主である。

帝のじ寵愛は玉葉妃のまつに重いが、生まれてくる子に性差があればどちらを重きに置くかは明白である。

「さすがに詳しい症状はわからないけど、頭痛とか腹痛とか、吐き気もあるつていうけど」

小蘭は知つてこないことをすべて話すと満足したらしいへ、次の仕事に向かう。

猫猫はお礼代わりに、甘草入りの茶を渡す。中庭の隅に生えていたもので作ったのだ。薬臭いが甘味は強い。甘味を滅多に食べられないう女はとても喜んでくれた。

(頭痛に腹痛に吐き気か)

思い当る症状だつたが、決定打はない。

予測だけで物事を考えるのはいけないと、散々おやじどのから言われていた。

(ちいとばかり、行つてみるか)

「猫猫は手早く仕事を終わらせて」とこした。

後宮と一括りに言つてもその規模は広大である。常時、二千人の官女に、泊まり込みの宦官かんがんは五百をこえる。

猫猫たち下女は大部屋に十人単位で詰め込まれているが、下妃は部屋持ち、中妃は棟持ち、上妃は宮持ちと大きくなり、食堂、庭園を含めればそこいらの町よりもずっと広いのだ。

ゆえに、猫猫は自分の持ち場である東側を出ることはない。用事を言いつけられたときぐらいしか離れる暇はない。

(用事がなければ作ればいいだけ)

猫猫は籠を持つた女官に話しかける。女官の持つている籠には、上等の縄が入つており、西側の水場で洗わねばならなかつた。水質に差があるのか、それとも洗う人間の違いか、東側で洗うとすぐに傷んでしまうのである。

「中央にいるというもののすぐ隣に綺麗な宦官を見てみたい」
「それをいう必要はない。

「中央にいるというもののすぐ隣に綺麗な宦官を見てみたい」
小蘭からついでに聞いた話すると、快くかわってくれた。

色恋の刺激の少ないここでは、宦官ですら刺激の対象になるらしい。女官を辞めた後、宦官の妻になるという話はちらほら聞く。女色に比べればまだ健全なのだろうが、やはり首を傾げてしまつ。

(そのつむぎ自分もこいつなるのだろうか?)

己の問いかけに猫猫は腕を組んで唸つた。^{うな}

足早に洗濯籠を届けると、中央に位置する赤塗の建物を見る。東のはずれよりも洗練された、手の込んだ宮である。

現在、後宮で一番大きな部屋に住むのは、東宮の^じ生母梨花妃である。帝が后を持たぬ中、男児を唯一持つ梨花妃がこの最高権力者といえる。

そんな中、見えた光景はさほど市井^{しせい}と変わらないものだった。

罵る女とつむく女と狼狽^{わいねだ}える女たちと仲裁する男である。

(妓楼とあんまり変わらないな)

至極冷静な感想を持ち、第三者、つまり野次馬に加わる猫猫。

罵る女は後宮の最高権力者で、つむく女はそれに次ぐ存在、狼狽えるのは侍女たちで、仲裁に入るのはすでに男でなくなつた薬師だと、周りのささやきと風貌からわかつた。

「おまえが悪いんだ。自分が娘を産んだからって、男子の^{おのい}_{あい}吾子を呪い殺す氣だらう。」

美しい顔は歪むとそれは恐ろしいものになる。幽鬼のよくな白い肌と悪鬼のごときまなざしは、頬に手を添える美女に向けられている。

「そんなわけないとわかつていろどじょう。小鈴も同じよう^{シャオリン}に苦しんでいるのですから」

赤い髪に翡翠^{ひすい}の皿を持つ女性は、冷静に答える。西方の血を色濃く継ぐ玉葉妃は顔を上げると医者の顔を見る。

「ですでの、娘のほつ^{ほづ}の容体も見ていただきたいのです」

仲裁に入ったものの、原因は医師にあるらしい。
医者が東富ばかり見て、自分の娘を見ないことに抗議をしにきたようである。

母親としてはわからなくもないが、後宮といつ仕組みから男児優先は当然である。

医師にしてみれば、いわれのないと言いたい顔であるのだが。

(馬鹿だらう、あのやぶ)

妃一人のあんなに近くにいて氣づかないとは。いや、それ以前に知らないのか?

乳幼児の死亡、頭痛、腹痛、吐き気。そして、梨花妃の白い肌とおぼつかない身体。

ぶつぶつとひと言をつぶやきながら、猫猫は騒動の場を後にした。

(なにか、書き物はないか)

と、考えながら。

よって、通り過ぎる人物に田もくれなかつた。

「またやつてるな」

壬氏^{ジンシ}は端正な顔に憂い^{うれ}を含む。女性と見まじりの纖細な輪郭に、切れ長の目、絹の髪を布で包んで残りを背中に流している。

宮中の花たちがこんなところで騒ぎ^{さわぎ}を起こすなどはしたない、それを収めるのが彼の仕事の一つだった。

人ばかりを分けようとすると、一人だけ我関せずといふ雰囲気で歩いてくるものがいる。

小柄な下女で鼻から頬にかけてそばかすが密集している。他は目立った風貌ではないものの、自分に田もくれずなにかひとりごとをいう姿が印象に残った。

ただ、それだけのはずだった。

東宮^{とうぐう}が身まかられたという話が回ってきたのは、それからひと月もしない頃であるつか。

泣きわめく梨花妃^{リフア}は、先日よりもさらにやせ細り、大輪の薔薇^{ばら}といわれた頃の面影はなかつた。息子と同じ病に侵されているのか、それとも氣の病が重いのか。

あれでは、次の子を望むこともできまい。

東宮の異母姉である鈴麗公主レンリは、一時の体調不良から状態を持ち直し、母とともに東宮を失つた帝を慰めるようになつてゐた。帝の通いようから次の子も近いかもしれない。

同じように公主と東宮は原因不明の病にかかつてゐた。一方は持ち直し、一方は倒れた。

年齢による違いであるうづか、三か月の差とはいえ乳幼児の体力には大きく影響を受ける。

しかし、梨花妃はどうであるうづ?

公主が持ち直したのなら、梨花妃も持ち直してもいいであろう。それとも、息子を亡くした精神的なものであろうか。

壬氏は頭にぐるぐると考えをめぐらせながらも、書類に目を通して判を押していく。

なにか違ひがあるとすれば玉葉妃ヨククワのほうだろうか。

「少し留守にする」

最後の判を押し終わると、壬氏は部屋を後にした。

蒸したての万頭まんじゅうのような類をした公主は、赤子の無邪気な笑顔を見せる。小さな手のひらはぎゅっと拳を作り、壬氏の人差し指を掴ん

でいた。

「これこれ、はなしなさい」

赤毛の美女は優しく娘をおくるみに包むと、籠の中に寝かせた。赤子は暑いとおくるみをはねのけ、来訪者のほうを見ては言葉にもならない声を機嫌よく鳴らしていた。

「なにか聞いたいことでもあるようですが」

聰明な妃は、壬氏の思惑を感じ取つていてるようだ。

「なぜ、公主殿は持ち直されたのですか？」

单刀直入に申し上げると、玉葉妃はふつと小さな笑みをこぼすと、
から布きれを取り出した。

はさみも使わずに裂いた布に、不恰好な字が書いてある。字が汚いと
いうわけでなく、草の汁を使って書いたため、にじんで読みにくくなっているのだ。

『おしろこまどぐ、赤子にふれさせな』

たどたどしく書いたのもわざとあるつか？

壬氏は首を傾げる。

「おしろこですか？」

「ええ」

玉葉妃は乳母に公主を任せると、引出から何かを取り出す。
布にくるまれたそれは、陶器製の器だった。蓋を開けると、白い粉

が舞つ。

「おしりこ？」

「ええ、おしりこです」

ただ白いだけの粉になにがあるのだろうとつまむ。そういうえば、玉葉妃は元々肌が美しいのでおしりをしておらず、梨花妃は顔色が悪いのを「こまかすように塗りたべっていた。

「公主は食いしん坊でして、私の乳だけでは足りず、乳母に足りない分を飲ませてもらつていたのです」

赤子を生まれてすぐなくしたものを、乳母として雇い入れたのだ。

「それは、乳母が使つていたものです。ほかのおしりに比べて白さが際立つと好んで使つていたものです」

「その乳母は？」

「体調が悪かつたようなので暇を出しました。退職金も十分与えたはずです」

理知的で優しそうな妃の言葉だ。

おしりの中になにかしら毒があれば、どうだらう。
使うものが母親ならば、胎児に影響を与え、生まれた後も授乳の際
口に含むこともあるだらう。

壬氏も玉葉妃もそれがどんなものかわからない、ただそれが東宮を殺した毒だということは理解できた。

「無知は罪ですね。赤子の口に入るものなら、もつと気にかけてい

ればよかつた」

「それは私も同様です」

結果、帝の子を四人も失わせてしまった。母の胎内にいたものを加えたら、もつといふのかもしれない。

「梨花妃にも伝えましたが、私が何を言つても逆効果だつたみたいですね」

梨花妃は今も目にくまのはつた顔色の悪い肌をおしろいで塗りたくつてゐる。それが毒とも知らずに。

壬氏は生成りの布きれを見る。不思議とどこかで見覚えがあるような気がする。

たどたどしい字は、筆跡を「まかすより」とも見える。しかし、どこかしら女性的な文字に見えた。

「いつたい、だれがこんなものを」

「あの日、私が薬師に娘を見てもらひよつていつたときです。結局、貴方の手を煩わせただけの後、窓辺に置いてありました。しゃくなげ石楠花の枝に結んで」

では、あの騒動が原因でなにかしら氣づいたものが助言したというのだろうか。

「いつたい、だれが。

「宮中の医師はそのような遠回しなことをしないでしょう
「ええ、最後まで東宮の処置がわからぬいよつでしたから」

あのときの騒動。

そういえば、野次馬の中にひとつわれ関せずといつ下女がいたというのを思い出した。
なにかをぶつぶつ言っていた。

なにを言っていた？

『なにか、書き物はないか？』

ふと、なにかが頭の中につながった。
くくくと、笑いがこぼれる。天女のような艶やかな笑みが浮かんだ。

「玉葉妃、この文の主、見つけたらどうなさいます？」
「それはもう、恩人ですもの。お礼をしなくてはね」
「了解しました。これはしばらく預かってよいですか」
「朗報を期待します」

壬氏はさわり心地のある布に記憶をたどらせた。

「寵妃の願いとあらば、必ずや見つけねばならぬな」

天女の笑みに、宝探しをする子どもの無邪気さが加わった。

4 天女の微笑（前書き）

役職とか規則とか深く考えずに読んでいただけたと助かります。

4 天女の微笑

東宮とうぐうが身まかられたのを知つたのは、夕餉ゆうげの際に黒い帯が配られたときだつた。

喪に服す意味合いで七日間つけるのである。

その際、食事にはただでさえ少ない肉類が全くなかつたので口をとがらすものもいた。

端女はしょめの食事は一日一回、雜穀ざくごくと汁物、時折、菜さいが一品振舞われる程度である。やせぎすの猫猫マオマオには十分な量であるが、足りないとと思うものがほとんどだらう。

下女と一括りにいつてもいろんなものがいる。

農民出身のものもいれば、町娘もあり、数は少ないものの官の娘もいた。親が官であればいくらか待遇はいいはずだが、それでも下働きの理由となると本人の素養の問題である。文字の読み書きもできないものを部屋持ちの妃にできるわけがない。妃というのは、職業である。

(結局、意味なかつたのか?)

猫猫は東宮の病の原因を知つていた。

梨花妃リファと侍女たちは真つ白なおしろいをふんだんに使つていた。庶民には手を出せない高級品だ。

それは妓楼ひいろうの高級遊女たちも使つていた。一晩で農民一生分の銀を稼ぐ妓女けいじょもいる、自分で買つものもいれば、貢物ブランケットにもらつものもいた。

顔から首にかけて真っ白にはたかれるそれは、妓女の身体を蝕み、幾人かを死に至らしめた。

おやじが「やめろ」といつても使い続けたからだ。

やせ細り、衰弱して死んでいく妓女を猫猫はおやじのそばで幾人も見てきた。

命と美貌を天秤にかけ、結局どちらも失ったのだ。

だから手短な枝を折り、簡単な文を書いて二人の妃の元に置いた。まあ、紙も筆も調達できない端女の書いた警告を信じるとは思えなかつたが。

喪が明けて、だれも黒い帯が見かけられなくなつた頃、玉葉妃ギョクヨウヒの噂を聞いた。東宮を失い、傷心の帝は、生き残つた公主を慈しんでいるらしい。

同じくわが子を失つた梨花妃リファのもとに通う話は聞こえない。

(都合のこと)

猫猫は魚のかけらがほんの少し入つた汁を飲み干すと、食器を片づけて仕事場に向かった。

「呼び出し、ですか？」

洗濯籠を抱えた猫猫は宦官に呼び止められた。

中央にある宦官長の部屋に来いのこと。

宦官とは、後宮を大きく分ける三部門の一つであり、下位に位置する女官のことをいう。他の二つ、部屋持ちの妃たちは内官、宦官は内侍省にあたる。

(なんの用だらう?)

宦官は周りの下女にも話しかけている。ビリやう自分だけではないらしい。

きっと人出が足りないのだらう。

猫猫は籠を部屋の前に置くと、宦官の後について行った。

宦官長の棟むねは後宮と外部をつなぐ四門のうち正門のそばにある。帝が後宮に訪れる際、こここの門を必ず通る。

呼び出されたとはいえ、あまり居心地のいい場所ではなかつた。ようは頭ずが高いといつものである。

隣の内官長の棟に比べ幾分劣るもの、中級妃の棟よりも豪奢な造りである。欄干の一つ一つに彫り物が施されており、朱の柱には鮮やかな龍が巻き付いている。

促されるまま部屋の中に入ると、大きな机がひとつあるだけで存外殺風景であった。中には猫猫たち以外の下女が十人ほど集まつてお

うなが

り、不安となにかしらの期待とそしてどこか興奮したような表情を浮かべている。

「はー、ここまで。おまえらは帰つていーぞ」

(あれ?)

なぜだか不自然に区切られてしまった。猫猫のみ部屋に入り、残りの下女はいぶかしげに帰つっていく。

定員というには部屋はまだ広いようであるが。

猫猫は首を傾げなら、周りを見ると女官たちの視線が一つに集まっていることに気付く。

部屋の隅に立たぬように座る女性と、それに仕える女官、少し離れて年嵩のいった女性がいる。中年の女性は富士長であると記憶しているが、それよりも偉そうな女性は何なのだ？

(むむ?)

女性にしては肩幅が広く、簡素な服を着ている。髪を巾でまとめ、残りを下ろしている。

(男なのか?)

天女のよつな柔らかい笑みを浮かべ女官たちを見ている。富士長が赤くなっている。

なるほど、皆が頬を染めるわけがわかる。

噂に聞いていたものすゞく美しく、面面とこののはこの馬の」とだらうと猫猫は思った。

絹糸のような髪、流れるような輪郭、切れ長の目と柳のよつた眉を持つた絵巻物の天女もこれほど美しくはあるまい。

(もつたいないなあ)

顔を染めることなく思つたのがそんな言葉である。大切なものがなくなつてしまつたので、子を成せないわけだ。あの男の子どもであれば、どれほど鑑賞に優れたものが生まれよう。

しかし、あれだけ人間離れした美貌があれば、皇帝も籠絡することもできるだろうと、不遜なことを考えていると、男は流れるような動きで立ち上がつた。

机に向かい、筆をとると優美な動きでなにかをさりとじと書く。ついに甘露かんろのよつた笑みを浮かべ、男は書き物を見せた。

猫猫は固まつた。

『そこのそばかすの女、おまえは居残りだ』

要約すればこんなことを書かれていた。

猫猫の動きを見逃さなかつたのだろう。満面の笑みが浮かんでいた。

男は書き物をしまつと、手のひらを二回叩いた。

「今日はこれで解散だ。部屋に戻つていいぞ」

下女たちはいぶかしみながら、後ろ髪ひかれながらも部屋を出る。先ほどの書き物が何の意味を示しているのかわからないます。

部屋を出る下女たちが皆小柄で、そばかすの田立つ容貌をしていることに猫猫は気が付いた。しかし、書き物を見ても何の反応も示さなかつたのは読めなかつたのだろう。

あの書き物は猫猫を指していたものではなかつた。

他の下女とともに部屋を出ようとすると、がつしりと手のひらが肩に食い込んでいた。

恐る恐る振り向くと、まぶしくて目がつぶれるような天女の笑みがあつた。

「ダメじゃないか。君は居残りだよね」

いつまでもなく有無を言わざなかつた。

「不思議だよねえ、話に聞くと君は文字が読めないってことになつてるんだけど」

「はい、卑賤ひせんの生まれでございまして。なにかの間違えでしょ？」

(誰が教えるか)

とは、口が裂けても言わない。
しらばつくれる気満々である。

文字が読める、読めないで下女の扱いはそれぞれ違う。読めるほう
が読めるほうで、読めないほうは読めないほうで役に立つのある
が、無知なふりをしていたほうが世の中立ち回り安いのである。

美しい宦官かんがんは壬氏ジンシと名乗つた。

虫も殺さないような優美な笑みなのに、なにやら蟲ムカシくものを感じる。
でなければ、いつして猫猫マオマオを窮地に立てることはできません。

壬氏は黙つてついてこいといつた。

首を横に振れば、軽く首がとぶ使い捨ての端女はじためは素直についていく
しかなく、なにがこれから起るのか、それをどううまく対処する
のか思いをめぐらせていた。

こじして壬氏に連れて行かれる理由に思い当らないわけではなかつ
たが、どうしてそれがばれたのか不思議だった。

妃に文を送つたこと。

わざとらしく壬氏の手には、布きれがあつた。それには、汚いたど

たどしい文字が書かれていた」とあります。

字が書けることは誰にも黙つていたし、薬屋をしていて毒物に詳しいことも黙つている。いつまでもなく、筆跡でばれることはない。

周りを確認して置いてきたはずだが、誰かに見られていたといつことだらうか。

小柄でそばかすのある下女に田安をつけたのだ。
まず、先に文字が書けるものを集め、筆跡を集めに違いない。字
とこつものは崩して書いてもくせが残るものである。

その中に適合者がいないとなると、次は文字を書けないものを集める。

読める、読めないの判断は先ほどの通りである。

(なんて疑い深いんだ。ってか暇人すぎるだろ)

悪態をついていたのに田地に到着した。
案の定、ギョクヨウ玉葉妃の住まい富貴であった。

壬氏が扉を叩くと、凛とした声が短く「ビリビリ」とこつた。

中に入ると赤い髪の美女が柔らかい巻き毛の赤子を愛おしそうに抱いていた。

赤子の頬は薔薇色で、母親譲りの色素の薄い肌をしている。
健康そのもので、半開きの口から可愛らしい寝息が聞こえる。

「かのものを持ちました」
「お手数をかけました」

先ほどの崩れた口調ではない。
分をわきまえた言動である。

玉葉妃は壬氏とはまた違つた温かい笑みを浮かべると、猫猫に頭を下げる。

猫猫は驚いて皿を見開く。

「そのようなことをされる身分ではございません」

失礼のないよう、言葉を選びながら述べる。

「いいえ。私の感謝はこれだけではあります。やや子の恩人です
もの」「なにか勘違いなされているだけです。きっと人違いではあります
んか」

冷や汗をかく。

丁寧に言つたところで否定といつては変わりない。
首ははねられたくないが、関わり合つこにもなりたくない。長いもの
に巻かれたくないのである。

玉葉妃が少し困った顔をしたのに気付いた壬氏は、ぴらぴらと布きれを見せつける。

「これは下女の仕事着に使われる布だつて知っていますか?」
「そういえば、似ていますね」

あくまでしらばっくれる。

無意味だとわかつていても。

「ええ、尚服に携わる下女用のものですね」

宮富は六つの尚に分けられる。衣服に携わるのが尚服で、洗濯係を主とする猫猫はそこに分けられる。

生成りの裳スカートは、壬氏の持っている布と同じ色をしている。裳の内側、ひだでうまく隠れている部分に、奇妙な縫い目があることも調べればわかることだろう。つまり、証拠はその場にあるということだ。

壬氏が玉葉妃の前で無礼な真似をするとは思わないが、しないとも限らない。

覚悟を決めるしかなかった。

「私は何をすればよろしいのでしょうか？」

一人は顔を見合わせると、肯定の意味でとらえた。

どちらも、田がつぶれるほどの優しい笑みを浮かべる。

安らかな赤子の寝息が聞こえる中で、猫猫は消え去りそうな小さなため息をついた。

猫猫は翌日から、ほとんど何もない荷物をまとめなくてはならなか

つた。

小蘭シャオランや同部屋のものは皆つらやましやつにしてくる。
どうして、そうなつたのか追及してくれる。

猫猫は乾いた笑みを浮かべはぐらかすしかなかつた。

猫猫チャウフは、皇帝の寵妃ちゅうひの侍女となつた。

まあ、いわゆる出世である。

6 毒見役

部屋付の女官、しかも帝の龍妃ちようひの侍女ともなれば、待遇は高くなる。今まで金字塔ジンジタツの底辺にいた高位は真ん中くらいまで上がっている。説明によると、給金も跳ね上がっているらしいが、その一割は実家こと、売り飛ばされた先の商家に入る。

今までのたこ部屋でなく、狭いながら一室を与えられた。
菰こもを重ねて敷布シツブをかけただけの布団から、寝台つきに階級が上がった。寝台二つ分の広さしかない部屋であるが、朝同僚の身体を踏まず起きることができるのは正直うれしかった。
うれしい理由はもう一つあるのだが、これは後程わかる。

ギョクヨウ
玉葉妃の住まう翡翠富ひすいきゆうには、**猫猫**マオマオ以外に四人の侍女がついている。
公主リフアが離乳食を取り始めたので、乳母を新たに雇うことはなかつた。
梨花妃が十人以上つけているのに比べると、随分数が少ない。

正直、最下層の小間使いだったのがいきなり同僚になりましたといわれて侍女たちは難色を見せたのだが、猫猫が思つような嫌がらせはなかつた。
むしろ、同情的な目で見られていた。

(なぜに?)

その理由はすぐにわかつた。

やくせき

薬膳をふんだんに使つた宮廷料理が皿の前にある。

玉葉妃の侍女頭である紅娘は、菜を一つずつ小皿に盛ると猫猫の前に置いた。

すまなそつに玉葉妃がこちらを見ているが、止める様子はない。残り三人の侍女たちは、哀れな目でこちらを見ている。

毒見役というものである。

東宮のことでも、神経質になつてゐる。

公主が病になつたのもどこからか毒が紛れ込んでいたのではないかといつ噂が回つていたからだ。毒の元を知らされていない侍女たちは、何に紛れ込んでいるかわからない毒を恐れていたに違いない。

そこで、毒見役専門に下女が送られてきたのなら、使い捨ての駒としてみてもおかしくない。

玉葉妃だけではなく、公主の離乳食、皇帝訪問の折の滋養料理も毒見のつちに含まれる。

玉葉妃の懷妊がわかつた頃、一回ほど毒が盛られていることがあつたらしい。一人は軽いものですから、もう一人は神経をやられて手足が動けなくなつてゐる。

今まで恐る恐る毒見役をやつてきた侍女たちは、正直、感謝をしていることだらう。

猫猫は盛られた皿を見ると眉を寄せた。陶器製の皿だ。

(毒が怖いなら銀にあるのは基本でしょ)(元ひ)

箸でつまむとしますの具をじっくり見る。

匂いを嗅ぐ。

舌の上のにてせじ、しびれがないのを確かめるとゆくへり嚙下した。

(正直、毒見に向かないのだが)

即効性の毒ならともかく、遅行性の毒であれば猫猫に毒見を頼んでも意味がないのである。

実験と称し、少しずつ毒に慣らした身体を作ってきた猫猫は、おやらく多くの毒は効かなくなっていることだらけ。

これは、薬屋の仕事としてではなく、猫猫の知的欲求を満たすための行為である。時代と場所が違えばきっと同じ呼ばれていることだらけ、『狂科学者マッドサイエンティスト』と。

薬師の技術を教えてくれたおやじどのすみ、呆れてくるほどだった。

身体の変化ではなく、自分の知識の中であそれらしい毒はないと確認すると、ようやく玉葉妃の食事が始まる。

次は、味気ない離乳食の番だった。

「皿は銀製のものに替えたほうがよろしいと思っています」

感情をこじめることなく上司の紅娘に伝えた。

一日の活動報告として、紅娘^{ホンニヤン}の部屋に呼び出されたのだ。部屋は広いが華美な装飾はなく、実用的な彼女の人柄を表しているようである。

三十路を前にした黒髪の美しい侍女頭は溜息をつく。

「ほんと、H氏^{エイジ}さまのこいつたとおりね」

呆れた顔で、わざと銀食器を使わなかつたことを告白した。
H氏の指示だつた。

おやじく毒見役にするように命じたのもあの男だらけ。

猫猫は無愛想な顔がさうに機嫌悪くなるのをじりえながら紅娘の話を聞く。

「あなたがどうこう理由で、その知識を隠していたかしらないけど、まさに毒にも薬にもなる能力ね。字が書けることも言つていれば、お給金はもつともらえたはずだけど」

「薬屋の真似事を生業にしていたからです。かどわかされて連れてこられたのに、人さらいどもに今も給金の一部が送られていると考へると腸^{はらわた}が煮えくり返ります」

感情が高ぶり、少々荒い言葉になつたが、侍女頭は咎めることはなかつた。

「つまり、自分の給料が減つても、そいつらに酒代を取^とえてなるものかということね」

賢い女官は猫猫の動機を理解してくれたらしく。

「無能なら一年の奉公でいくらでも替えがきくものだしね」「つこでに理解しなくていいところまで、察してくれた。

紅娘は卓子の上にある水差しを取ると、猫猫に持たせた。

「これね……」

猫猫がたずねる間もなく、彼女の手首に痛みが走った。衝撃で持たされた水差しが床に落ちる。陶器製のそれに大きなひびが入る。

「あら、これって結構高いのよ。下女程度のお給金じゃあ、払えないくらいにね。これじゃあ、実家への仕送りもできないわね。むしろ請求するくらいじゃないと」

猫猫は紅娘がいわんとしていることがわかつたらしく、無表情の中に皮肉めいた笑みを浮かべていた。

「もうしけわけあつません。毎月、仕送る分から差し引いてください。足りなければ、私の手持ちのほうからもお願ひします」

「ええ、富面長のところで手続きしておくから。それと」

紅娘は落ちた水差しを卓子の上に置き、引出から木簡を取り出した。それをじっと筆を滑らせる。

「これは、毒見役の追加給金の明細よ。危険手当とこいつね。気になる点があれば、言つてけよつだい」

金額は、猫猫の現在の給料とほぼ同額だった。手数料でとられる分

がないだけ、猫猫は得したことになる。

(餅の使い方がうまいこと)

猫猫は深く頭を下げるといふことをあとこした。

元々いた四人の侍女たちはたいへん働き者であった。

広さはそれほどないものの、翡翠宮はほぼ四人で回っている。尚寝、つまり部屋掃除専門の下女も来るのだが、寝所はもとより内部の掃除はすべて四人の侍女たちで終わらせる。

ちなみに、本来の侍女の仕事の区分を外れてい。

なので、新参者の猫猫^{マオマオ}の仕事は「飯を食べる」とくらいしかないわけだ。

一番嫌な仕事を押し付けたことに罪悪感を持つているのか、それとも自分の領域^{テリトリー}を荒らされたくないのか、紅娘^{ホシニヤン}以外の侍女は誰も猫猫に仕事を押し付けることはなかった。むしろ、手伝おうとするのを「いいのよ」とやんわりと断つて、部屋に押し込めていた。

(落ち着かない)

小部屋に押し込まれて、呼ばれるのは一回の食事と毎の茶会、そして数日に一度訪れる帝の滋養強壮料理を食べることくらいである。たまに、紅娘が気をきかせて用事を頼むのだがすぐに終わる簡単な仕事だけである。

(なにこれ、食つちや寝だろ)

毒見に加えて、食事も以前より豪華になつた。茶会には甘い菓子があり、余れば猫猫にも配られる。蟻^{あり}のように働くことがなくなつたので、栄養はそのまま肉になつていつた。

(家畜にでもなつた氣分だ)

毒見役をやるにあたり、猫猫に不適な点はもう一つある。猫猫はもとから瘦せているので、毒にあたって痩せたとしてもわりにくいからだ。

それに致死量は体の大きさに比例する。太ればそれだけ生き残る可能性が高くなる。

猫猫としては痩せるほどの毒がわからないわけではなく、致死量をこえて生き残る自信があるので周りはそうでないらしい。小柄でやせぎすな猫猫は幼く見えるらしい、可哀そつな使い捨ての駒に三人の侍女たちは同情していた。

お腹いっぱいでも粥はおかわりをつがれ、菜の具は他のものよりも多い。

(妓樓の小姐たちを思い出す)
ねえちゃん

無愛想で無口で可愛げのない生き物であるはずが、なぜか遊女たちに可愛がられていた。「ことあるごとに、菓子を持たされ、飯を食わされた。

・・・ちなみに猫猫は氣づいていないようであるが、可愛がられる理由はあつたりする。

猫猫の左腕には無数の傷がある。

切り傷、刺し傷、火傷の痕に針のようなものが刺された痕。小柄でやせぎすで腕には無数の傷。

よく腕から包帯が巻かれ、たまに青白い顔で往来で倒れることもあつた。

無愛想で無口なのも彼女が今まで受けたいた仕打ちの結果だと皆が涙を飲んだ。

皆、虐待を受けているものだと思つてゐるようだが、眞実は違う。

全部、猫猫本人がやつたことだ。

傷薬や化膿止めの効能を調べ、毒を少しづつ飲み耐性をつけ、時に自分から毒蛇を噛ませることもあった。たまに量を間違えて、倒れることもあった。

ゆえに傷は利き腕でない左にのみ集中している。

別に痛みが好きという被虐的な趣味はかけらもないが、知的欲求が薬と毒物に傾きすぎている点でごく普通の娘とはかけ離れていた。

そんな娘を持つて迷惑きわまりないのがおやじどのである。

花街に暮らす自分の娘が遊女以外の道を進めるようにと、薬の知識と文字を教えたといふのに、いつのまにいわねなき誹謗中傷を受け るようになった。

一部のものは理解していたが、多くのものはおやじどのに冷たい眼を向けていた。

年頃の娘が、実験と称し自傷行為を繰り返すなど思いもしない。

などというわけで、親に虐待された拳句、後宮に売りとばされ、使い捨ての毒見にさせられた哀れな娘と皆に思われている。

そんなことはつゆ知らず - -

(こままでは豚になる)

そんなことを考えるよくなつた頃、猫猫の前に嫌な訪問者が現れ

るのであつた。

人間離れした美貌を持つ青年は、天上人の笑みをたやすく浮かべていた。

三人の侍女は頬を染めながら客人を迎える茶を用意する。壁の向こうから小競り合いが聞こえるところをみると、だれが準備するのか言い争っているらしい。

呆れた紅娘ホンニヤンは自ら茶器を用意すると、三人に部屋に戻るよう指示した。

毒見役の猫猫は銀の茶椀を持つと匂いを嗅いで口に含んだ。

さつきから壬氏ジンシがずっとこっちを見ているので居たたまれない。目線を合わせないように田を細める。

若い娘であれば、たとえ宦官かんがんであるうともこれだけの美丈夫に見つめられて悪い気はないはずだが猫猫はそうではない。興味が他人のそれよりもずれたところにあるため、壬氏が天女のようく美しいと理解していくも、一線を引いてみている。

「これは貴いものなんだが、味見してくれないか？」

籠のなかに、包子パオズが入っている。猫猫はつまんで中を割つてみると、餡にひき肉と野菜が詰まっている。

匂いを嗅ぐと「いかで嗅いだことのある薬草の匂いがした。

「昨日食べた強壮剤と同じものだ。

「セイイイケル催淫剤入りですね」

「食べなくてもわかるんだ」

「健康には害はありませんので、お持ち帰りください。美味しいいただいてください」

「いや、貰つた相手を考えると素直に食べれないもんだろ」

「ええ、今晚あたり訪問があるかもしませんね」

淡々と述べる猫猫に、想像したものと当てが外れた王氏はなんともいえない顔をしている。知つていて催淫剤入りの饅頭まんじゅうを食べさせようとしたのだ、毛虫を見るような目で見ないだけましながらある。ところどころでどんな相手からもらつたものであろう。

一人のやり取りに、玉葉妃は鈴の鳴るよつた声で笑う。足元には寝息を立てる小鈴公主シャオリンがいる。

猫猫は一礼すると密間マジマジをあとアフタしあわす。

「ちよつと、待つた」

「なにか御用でしようか?」

王氏は玉葉妃と目を合わせ、一人は頷いている。どうやら、猫猫が来る前に本題は伝えられてアツメテるようだ。

「媚薬を作つてくれないか?」

一瞬、猫猫の瞳に驚きと好奇の目が浮かんだ。

その薬をどう使うのかは知らないが、それを作る過程は猫猫にとつて至福の時に違ひなかつた。

唇が笑みを作るのを押さえつつ、猫猫はこう述べた。

「時間と材料と道具。それがあれば」

媚薬に準ずるものなら作れます、と。

どうしたものか。

柳の眉に憂いをひそめ、腕を組んでいる。
性別さえ違えば傾国けいこくになるといわれた壬氏ジンシであるが、本人がその気であれば性別など意味がないものといえる。

今日もまた後宮の中級妃ひとり、下級妃ふたり、殿中でも武官と文官ひとりずつに声をかけられた。武官には強壮剤入りの点心までいたので、今日は夜勤を行つことなく宮中の自室に戻つてはいる。自衛のためであり、さぼりではない。

机の上にある巻物にわらうと以前を書く。

今日声をかけてきた妃たちの名前である。帝の御通りがないからといつて、違う男を寝所に引き入れようなど甚だしい。正式な報告ではないものの、今後、沙汰さたが下ることであろう。

自分の美貌が女官たちの試金石だということを籠の小鳥たちは幾人わかっているだろうか。

妃の位は、まず両親の家柄に加え、美しさ、賢さを基準に選ばれる。家柄、美貌に比べ、賢さというのは難しい。国母となるにふさわしい教養を持ち、それに加えた貞操観念も持ち合わせねばならない。

意地の悪い我が皇帝は、選出基準に壬氏ジンシを用いた。

ギョクヨウ
玉葉妃リハと梨花妃リハを薦めたのも壬氏である。玉葉妃は思慮深く謙虚である、梨花妃は感情的な性格があるものの誰よりも上に立つにふさ

わしい気質を持っている。

どちらも皇帝に対する忠誠を持ち、邪まな感情は見当たらなかつた。梨花妃に至つては心醉の域に達していた。

わがあるじ
吾主ながらひどいかたである。

自分に国に都合のよい妃を揃えさせ、子を産ませ、その能力がないとあらば切り捨てる。

今後、寵愛は玉葉妃に傾き続けるであろう。幽鬼のようにやせ細つた梨花妃の元に通つたのは、東宮が亡くなつたときが最後だつた。

梨花妃以外にも必要のなくなつた妃は幾人もいる。それらは、折をみて実家に帰され、また下賜される。

重ねられた書類を一枚引き抜いた。
位は正四品、中級妃にあたる。名を芙蓉フヨウといつた。

先日、異民族を撃退した勳功くんこうとしてとある武官に下賜されることになつた妃である。

「さてさて、上手くいくことでしょうか？」

己の頭の設計通りに事を運べば、問題はないはずである。

それには、無愛想な薬師どのの協力がいくらか占めているかもしない。

自分を欲情の相手としない人間は皆無ではないが、毛虫のごとく見られたのは初めてである。

本人は上手く隠したつもりだろうが、表情にうつすら浮かんだ侮蔑ぶべつ

の田は隠しきれていない。

思わず笑いがこみ上がる。天上から落ちる甘露のよつな笑みに少し
だけ底意地の悪さをまじえて。

別に被虐嗜好はないのだが、妙に面白かった。新しい玩具おもちゃを手に入
れた気分である。

「今後、どうなることやら」

壬氏は書類を硯すずりの下に置くと、眠りにつくことにした。
夜中、訪問者が来ても問題ないよう、施錠はしっかりとかけて。

万能薬という言葉はあるが、実際万能である薬は存在しない。
おやじどの言葉に反感を持っていた頃が猫猫マオマオにもあった。

どんな病にも、どんな人間にも効く薬を作りたい。そんなわけで、
他人が目を背けたくなる傷を作り、新しい薬を開発してきたのであ
るが万能である薬はいまのところ完成の日途はない。

大変気に食わないことであるが、壬氏の持ってきた話は猫猫の興味
を持たせるに十分であった。

後宮に入つてからといふものの、甘茶くらいしか作れなかつたのだ。
材料になる薬草は驚くくらい後宮内に生えていたのだが、道具もなく、大部屋で怪しげな行為もできずに我慢してきたのだ。
小部屋になつて一番うれしいのはそこのことらだらう。

材料の調達にとでかけるが、表向きの理由として洗濯籠を背負う。紅娘の計らいで、今後洗濯係は猫猫になろう。

洗濯ものを届けに来たふりをして、前もつていわれていた医務室に入る。中には、以前、狼狽えるしかなかつたあの医者と、王氏によくつこっている宦官がいた。

医師は薄いじょうのよつなひげを触れながら、值踏みするよつな目で猫猫を見る。

なぜこんな小娘が自分の領域を荒らすのだと言わんばかりだった。

(醜女をあまりじろじろみないでくださいまし)

医者に比べて宦官は主に接するよつこ寧な動きで猫猫を案内する。

三方を薬棚で囲い込まれた部屋に入れられたとき、猫猫は後宮にきて一番の笑みを浮かべていた。頬は赤く染まり、眼はうるみ、一字字だつた唇が柔らかい弧を描いている。

宦官が驚いた表情で猫猫を見るが、そんなの関係なかつた。

引出の見出しを眺め、珍しい薬を見つけるなり踊るような奇妙な動きをする。喜びがあふれ出で、頭の中で納まりきれなかつた。

「なんかの呪いか、なにかか？」

小一時間そんなことを繰り返したところだつた。

いつのまにか現れた王氏が奇異の目で猫猫を見ていた。

引出の端から順につかえそうな材料を集め。それぞれを薬包紙に包み、筆で名前を書く。まだ木簡が書物として使われる中で、ふんだんに紙を使うことは贅沢である。

「じょひげの医師は、何者だとのぞいてくるので、^{ガオシヨン}口を開めた。宦官の名前は高順」というらしい。

引出が高ことじるにあるのは、高順がとつてくれる。その上司はなにもしない、しないならどこかにけよ、と無表情の奥に猫猫は思つ。引出の一一番上に、猫猫は見覚えのある名前をみつけ身を乗り出した。

高順に手渡されたそれをみると、なんともいえない表情をする。

何かの種子が手のひらにまつっている。

「これだけじゃあ、足りない」

「ならば、用意すればいいだけのことだ」

無駄に笑顔を振りまいてみていただけの美丈夫は簡単に言つてくれる。

「西の、さりに西の南方にあるものですよ

「交易品を探せば見つかるだらう

壬氏は種子を一つつまむ。^{あんじゆ}杏仁に似た形をしたそれは、独特の匂いを発していた。

「これはなんとこうんだ?」

青年の質問に猫猫は答える。

「可可オ? です」

と。

9 可可？（前書き）

玉露で酔つぱらう人たちがいた頃の話です。

9 可可？

「お前の腕が想像以上のものだということがわかつた」

壬氏ジンシは呆れた声で猫猫にいった。

「私もここまでとは思いませんでした」

目の前の惨状になかば放心していた。

「ああ、そうだな」

いつもの無駄に輝いた笑みはない。
ただただ疲れた顔をしている。

「どうしてこうなったんだ」

それは、数時間前にさかのぼる。

届けられた可可カカオは、種子のままでなく粉末になつたものだった。
他に材料として猫猫マオマオが頼んだものはすべて翡翠宮ひすいきゅうの台所に運び込まれている。

三人の侍女たちは野次馬根性で眺めていたが、紅娘ホンニヤンが注意するとそれぞれ元の持ち場に帰つて行つた。

牛乳、^{バター}乳酪、砂糖、はちみつ、蒸留酒に乾燥した果実、匂い付けの香草油。どれも栄養価の高い高級品であり、同時に強壮剤として利用されるものである。

猫猫は一度だけ可可^{カカオ}を食べたことがあった。粉を練つて砂糖を混ぜ固めたもの、巧克力^{チョコレート}とくれた遊女は言った。

指先ほどのかけらだが、食べるときつめの蒸留酒を飲み干した気分になつた。妙に気持ちが明るくなつた。

邪な客が売れつ子妓女の関心をかうために珍しい菓子だといって渡したものである。残念なことに、様子の違う猫猫を見て、妓女は怒り、やり手婆に入入り禁止を食らう羽目になつたといつ。

その後、種子をいくつか手に入れることはあつたが、それを薬として扱うことにはなかつた。

花街の薬屋にそんな高級品を求める客はいなかつたのだ。

記憶の中の巧克力^{チョコレート}は油脂で固めたものだと残つてゐる。薬や毒物の匂い、味を完璧に覚えていたる猫猫は、食材に関しても鮮明な記憶を持つてゐる。

まだ暑い季節であり、^{バター}乳酪でうまく固められるとは思えないのに、 果実を包み込むことにした。氷があれば完璧なのだが、さすがにそれは無理だろうと材料の中に入れなかつた。

代わりに大きな素焼きの水瓶を用意する。水が半分ほどはつてある。水の蒸発により内部は外気より幾分涼しく、ぎりぎり油脂が固まる温度だらう。

猫猫はかき混ぜたそれを匙^{さじ}ですくい、口に含む。

苦味と甘味と他に気持ちを高揚させる成分が舌を通じて感じる。

昔に比べて、酒にも毒にも強くなつた猫猫は、以前ほど高揚した気分にならなかつたが、それでも効き目が強いと感じられた。

(もう少し小さくつづたほうがいいかな)

果実をさらに半分に切り、褐色の液体に浸す。
皿このせ、中空に浮かすよう壺の中にしまつ。

蓋をかぶせ、菰^{いも}で隠すとあとは固まるのを待つだけである。壬氏^{ジンシ}がそれを取りに来るのは夕刻のことでの、それまでに固まつているだろ?。

(少し余つたなあ)

褐色の液体はまだ残つている。材料はとても高級品だし、栄養価も高い。媚薬^{パン}といつても、猫猫にはそれほど効くものでもないので、後で食べることにした。麺麪^{パン}を立方体に切り、しみこませる。これならば、冷やす必要もなさそうだ。

蓋をし、棚に置く。

残つた材料はまとめて自室に置き、洗い物をするために外の水場に向かつた。

このとき、切り分けた麺麪^{パン}も自室に運び込むべきだったが、頭の中からはずれていた。味見で少し高揚していただせいかもしれない。

まあ、後の祭りである。

その後、紅娘^{ホンニヤ}に用事を頼まれたり、ついでに外に生えている薬草を摘みにいつたりしている間に事は起こっていた。

洗濯籠に薬草を抱えてぼくぼくしている中、真っ青な顔をした紅娘と、憂いを含んだ玉葉妃^{エムカヨウヒ}が待っていた。高順^{ガオシュン}もいることから、壬氏^{ミナハ}も来ているのだろう。

額を押さえる紅娘が台所をさしているのを見て、猫猫は籠を高順に押し付け現場へと向かつた。

呆れ顔の壬氏^{ミナハ}がこちらを見る。

仲良く抱き合つよつて踞る三人の侍女たちがいた。胸元ははだけ、裳はふくらはぎまでめぐれていた。皆が皆、幸福そうな顔で頬は紅潮している。

事前とか事後とか、不遜な言葉が頭をよぎつたが、考えないようになした。

むしろ考えたくなかつた。

まあ、女同士だし最悪のことにはなつていなければ、たぶん。

卓の上には、褐色の麺麪があつた。
数は三つ足りなかつた。

紅娘と高順と猫猫で侍女たちをそれぞれの部屋に寝かせると、疲れがどつときた。

居間では玉葉妃と王氏が物珍しそうに巧克力麵麌チョコパンを眺めている。

「これが、例の媚薬なの？」

「いいえ、こちらのほうです」

猫猫は果実を包んだものを差し出した。親指の爪ほどの粒が二十ほど並んでいる。

「じゃあ、こいつは何なんだ？」

「私の夜食です」

言葉を間違つたらしく、明らかに周りが引いている。高順や紅娘も異物を見る目をしていた。

「酒や刺激物に慣れていますと、効き目はそれほどありません

実験に使つた毒蛇を酒に漬けて飲んでいたので、猫猫は酒豪おじやくだった。酒は薬の一つだと猫猫には分類される。

しげしげと、麵麌をつまんで見る王氏。

「では、私が食べても問題ないのかな

『それはおやめください……』

紅娘と高順の声が重なった。高順の声を初めて聞いた気がする。

壬氏は冗談だよ、と麺麪を皿に置いた。

たしかに、皇帝の籠妃の前で媚薬を口にするのは不遜であるが、それ以上に間違つても天女の美貌が頬を染めながら迫つてきたり誰しも理性のたがが外れかねないためであろう。

「今度、帝のために作つてもうおつかしい。まんねりを防ぐためにも」

「こつもの強壮剤の三倍は効くと思ひますけど」

「三倍……」

持続のほつかしさ、と玉葉妃の小声は聞こえなかつたこととする。さすがにきついらし。

媚薬を蓋付きの容器に移し替え、壬氏に渡す。

「効き目が強いので、一粒ずつを口安にお願いします。食べ過ぎると血が回り過ぎて、鼻血が出ると思ひますので。また、意中の相手と二人きりのときに使用してください」

注意事項を終えると壬氏は立ち上がる。

帰り支度をするため、高順と紅娘は部屋を出る。

玉葉妃も一礼すると、籠の中で眠る公主とともに部屋を後にした。

猫猫は麺麪の皿を片付けようとすると、後ろから甘い匂いがした。

「思つた以上のものを作つてくれてありがと」

甘いはちみつのよくな声が聞こえる。

髪をすくい上げられ、首になにか冷たいものが当たつていた。

振り返ると、片手を振りながら王氏が部屋を出していく。

「なるほど」

皿に目を落とすと、麺麭の数が一つ足りない。犯人の目安はついている。

「被害者がでなければいいけど」

他人事のように猫猫は呟いた。

夜はまだ長い。

寵妃、玉葉に仕える侍女が一人、桜花は、今日も誠心誠意をこめて仕事に従事していた。

先日、仕事中に居眠りをしてしまうといつ失態を犯したが、主である玉葉妃は咎めもしなかった。ならば身を以つて仕えるしかあるまいと、窓の桟から欄干の一本一本まで丁寧に掃除する。

本来、侍女にあるまじき行為であるが、それでも桜花は下女の振る舞いをする。働き者が好きだと、玉葉妃が言ったからだ。

台所の茶器を整理しようと中に入ると、新人侍女がなにやら作っていた。名前を猫猫マオマオというが、滅多に自分から口を聞かないので、どんな人間なのかよくわからない。

ただ、腕に虐待を受けた痕があり、身売りされたこと、そして現在、毒見専門で雇い入れられたことを聞くといったたまれなくなつた。

痩せた身体を太らせようと食事を増やしたり、傷痕をそらすのは可哀そっと掃除をさせなかつたり。残り一人の侍女も同じ考え方で、結果、猫猫の仕事がほとんどなかつた。

それでいいと、桜花は思つ。

侍女頭の紅娘はそれではあんまりだと、洗濯を猫猫の仕事に与えた。洗濯は籠を運ぶだけなので、腕の傷は目立たない。他にもこまごまとした用を頼んでいるらしい。

「なにを作つているの？」

鍋で草のよひなものを作てこる。

「風邪薬です」

必要最低限の言葉を述べるのみだ。きっと、虐待の後遺症でひとつと
の付き合いがつまらないかもしないとおもつと涙を誘つ。

薬に造詣ぞうけいが深いといふので、時折、こうやつて作つてこる。片付け
はきれいにしてくれるし、この間もさうしたあかぎれの薬は重宝して
いるので桜花は何もこいつとはない。薬づくりは、たまに、紅娘か
らも頼まれてやつてこようである。

銀の茶器を取り出すと乾いた布で丁寧に磨く。

猫猫が口を開くのはほとんどないが、眞まことに相槌あいこづちを打つてくれ
るので、話しがいがある。最近噂になつてゐる怪奇話をした。

中空を舞つ、白い女の噂だった。

(一一一 か月位の出来事か?)

猫猫は、作り終えた風邪薬と洗濯籠を持ち、医局に向かつ。一応、形だけでも医師の判断を委ねるためだ。

ありきたりな怪奇話に猫猫は首を傾げる。

まだ、こちらに来る前には聞いたことのない噂だった。噂という噂

は小蘭シャオランが持つてきてくれていたので、ここ最近にできた話だとわかる。

後宮はぐるりと城壁に囲まれている。四方の門以外出入りができず、堀の向こうには深い堀が通つており、脱走も侵入も不可能である。深い堀の下には後宮から抜け出そうとした妃が今も沈んでいるなど言われている。

(城門付近かあ)

近くに建物はなく、松林が広がっていたはずだ。

(夏の終わりからだつたよな)

この時期はあるものの収穫期である。

よからぬことを頭に浮かべていると、狙ねらいましたかのように嫌な声が聞こえた。

「お仕事じごい」苦勞様

牡丹けんらんのような絢爛な笑みに、猫猫は無表情をはりつけたままだった。

「いいえ、それほどではございません」

医局は南にある中央門のそばにあり、後宮をつかさどる二端門もそこにある居室を構えている。

王氏ジンシはよくそこに現れる。

宦官かんがんならば内侍省じないしゆうにいるべきだつが、この男はどうの部屋にも所屬せず、むしろすべてを監視するようにな眺めていた。

(宮臣たちよりも上の立場ねえ)

可能性としては現帝の後見人といったところであるが、二十歳そこそこの青年がそれとは考えづらい。その子息であつたとしても、わざわざ宦官になる必要もない。

玉葉妃と親しいことから、そちら側の後見人とも考えられるが、むしろ……。

(皇帝の御手付きか?)

御通りの際、玉葉妃との仲を見る限り正道のようだが、人は見かけによらない。

いろいろ考えるのは面倒なのでとりあえず皇帝の愛人ということで片付けておこう。

「なんかものす」く失礼なこと考えてる顔に見えるんだけど
「気のせいではないですか」

一礼して振り返り、医務室に入るとビジョウひげのやぶ医者が「ごりごりとすり鉢をすつっていた。この医者の場合、薬を作るためでなく暇つぶしでやつてているだけだと猫猫はわかつている。

でなければ、毎回自分の作る薬を半分渡す必要はないだろう。

最初はわけのわからない小娘と思っていたらしいが、猫猫の作る薬をみて段々態度が軟化してきた。

いまでは、茶菓子をだし、必要な材料を分けてもらえるようになつたのだが、医局としてそれはあまりよくないことである。守秘義務だとか、なんだとかあまりにないのである。

「薬を見てもらえませんか？」

「おお、嬢ちゃんかい。ちよいとまつてな」

茶菓子と雑茶を用意する。甘い饅頭の類ではなく煎餅である。

辛党の猫猫にはうれしい。

最近、いろいろ餌付けされている気がしないでもないが。

やぶだが人は良い。性格はいいが、仕事はできない型（タイプ）である。

「私の分もお願ひするよ」

甘いたおやかな声がする。

後ろを振り返らなくても、なにやら輝かんばかりの空気が回りに立ち込める気がする。

やぶ医者は驚きと高揚を浮かべた顔で、せっかく用意した煎餅と雑茶を、白茶と月餅に替えて持ってきた。

（煎餅が……）

輝かしい笑顔が横に座っている。

身分差を理由に同席を拒否したが、無理やり肩を押さえこまれた。見た目の優しさと全く違う強引な行動に猫猫は辟易（へきえき）した。

「老師（せんせい）、すまないが、奥からこれを取つてくれないか？」

紙切れを渡す。

遠目からみても、かなりの数が書かれていた。しばらく時間が稼げよう。

やぶ医者は田を細めると、残念そつまなざしで奥の間に入った。

(最初からそのつもりだったんだらうな)

「本題はなんでしょうか?」

察しのよい猫猫は、湯飲みを揺らしながら聞いた。

「幽靈騒ぎは知っているかい?」

「尊程度に」

「じゃあ、夢遊病つてのはわかるかい?」

猫猫の田の端に輝きが宿ったのを壬氏は見逃さなかった。

くくくと、天女の笑みに意地の悪さが混じる。

大きな手のひらが猫猫の頬を撫でる。

「それはどうやつたら治るんだい?」

甘~甘~果実酒のような声でたずねた。

1-1 開闢騒動その一

「そんなものわかりません」

自分を卑下しないが、過剰にもとらえない猫猫の答えだった。
どんな病気が知っていたし、患者も見たことがある。
その結果いえるのはこのことだった。

「薬で治せるような病気ではあります」

氣の病である。

妓樓の遊女がこの病にかかりたとき、ねやじどのせなんの処方もしなかった。

薬で治るものではなかったからだ。

「薬ではなく」と

何なら治るんだ?と聞いていた。

「私の専門は薬です」

言い切ったつもりだが、横をちらりと見ると憂いを含んだ天上人の顔があった。

(田を呑わせてはだめだ)

野生動物でも扱うかのことを青年から視線をそらす。そらすがそら

せない。回り込んで猫猫のほうを向いていた。

かなり粘着質である。かなりうざい。

「……努力します」

ものすぐ嫌な顔をしながら答えていた。

夜半に迎えに来たのは、宦官の高順かんがん ガオシュンだった。

寡黙で無表情なところはとつつきにくそつと思えるが、猫猫はむしろそこに親近感が湧く。

(あまり宦官ほくない人だよな)

宦官は物理的に陽の気を取り払っているため、女性的になることが多い。

体毛が薄く、性格は丸く、性欲のかわりに食欲が増し太りやすくなる。

一番わかりやすいのは、やぶ医者の例だ。

高順はといふと、体毛は濃くないが、精悍せいがんで後宮ごうぐうといふ場所にいなければ武官と間違えられることだろう。

(どうしてこの道を選んだのだろう)

気になつても聞いてはいけないことくらいわかる。黙つて頭を振つ

た。

灯籠とうろうを片手かたてに持ち、高順が先導する。

月は半分の大きさ大きさだつたが、雲がないだけ明るかつた。
昼間ひるまへしか見たことのない宮内うじうちは、まるで別の場所ばしょのようだ。
時折ときおり、がさがさと物音ものごゑがしたり、なんだか喘あえぎ声こゑのよつなものが木
陰から聞こえたりしたが無視することにした。

まあ、宮中うじうちにはまともな男性は皇帝以外ほかいないといつゝことで、恋愛れんめい
の形などかたちでもしかたないわけである。

「猫猫ねこねこわま」

高順が話しかけてきた。

「敬称はいりません。高順こうじゆわまのほうほうが位いは高いでしょ」「
ではでは小猫しゃおまわ」

(こきなりちやん小付けちやんですか)

案外あんがい軽いのか、このおつせんとか思いながら、猫猫ねこねこは頷うなづいた。

「壬氏ジンシさまを毛虫けものでも見るよつな田たで見るのはやめていただけませ
んか」

(やつぱ、ざれてるのか)

「こじ最近さいきん、露骨ろくこに表情筋ひじょうきんが反応はんのうして、鉄面皮てつめんひでは隠かくしきれないらし
い。」

首がとぶことは今のところないと思うが、節制せねばなるまい。お偉いさんにとって、虫けらは猫猫のまつである。

「今日も帰るなり、『なめくじでも見るような目をされた』と報告され」

（たしかに、粘着質でべたべた気持ち悪いとは思いました）

いちいち報告していることも粘着質だ。

「身を震わせながら、潤んだ瞳で微笑んでいらしてました。悦といふのはあれを言つんですね」

誤解しか生まないような語彙を、至極真面目に答えてくれた。むしろ、虫けらから汚物に下がる勢いでいる。

「……、以後気を付けます」

「ええ、免疫のないものは、一見するなり昏倒こんとうしかねないので、処理が大変なのです」

深いため息に苦労がにじんでいる。

大変疲れるお話をしているうちに、東側の城門についた。城壁は猫猫の四倍ほどの高さがある。外側は深い堀で、食糧や資材の運搬、時折、下女の入れ替わりの際に、橋が下ろされる。

後宮で脱走は極刑を意味する。

門には、常に衛兵が張り付いている。内側に宦官が一人、外側に武官が一人。門は一重になつており、詰所が外側と内側両方にについている。

跳ね橋を下ろすも上げるも人力では足りないので、牛が一頭飼育されていた。

猫猫は近くに広がる松林にあるものを探しに行きたい衝動にかられたが、高順がいるからかなうわけもなく庭園の東屋に座った。

半円を背景にそれは現れた。

「苗を舞つ白い女の影。

長い衣とひれを纏い、踊るような足取りで城壁の上に立つ。

衣が揺らぎ、ひれが生き物のようにうづねる。長い黒髪が、闇の中で照らされ、淡い輪郭を際立たせる。

「現のものとは思えぬ美しさだった。

桃源郷にでも迷い込んだかのような、幻想的な光景である。

「月下の芙蓉」

ふとそんな言葉が頭によぎる。

高順は一瞬驚いた顔をすると、ぽつりとつぶやいた。

「勘がいいですね」

女の名は『芙蓉』^{フジツバ}、中級妃。

来月、功労として下賜される姫である。

夢遊病といつのは、よくわからない病氣である。寝てゐるのにあたかも起きているような動きをする。何が原因といえば、心の転轍あひれきであり、薬草をいくら煎じても意味がない。

とある遊女がその病にかかつた。

朗らかで詩歌の上手い女で、身請け話が持ち上がっていた。

しかし、その話は破談となる。

幽鬼にでもとりつかれたかのように、毎晩妓楼を散策しているのだ。歩き回る妓女をやり手婆が止めようとすると、爪で肉をえぐられた。翌日、妓楼のものがみな不審な行動に詰め寄るが、妓女は朗らかな声でこいつ語るのだ。

「あら。みなさん、どうしたの？」

記憶のない彼女の素足には、泥と擦り傷がついていた。

「それでどうなつた？」

居間には壬氏ジンシと猫猫マオマオ、高順ガオシュンの他に玉葉妃ヨクヨウヒもいた。公主は、紅娘ホンニヤンにまかせている。

「なにもありません。身請け話がなくなつたら、徘徊はなくなりましたので」

にべもなく猫猫は言ひ。

「つまり、身請け話が嫌だつたってことかしら？」

「おそらく。相手は大店ですが妻子ごいのうか、孫までいる身分でしたから。それに、あと一年も働けば、年季はあけたのですよ」

氣に入らない相手に身請けされるなら、あと一年奉公を我慢したほうがいいらしい。結局、その遊女は新しく身請け話もなく年季が受けたのだった。

「極端な気持ちの高ぶりがあつたあとに徘徊が多いので、気持ちを落ち着かせる香や薬を配合したのですが、まあ、気休めにしかなりません」

おやじどのにかわり、猫猫が調合していた。

「ふーん」

面白くならないせいで田代氏が頬杖をついている。

「本当にそれで終わる？」

ねつとうとした視線に対し、侮蔑^{ぶべつ}の表情を浮かべるのを我慢する。隣では、無言で声援を送る高順がいる。

「それでは仕事に戻りますので失礼します」

一礼して部屋を出る。

少し時間をさかのぼる。

幽靈見学の翌日、猫猫が向かったのは東側のおしゃべり娘、小蘭の元だった。

小蘭は猫猫に会うなり、玉葉妃のことを根ほり葉ほり聞き出そうとしたので、さしあたりのない情報と交換に幽靈騒動について聞き出した。

幽靈騒動が起き始めたのは半月ほど前。最初は北側で見つかったらしい。

それからまもなく東側で見つかるようになり、毎晩見られたとのこと。

衛兵たちは怪談話に恐れをなして、なにもしない。

今のところ害があるわけでもないので、誰も何も処置しようとしたないらしい。

まったく役立たずな警備である。

次に向かったのは、やぶ医者の元へ。

個人情報なんて言葉がない時代に、守秘義務などわかつていのい男は聞いていないことまで話してくれる。

最近、元気のない芙蓉姫のこと。

息を吐けば飛び去りそうな小さな属国の三番田で、姫という肩書でありながら上級妃にもなれないご身分。

北側の棟持ちで、舞踏が趣味だが小心者で緊張しやすく、皇帝の御目通りの際失敗している。

踊りを除けば、特に目立つた容姿でもなく、入内から一年、いまだ御手付きもないらしい。

今度、下賜される先は、幼馴染の武官の元だといつので、幸せになればいいということ。

(なあるほど)

猫猫は、頭の中でなにかが組みあがった。
しかし、推測の域を出ないそれをいつのはじりであるつか。

(おやじが推測でものを話すなつていつてたから)

だから話さなことにした。

大人しい色白の姫は、頬を染めて中央門をくぐる。
目立つた風貌ではないものの、幸せを感じた明るい頬に皆が嘆息した。

下賜されるならこりうでありたい。

その光景が広がっていた。

「私にくらい話してもいいんじゃないかしら？」

艶やかな笑みを浮かべる玉葉妃、一児の母であるが実年齢は二十に満たない。少しお転婆な笑みが浮かんでいた。

猫猫は一瞬、考え込んだ。

「あくまで推測ですので。あと、気分を害されなければ」「自分で聞いておいて、腹は立てませんよ」

(つーむ)

「他言無用であれば」

「口は堅くつてよ」

猫猫は、妓楼の夢遊病者の話をした。

先日、壬氏たちの前でしたものと別の、もう一人の夢遊病者の話だ。

前の遊女と同じく、身請け話が持ち上がりつたところで病になり、そして破談になつた。

しかし、その後も夢遊病は止まらず、前回と同じように薬を処方しても気休めにもならなかつた。

そんな遊女に新たに身請け話が持ち上がる。楼主は、病氣ものを身請けさせるには忍びないといつたが、それでも身請けしたいということだつた。しかたなく、前の身請け話の半分の銀で契約は成立了。

「後程わかつたのですが、これは詐欺だつたのです」
「詐欺？」

先に身請け話をした男は、あとから身請け話をした男の知り合いだつた。遊女が病のふりをするとわかつていて、破談にする。そして、本命の男が半額で身請けする。

「遊女はまだ年季が残つております、男は身請けする銀が足りなかつた
つまり、この遊女たちと芙蓉姫は同じだつてこと？」

幼馴染の武官は、属国とはいへ一国の姫に求婚できる身分ではない。武勲を立てていつの日か姫を迎えて行くつもりだった。

しかし、姫は政略により後宮に入ることになる。武官を思つていた姫は、得意の舞踏を失敗して皇帝の氣を引かないようになつていた。案の定、一年間夜伽はなく身はきれいなままである。

武勲を集め、次の勲功で芙蓉姫が下賜されるとなつたころ、姫は怪しげな徘徊をするようになる。

間違つても、皇帝が芙蓉姫を惜しいと思わないように、御手付きにならぬようになつた。

御手付きになれば、下賜されるのは後になる。また、処女性を重ん

じる芙蓉姫にとつて、夜伽を行つた時点で幼馴染に顔向けできないだろ。

東門で踊つていたのは、戻つてくる幼馴染の祈願のため。怪我をせぬように祈るため。

「あくまで推測です」

「なんてこいつか、帝についでば、なきにしもあらずなので何も言えないわ」

寵妃は少し困つた顔をしている。

好色な皇帝が武官がそこまで望む姫に興味を持たないとは言い切れなかつた。

「芙蓉姫がうらやましいなんて言つたら、私はひどい女かい」「そんなことないと思つます」

つじつまは大体あつてていると思うが、壬氏に話す氣はない。そのほうが幸せに違ひないから。

あの柔らかい素朴な笑みをそのままにしたかった。

問題はすべて解決したかに見えたが……。

実はひとつだけ謎は残つていたのである。

「どうして上ったんだろ?」

猫は自分の四倍もある壁を見上げると、首を傾げるのだった。

13 桐鶴（前書き）

暴力表現があります。

がしゃん、と何かが落ちる音がする。

芋と雑穀を煮た粥と茶、すりおろした果実がばらまかれる。

「こんな、下賤の食べ物を梨花さまに食べさせる気? 作り直しても
らいなさい!」

派手な化粧をした若い女官は、まなじりを上げていた。梨花妃につく侍女の一人である。

(あーあ、面倒くさい)

ため息をまじえながら皿を拾い、こぼれた食事を片付ける。

猫猫がいるのは、水晶宮。

梨花妃の居住である。

周囲にはこりみつけのような視線がいくつも。

あざ笑うかのような目、さげすむような目、敵意をあらわにする目。

玉葉妃に仕える猫猫にとっては敵地も同然、針のむしろだった。

皇帝が玉葉妃の元に現れたのは、昨晩のこと。
いつもどおり、毒見を行い、部屋をあとにじょりとしたとき。

皇帝 キョクヨウ

玉葉妃 キョクヨウ

「尊の薬師どのに頼みたい」とがある

初めて声をかけられた。

(尊つてなんなんだよ)

皇帝は偉丈夫で美髪をたくわえているが、年齢はまだ三十半ばくら
いだ。これで国の最高権力を持っているのだから、後宮の女たちが
目をきらつかせるのは無理もないが、いかんせん猫猫である。「長
い髪だな、さわってみたい」「くらいにしか思っていない」。

「なんで『いやいましょうか?』

恭^{ひやう}しく頭を下げる。下女の身分としては、下手な対応を取る前に退
室したいところである。

「梨花妃の容体が悪い。しばらく見てくれないか

とのことだった。

帝の言は、天上の言。

首と胴はまだ仲良くしていいたい猫猫としては「御意」と答えるしか
なかった。

『見てくれ』とこいつとは、『治せ』と同義である。

寵愛がなくなつたとはいえ、いくらか愛着が残つているのか、それとも、有力者の娘をないがしろにできないのかどちらでもよい。

治さなければ、首がとびかねない。
一蓮托生いちれんたくじょうである。

それをたかだか、小娘に頼むのだから、よほど後宮医官は頼りないのか、それとも死んだところで問題ないのか。どちらにしろ、無責任な頼みである。

(それにしても、他の妃の前でいう話でもないのに)

猫猫にそんな依頼をしておき、悠々と夜食を食べ、玉葉妃と仲睦まじきことをおこなつた帝は、やはり帝といつてもものなのだとつくづく思つ。

梨花妃を見るにあたつてまずはじめたのが、食生活の改善だった。

現在、毒おしろいは王氏の言により、後宮内では使用不可となつてゐる。卸した業者があれば、ひどく罰するのみ徹底したらしい。

ならば、身体に残つた毒を排出することが先決だ。

食事は白がゆが盛つてあるものの、魚の素揚げのあんかけに、豚の角煮、紅白の饅頭に、ふかひれや蟹といった豪華な料理である。栄養はあるが、胃腸の衰えた病人に食べさせるには重すぎる。

よだれができるのも押さえつつ、料理人に作り直しを命じる。勅命といふことで、しない下女風情の猫猫にもそれなりの権限が持たされていた。

纖維質の豊富な粥に、利尿作用のある茶、消化のよい果実。

残念なことに、先ほど床にぶちまけられた。

勅命云々よりも、玉葉妃に仕えていた容貌^{あいがほりやく}悪しき下女が氣に入らなかつたのだろう。

言いたいことはたくさんあるが、ぐつといらげて片付ける。

新たに侍女が絢爛豪華な食事を持ち、梨花妃のもとへ運び入れられたが、しばらくするとほとんど手も付けられずもどる。残りは端女たちの「褒美」となることだろう。

触診を行いたいところだが、天蓋付の寝台のまわりには侍女がまわりつき、恭しくもまつたくなつていらない看病を行つてゐる。寝ているところにおしゃりをはたけば、咳のひとつもでるものなのに、

「空気が悪い。下賤^{げせん}のものがいるからだ」

と、部屋を追い出されてしまった。
手のだしあうがない。

(あのままでは、衰弱死は確実だな)

毒がたまり過ぎて排出が間に合わないのか、それとも氣力が足りないのか。

食をとらねば人は死ぬ。生きる氣力をなくしてゐるのだろう。

部屋の前の壁に寄りかかり、自分の首がはなれるまで何日かと指を折つてゐると、周りから嬌声^{きょうせい}が聞こえた。

ものすゞじく嫌な感覚がして、ものすゞじく重々しく顔を上げると、ものすゞじく綺麗な顔がすゞぶる陽気に笑っていた。

「なにかお困りのようですね」

「そのよつこ見えますか」

棒読みの半眼で答える。

「そのよつこ見えますが」

じつくじと見つめてくるので次第に田線がそれる。それを追つよつに長いまつげが近づいてくる。

田が合えれば、条件反射で汚物を見るよつに接してしまつだらけ。

「なんなの、あの女」

ぼそりと毒氣づく声が聞こえる。食事を下げた下女だ。

ものすゞじく屈たたまれない。周りから恐ろしい空氣が漂つてくる。

耳元で甘い蜜の声がする。

「とつあえず中に入らうか」

頷く前に部屋に押し込められた。

入ったところで、部屋には取り巻きたちが先ほどのも険しい顔でにらんでくれる。

しかし、隣にいる天女の様相を眺めると、取り繕つたかのよつて淡い笑みを浮かべた。

女とは本当に恐ろしい。

「帝のはからいを無碍にするのは、美しき才女たちに似合いません
」

王氏の言葉に唇を噛みつつ、そつと寝台の前から退いた。

「ほれ、いけ」

背中を押され、猫猫はつんのめる。

一礼をし寝台の前に立つと、血管の浮いた色味のない手をとつた。薬ほどではないが、医のつく類はそれなりに経験がある。

梨花妃は目を瞑つたまま、抵抗もしない。眠つているのか、起きているのかもわからない。魂の半分はすでにあの世に流れたようだ。
まぶた
瞼の奥を見るべく、顔に指をかける。
さらりとした感覚が指を滑つた。

以前と変わらぬ、真っ白な肌だった。

(前と同じ肌色?)

猫猫の表情が強張り、侍女たちのほうを向く。

その中のひとりの前に立つと、低い、押し殺すかのような声でいた。やきほどおしゃいをはたいていた娘だ。

「妃の化粧をしているのは、おまえか」「ええ、そうよ。侍女たる勤めですもの」

食い入る猫猫にびいかおびえながら答える侍女。精いっぱいの虚勢を張る。

「梨花さまには常に美しくあつてほしいもの」

自分が正しいのだといわんばかりに。

「そうか」

ばちん、と大きな音が響く。

侍女はなにが起きたのか理解できないまま、力の向かう側に倒れこんだ。

頬と耳が異様に熱いことだらけ。

「なにすんのよー」

呆気にとられた周りの中で、一人が猫猫に食つてかかる。

「ああ？ 莫迦に折檻するだけだよ」

人を食つた言い方で倒れた侍女の髪をわしづかみにして、引きずる。化粧台の前で止まるときの手で、彫り物の器を手にする。蓋を開けると、中のものを侍女にまぶした。

げほげほと咳をする。田には涙が浮かんでいた。

「よかつたなあ、」それで妃と回じくきれいになれるわ

髪をひつぱりあげ、獲物を狩る獣の笑みを浮かべる。

「毛穴から、口から、鼻から毒の気が全身にまわるからな。お慕いする梨花さまと同じ、枯れ枝のような手と落ちこんだ眼窩と血の氣の失せた肌が手に入るぞ」

「そ、そんな……」

「なんで、禁止されたかわかつてんのか、毒だつつてんだろ……」

「だつ、だつて。一番きれいだから。梨花さまも喜ぶと思つて」

「誰が自分の餓鬼殺した毒を喜ぶんだよ」

子どものよつな言い訳に、猫猫は舌打ちを鳴らすと髪の毛をはなした。指には長い髪が数本巻き付いている。

「わっわっ、口ゆすこでこ。顔も洗つてこ」

そそぐわと部屋を出る女官を見送ると、今度は法える他の侍女たちをみた。

「おこ、このままだと、病人にさわるだな。わっわと掃除しろ」

自分が散らかしたことを棚に上げ、粉だらけの床を指した。
侍女たちびくんと身体を震わせると、掃除道具を取りに行つた。

腕組みをし、ふんと鼻を鳴らす。

「女とは本当に忍りっこ」

両手を袖の中に入れ、ぽつりといふやへむ。
存在すら忘れていた。

「あ！」

猫猫は急激に頭から血が降りていくを感じると、その場で蹲ひざくわった。

13 時局（後書き）

育ちが悪いので、上ひが素のしゃべりです。

梨花妃の容体は思った以上に悪かつた。

雑穀の粥を重湯に作り直したが、匙から吸ひ気配はなく、口をこじ開けて流し込むとゆつくり嚥下させた。

食事をとらない。それが一番の問題だ。

根気よく、しつこいくらいに食事を与えた。

部屋の換気を行うと、むせるような香が薄れ、かわりに病人特有の匂いがする。

体臭をこまかすために香をたきしめていたのだろう、風呂に向日も入っていないようだ。無能な侍女たちに憤りが増す。

せっかん折檻を受けた侍女は謹慎を言い渡されたりしい。おしゃりは買い置きを隠し持っていたものだつた。可哀そり、おしゃりを回収しそこなつた宦官は鞭打ちになつたといつのに。生まれで罰も左右されるのだ。

とうかく統括する宦官には、マオマオ猫猫が「無能もの」と侮蔑ぶべつあまり意味をなしてなかつた氣がする。

湯桶と布を準備させ、呼びつけた侍女たちとともに身体拭く。侍女たちは難色を見せたが、マオマオ猫猫が睨み付けると大人しくしたがつた。肌は乾燥し、水をはじかず、唇は痛々しげに割れていた。紅の代わりにはちみつを唇に塗り、髪は簡単に結わえる。

あとは「ことあることに茶を飲ませる。時折、茶の代わりに羹あつものを薄め

て与える。

小用の回数が増える。

怪しげな新参者に敵意を示すかと思つたが、人形のような梨花妃は概ね大人しく世話を受けていた。いつのまに誰が誰かを認識しているのかわからなかつた。

一度に食べる重湯の量が茶碗半分から一杯に増えると、少しづつ中の米粒の量を増やしていく。額あいを押さえずとも自分で嚥下するようになると、肉の旨味をどじこめた汁物とすりおろした果実を加えた。

小用も手伝いなしにできるようになる頃、ふと梨花妃の唇が動いた。

「…………して、…………のか」

漏れ出る言葉を聞き取るため、梨花妃のそばに立つ。

「どうして、あのまま死なせてくれないのか」

小さな消え入りそうな声だつた。

猫猫は眉をひそめる。

「ならば、食事をとらねばいいことです。粥を食むところとしては、死にたくないからでしきつ」

と、温めた茶を梨花妃の口に含ませた。

「ぐんと喉が鳴ると、

「やうか……」

かされた笑いがこぼれた。

猫猫に対する侍女たちの反応は、一つに分かれた。

猫猫を怖がるものと、怖がりながらも反発するものだ。

(やりすぎたか)

どうにも、感情の沸点をこえると過激な反応になってしまつ、悪い癖だと思った。

無愛想だが概ね温厚でとおつていてる猫猫としては、遠巻きに鬼か妖怪かを見る目つきでみられると地味に傷つくわけである。

今回の場合、梨花妃の看病に必要だといつことで、仕方ないとした。

帝だか、玉葉妃の命だかなにか知らないが、きらきらしい壬氏ジンシどのがちょくちょくあらわれてくれた。使えるものは何でも使う勢いで、水晶宮に突貫工事で風呂場を作らせた。元々あつた湯殿に加えて、蒸氣風呂サウナができた。

用がないのでもう来るな、と猫猫なりに婉曲に伝えるのだが、壬氏は化け物のごとく扱われる猫猫をことあるごとに笑いにくるのだった。

暇人すぎる宦官である。

毎度、菓子折りを持つてくれる高順ガオシュンを見習つていただきたい。ああいつまめなのがいい日那になれるだろつ、宦官であるが。

纖維質を取り、水分を取り、汗をかき、排せつを促す。

身体から毒を排出することだけを考えて一ヶ月が過ぎると、梨花妃は自分で散歩に出かけるまでになつた。

もともと、気の病による衰弱が深刻だつた。毒を新たにとらねば、問題はない。

以前の豊満な肉体はまだ取り戻すのに時間がかかるが、頬に赤みがさし、もう死の淵をさまようことはないだろつ。

翡翠宮に戻る前夜、挨拶をしに梨花妃のもとに向かう。

意識がはつきりしてきたら、下賤のものなどと罵られることを予想していたが、そうでもなかつた。

自尊心はあるが高慢ではない。東宮のあれこれで、嫌なお嬢様を想像していたのだが、実際は妃にふさわしい人格を持っていたようだ。

「それでは、早朝に辞させていただきます」

今後の食事療法、いくつかの注意点を伝えて部屋をでよつとするど、

「ねえ、私はもう子は生せないのかしら」

何の抑揚もない声だつた。

「わかりません。試してみればよろしいかと」
「帝の寵愛は漬えたのに?..」

彼女のいわんとすることはわからなくもなかつた。

元々、東宮を身にもつたのは、寵妃である玉葉妃のつなぎで夜伽をしていたからだ。

公主と東宮が三か月違いで生まれてゐるのは、それを如実に語つていた。

「私に、じに来るように命じたのは主上でござります。私が戻る以上、帝も梨花さまのもとにいらっしゃられるのではないかと」

それが政治的であれ、感情的であれ問題はない。

やることは一緒だ。

「玉葉妃の言葉も聞かず、みすみすわが子を殺した女が、彼女に勝てるのかしら?」

「勝てる勝てないの問題ではないと思ひます。それに、間違えは学習すればいいのです」

猫猫は壁に飾られた一輪挿しを取る。星形の花を咲かせた桔梗^{ききょう}が飾つてあつた。

「世には百、千の花がありますが、牡丹と菖蒲のどちらが美しいといつのは、決めつけるものではないと思ひます」

「私には胡姫の翡翠の瞳も淡い髪もなくてよ」

「他のものがあれば問題ないかと」

と、猫猫は視線を梨花妃の顔から下に移動させた。

普通、瘦せる部分はそこからだといわれているが、ちゃんと哈密瓜が二つくつついていた。

「それだけの大きさはもとより、はり、形は至宝かと」

妓楼で目肥えた猫猫がいうのだ、間違いない。湯あみをさせるたびに見惚れたのは内緒である。

玉葉妃に仕える身としては、あまり肩入れするわけにはいかなかつたが、最後に手土産をひとつ置いておくことにした。

「ちよっと、耳を貸していただけますか」

『じょじょ』と周囲に聞こえない声で、梨花妃にあることを教えた。

遊郭ゆうかくの小姐たちが、「覚えていて損はない」といった秘術である。

林檎のように真っ赤な顔をした梨花妃が何を聞いたのか、侍女たちのあいだでしばらく話題になつたといつ。

その後、翡翠宮ひすいきゅうにて、帝の御通りが一時極端に減つたことがあった。

「ふう、睡眠不足から解放されるわ

と、皮肉交じりに玉葉妃が言つたこと、猫猫が目を泳がせたのはまた別の話である。

(やつぱりあつた)

洗濯籠片手に喜色を浮かべる。

東門のそばの松林、生えているのは赤松だ。後宮内は概ね庭園の管理は行き届いている。松林も年に一度、枯葉や枯れ枝を取り除かれしており、それはとある茸の生育を促すのである。

手に持ったのは笠の広がりも少ない松茸であった。

匂いが嫌いという人間もいるが、猫猫マオマオは好物であり、四つに裂いて網で焼いて塩と柑橘かんきつを絞つて食べるのは至福のときだ。

小さな林だが、都合よく群生を見つけたので籠の中には五本の松茸が入っている。

(おつちやんのとこ)で食べようか、それとも台所で食べようか

翡翠宮で食べるとなると、食材の出所を聞かれるかもしれない。林でとりましたとか、ちよいと女官としてはあつてはいけないことかもしけれない。

なので、人は良いが仕事が駄目なお人よし医官のもとに向かう。好きだったらそれでよし、嫌いでも見逃してくれるだろう。

途中、小蘭のところによるのも忘れない。ともだちの少ない猫猫には貴重な情報源である。

リワ
梨花妃の看病で肉の削^そぎ落ちた猫猫は、戻るなり先輩侍女たちに太らされることとなつた。相対する妃のもとに一ヶ月もいたというのに、その反応は嬉しい一面、困るものであり、籠には茶会のたびに貰^ゲつ月餅や？干^{ペイ}を持て余していた。

甘いものはいくらでも入る小蘭は目を輝かせ、短い休憩の間ずっと猫猫と話してくれた。

あいかわらず、怪しげな怪談めいた話が多かつたが、

「富中の女官が媚薬を使って女嫌いの堅物武官を落としたのよ」

なる話を聞いてなんだか冷や汗をかいだ。

(うん、たぶん関係ないはず。たぶん)

そういえば、誰に使うのかまったく聞いていなかつた気がする。

富中とは、ここ以外の富廷内のことについて。

まともな男性がいる分、競争率の高い花形職業である。

ちなみにここは、まともな男性がない分、さみしい職場どころである。

医局には、どじょうひびのおつととの他に、青白い顔をした見慣れない宦官かんがんがいた。

なにかしきりに手をわざわざしてくる。

「おお、嬢ちゃん、ちよつとよかつた」

「なんですか」

「手がかぶれたらしくてね。すぐ、軟膏なんこうを作ってくれないかい?」

どうにも後宮の医を統べるものではないのである。
まあ、いつものことなので、隣の薬棚のある部屋へ向かう。

そのまえに、籠を置いて、松茸をとりだす。

「炭とかありますか?」

「おおっ、立派なもんとつてきたな。醤と塩もあつたほうがいいな」

好物なのか話が早い。浮かれた足取りで食堂のほうへ調味料をもらいに行く。

可哀そうに病人は置いてかれたままだ。

(嫌いじゃなければ、一本くらこあげよつ)

可哀そうな宦官を材料をじらうとかき混ぜながら思つた。

やぶ医者が調味料と炭鉢と網を持ってきたころ、ねつとつとした軟

膏が出来上がる。

宦官の右手を取り、赤い発疹に丁寧に塗りつけた。多少においがきついが我慢してもらわなくては。薬を塗り終えると、少しだけ青白い顔がもどったようである。

「いやあ、優しい下女だねえ」

「そうだろう、よく手伝ってくれるんだ」

のほほんとした会話をする宦官一人。

宦官といえば、時代によつては権力欲にまみれた悪人の「J」とく扱われるが、実際はほんの一握りである。大抵は、このように穏やかな性格をしている。

(例外もありますが)

ちらりと不愉快な顔が浮かんだので、消去する。

炭に火をつけ、網を置き、手でさいた松茸を置く。また勝手に果樹園から失敬した酢橘を切る。

独特の香りが鼻にかかり、少し焦げ目がついたところで皿に盛り、塩と酢橘をかけていたいた。

二人のおっさんともに、口に入っているので共犯者決定である。

猫猫がもぐもぐと口を動かしている中、やぶ医者はのんきに世間話をしている。

「嬢ちゃんはなんでもできるから助かっているんだよ。軟膏以外に

もこんな薬を作ってくれるんでね

「まあ、そりゃ結構だね」

まるで実の娘に接するよつなのでこれがか困つてしまひ。

ふと、もつ半年以上も会つていなにおやじさんを思い出した。

ほんの少し感慨かんがいにふけつてこる、やぶ医者は実にやぶ医者いぢとして失言をしてくれた。

「ああ、作れない薬はないんじゃないのかね」

(はあ~.)

誇大広告はよしとへだせることこの前まえ、田の前の面おもては反応してこた。

「なんでもかい?」

「なんでもさ!」

ふふんと鼻を鳴らすやぶ医者、ああ、やぶ医者たる所以である。

「じゃあ、呪いを解く薬も作れるのかい?」

男はかぶれた右手をなでながら言つた。

氣色はわきほど青白い顔に戻つていた。

一 昨日の晩のこと。

仕事はいつも、のみの片づけで終わる。

後宮のあちこちから出たごみは、荷車に集められ、西側で焼却される。

本来は夕方以降に火を放つのは禁止されているのだが、風もなく、空気も湿っているので問題ないと許可をだした。

下官たちが穴の中にごみを投げる。

仕事を早く終わらせたかったので、自分も同じように作業に徹する。

ふと、荷車の中に田につけたものがあった。

衣物の衣だ。

絹ではないが、上質のもの。捨てるにはもったいない。

どうしたものかと持ち上げてみれば、中にまばらまばらの木簡が包まれていた。

包んでいた衣は袖口が大きく焼け焦げている。

いつたいどうこうことだ。

はてと頭を抱えたとて仕事は終わらない。

木簡をひとつひとつ拾い上げ、穴の中の火にくべた。

「すると、炎が勢いよく吹き上げて不気味な色にかわったと」

「ああ」

小父さんは思ひ出すのも恐りしこ様子で肩を震わせる。

「その色は、赤や紫や青？」

「やうだよ」

猫猫はなるほどと頷いた。

今日聞いた小蘭の噂の元はここからだところのか。

(西側の話なのこ、ここまでもわるのか)

女官の噂は韋馱天いだてんよりも早いといつのは本当だり。

「ありやあ、昔火事で死んだ妃の呪いだ。やっぱ夜に火をつけるのがいけなかつたんだ。だから、こんな手になつちましたんだ」

宦官の手のがぶれは、炎を見たあとにできたらしい。

「なあ、娘さん。呪いを解く薬を作ってくれよ

「そんな薬あるわけないですよ」

冷たく言ひ放ち席を立つと、隣の薬棚をノヤノヤとこじりだした。

おろおろとするやぶ医者と小父さんを後日に、何かを卓の上に置いた。粉のようなものがいくつか、あとは木簡の端切れだった。

「この色じゃありませんでした? その炎つて」

木簡に炭をつけ、火が灯つたことを確認すると、やくねこ 薬匙で白い粉をと

り火に入れた。

橙色の炎が赤く変わる。

「でなければ、」ひかり

違つ粉をいれると、青緑色に変わつた。

「これでも、できますね」

松茸につける塩をひとつまみ入れると、黄色に変わる。

「嬢ちゃん、これは一体？」

驚いた様子でやぶ医者がきいた。

「色つきの花火と同じです。燃えるものによつて、色が変わるだけです」

楼閣ろうかくの客に花火職人はなびしょくじんがいたのだ。門外不出の秘伝ひでんの技も、闇やみの中では世間話に変わる。隣に子どもが寝起きをしていることも知らないで。

「じゃあ、この手はなんなんだ？呪いじゃないのか？」

猫猫は白い粉を差し出した。

「これを素手で触ると、発疹はつしんができることがあります。でなければ、木簡に漆でも使われていたとか。どちらにしろ、肌が弱いのではないのですか？」

「……そなうのか」

骨がなくなつたように、力なく座り込んだ。小父さんの顔には安堵^{あんど}と驚きが張り付いている。

木簡に付着していたのだろう、それを燃やすことで色々とつどりの炎が生まれた。
ただそれだけだった。

(なんでもまた、そんなのがつてことだけビ)

猫猫の考えは遮られた。

ぱちぱちと手を叩く音が聞こえた。

「お見事」

いつのまに、嫌なお客が立っていた。
変わらずの天上の笑みを浮かべて。

15 炎（後書き）

主人公は完全に理系です。

壬氏に連れられて来たのは、面面長の部屋だった。

中年の女官は、壬氏の指示で退出した。

正直、申し上げよう。この生き物と同部屋一人きりなど、まったくもって無理なのだ。

猫猫^{マオマオ}とて、きれいなものは嫌いではない。

ただ、あまりにきれいすぎるほどんの少しの汚点が罪悪のよつに感じられて許せないのである。磨き抜かれた玉にほんの一筋の傷が入るだけで、価値が半分になるのと同じである。

ゆえに、つい地面を這いつり回る虫を見るように接してしまつのだ。全く仕方のないことである。

(鑑賞物として接したい)

小市民猫猫の本音である。

女官と入れ替わるよつに高順^{ガオショウ}が入ってきたときは、ほつとした。最近、無口な従者が癒し系に変わつたある。

「これひま一休何色へうこあるんだ?」

医局から持ち出した粉を並べる。

「赤、黄色、青、紫、緑、細かくわければもっとあります。具体的な数はわかりません」

「では、木簡もっかんに手の色を付けるにはどうすればいい？」

粉のまま擦り付けるのは無理がある。こぐらなんでも密しかね。『塩なら、塩水につけばいいだけです。』『しかし、何によつてよければいい』と思ひます。

白い粉をよせ。

「他のものは、水以外のもので解けるものがあるみたいですね。これも、専門外なのでわかりません」

「十分だ」

青年は腕を組んで、思考にふける。

それだけで一枚の絵になるようである。

王氏が後宮内のことなどを掌握してこることはわかつてこる。今の猫の言葉がなにかの根拠になつたのだろう、頭の中では、まづらになつた欠片を組み合わせていくようである。

(暗号……かな?)

導き出される答えはおそらく同じものであろう。しかし、それを言つべきではないと猫は重々承知していた。

雉きじも鳴かずば撃たれまい、である。

これ以上、用はなさうなので、退出しようとする

「待て」

呼び止められた。

「なんでしょうか？」

「土瓶蒸しが好きだ」

何の？とこりまでもない。

(やつぱぱれてるか)

肩を落として、

「明日ここでも探してまいます」

と伝えた。

ぱたんと、扉が閉じたのを確認すると、王氏は甘いはちみつの笑顔をしました。かわりに水晶の切り先のような視線になる。

「……最近で、腕にやけどを負つたものを探せ。とつあえず部屋付以上、それにつく侍女も調べておけ」

「御意」

高順が退出すると、宮女長が入ってきた。

「申し訳ないね。いつも場所を借りてしまつて

「そ、そんなことは」

年甲斐もなく顔を赤らめている。

壬氏の表情には、また天上の甘露の笑みがはりついていた。

女とはいつあるべきなのに。

ほんのひと時だけ、唇を尖らせると、またもとの笑みを浮かべて、部屋を出た。

「はい、これ着てみて」

先輩侍女である桜花^{イシカ}は猫猫に真新しい衣を差し出していた。色は生成りの上着に、薄赤の裳^{スカート}、袖は薄黄色でいつもよりも大きく広がっている。

絹ではないが、上等の綿でできていた。

「なんですか、これ？」

色は下女にふさわしい地味なものが、意匠は実用には向かない。それに、胸元の大きく開いた服など、猫猫は着たことがないので、明らかに嫌な表情が浮かんでいる。

「何つて、園遊会の衣装だけど」

「園遊会？」

先輩侍女たちの好意に完全に甘えていた猫猫は、毎日毒見と薬作り以外は、外を駆け回り薬草採つたり、小蘭シャオランとおしゃべりしたり、医局で茶をいただいたりしていた。ゆえに、上流階級の話題はほとんど耳に入らなかつた。

首を傾げる猫猫に呆れた顔で桜花が教えてくれる。

年に一度、宮廷の庭園で社交界が開かれること。
後のいない皇帝は、正一品の妃を連れてくること。妃の世話をする
女官もついていくこと。

後宮内では、玉葉妃キヨクヨウが『貴妃』、梨花妃リファが『賢妃』を冠している。
他に一人、『徳妃』と『淑妃』を合わせて四夫人、それらが正一品
となる。

本来、冬の園遊会は『徳妃』と『淑妃』のみ出席のはずである。だが前回、赤子を生んだばかりの玉葉妃と梨花妃は欠席したため、今回全員参加のこととなつた。

「全員参加、ですか」

「ええ、心してかからないと」

桜花の鼻息が荒くなるわけである。

ただでさえ、後宮の外にでる滅多そろにない機会であるつえ、鈴麗公主リンリーのお披露目、上級妃の揃い踏みイベントと行事満載なのだ。

侍女の数が少ない玉葉妃のため、慣れないことを理由にして猫猫が辞するわけにはいかない。そういう公の場所こそ、毒見役が重要視されることくらいわかっている。

(血の雨が降りかねない)

猫猫の勘は当たる。

困つたことに当たるのである。

「少し、胸元は詰め物をしたほうがいいわね。おしゃりの周りもかさましするナビ大丈夫?」

「お任せします」

『おお、うわお、うわお』と帯を締めつけられ、袴の丈や袖の長さを調整する桜花せせりひとじめをむこしてくれた。

「うやうやしく、お化粧もしないことね。たまにね、そばかす隠す努力もしなきことよ」

『いやつと笑つ桜花に、ひきつる笑顔を返したのはこづまでもない。

紅娘ホンニヤンから園遊会の流れを聞いてげつそりとした。

彼女は、昨年春の園遊会に出席しており、

「今年はなくて、安心していたのに」

と、ふつと、ため息をつく。

なにをするわけでもない。ただ、立つていればよいのだ。
あくまで妃はお客様側の立場であり、ただ皇帝に付き従つていればよい。その侍女たちも同じくだ。

演武えんぶに演舞えんぶ、詩歌しごに一胡いこといった出し物を見、出された食事を食べて、適当に挨拶に来る官たちに笑顔を振りむけばよいだけである。

空つ風の吹く屋外で。

庭園はまあ皇帝の権力に比例する」とく無駄に広い。
ちょうど御手水にでかけようものなら、四半時さんじゅつは必要となる。

主賓たる皇帝が座を立つことはなく、妃たちもそれに従うしかない。

(鉄の膀胱ひづらが必要になるな)

春先の園遊会でまいりへういなら、冬まだんなものになるやう。

そこで、猫猫マオマオは肌着に衣嚢ボケツトをいくつも付け、中に温石カイロを入れるよ

にした。また、生姜とみかんの皮を細かく削り、砂糖と果汁で煮て餡にした。

肌着と餡を紅娘に見せたといふ、目を潤ませて全員分作るよつに頼まれた。

作つている最中、暇人宦官が来て自分のも作れと言つてきた。その従者もなにやら言つたげなので仕方なく一緒に作つてやつた。

また、夜の御通りの際、玉葉妃イモクコウヒが皇帝に話したらしく、翌日、皇帝直属のお針子と食事係がきたので作り方を教えてあげた。

なるほど、よほどの苦行らしい。

おかげで園遊会まで、内職で終わつてしまつた。

前夜によひやく手が空いたので、手もとにある薬草で薬を作ることにした。

「おきれいです、玉葉さま」

桜花たちの言葉は、世辞で言つているのではない。

(せつすが、寵妃というだけあるな)

異国風情の漂う妃は、紅の裳と薄紅の着物を着ていた。上に羽織の大袖は裳と同じ紅で、金糸の刺繡が入つていて、髪は大きく一つの

輪に結わえられ、二つの花かんざしと真ん中に冠が乗せられている。花かんざしから銀の笄^{じゅうがい}が伸び、先に赤い絹の房飾りと翡翠の玉が下がっていた。

意匠^{デザイン}が派手なのに服に着られることがないのは、玉葉妃だからである。

燃えるような赤い髪を持つ妃は、国で一番紅が似合つものだと言われている。また、赤の中に翡翠色の瞳が輝くのも、神秘的な空気を漂させていた。

猫猫たちの裳に薄紅を使うのも、それに従つてゐるといふ意味だ。

互いに揃いの衣をつけ、髪を結つ。

玉葉妃はせっかくだからと、自分の化粧台から飾り箱を取り出した。中には翡翠のついた首飾りや耳飾り、簪^{かんざし}が入つていた。

「私の侍女たちだもの。変な虫がつかないように、所有権をつけとかないと」

そういうて、それぞれの髪や耳、首に飾りをかけていく。猫猫には玉のついた首飾りをかけてくれた。

「ありがとうございま……」

(ひつ一)

礼を言い終わる前に、後ろから羽交い絞めにされた。
桜花^{イシブタ}ががつしり腕を回していた。

「ああてど、お化粧しないとね」

刷毛^{はけ}を持ちにやにやするのは、紅娘である。他の一人の侍女もそれぞれ貝の紅入れと筆を持つている。

ここにところの先輩侍女たちが猫猫に化粧をさせようと息巻いていたのを忘れていた。

「うふふ、可愛くなつてらつしゃい」

共犯者はここにもいたようだ。玉葉妃はここにと鈴の鳴る声で笑う。

動搖の隠せない猫猫に四人の侍女たちは容赦ない。

「まず、顔を拭いて、香油を塗らなくてはね」

がしがしと濡れた布で猫猫の顔を拭いた。

『えつ?』

(あーあ)

顔と拭いた布を見比べながら、侍女たちは間抜けに声がそろつた。

(ばれちゃつたか)

ここでひとつ言つておく。

猫猫が化粧を嫌がった理由は、化粧が嫌いというわけでもない。苦手とこつわけでもない。

むじり、得手不得手なら得意といえる。

なうば、なんだといえば、すでに化粧を済ませた顔だったからである。

濡れた布には薄茶の汚れがついていた。

皆がすっぴんだと思っていた顔は、実は化粧^{メイク}後の顔だったわけである。

園遊会が始まるまであと半時こちじかんといついろ、玉葉妃ぎょくようひと侍女たちは庭園の東屋で時間待ちをしていた。

池には色とりどりの鯉がはね、赤く染まつた紅葉が残り少ない葉を散らしていた。

「あなたのおかげで助かつたわ」

日の光は十分だが、風が冷たく乾いている。普段ならぶるぶると震えるしかないのだが、温石カイロをつけた肌着のおかげで皆それほど苦はない。

心配だつた鈴麗公主玲麗も、籠の中で丸まっている。籠の中には同じく温石を入れている。

「公主のものは時折外しては布を巻き替えてください。低温やけどになる場合がありますので。あと、飴は舐めすぎると口内がひりひりするので気を付けてください」

猫猫マオマオは替えの温石を手籠の中に入れている。公主のおむつや着替えもその中にある。温石を温める火鉢はもう直面直面に頼んで運び込んでいる。

「わかったわ。それにしても」

「ふふふ、と悪戯つぽい笑いが漏れる。他の侍女たちも苦笑する。

「あなたは私の侍女なんだからね」

と、翡翠の首飾りを指さした。

「 セヨウドヤヤコモク」

猫猫は言葉のままとらえることにした。

ガオシヨン
高順は、徳妃のご機嫌をつかがう主を眺めていた。

天女の微笑みと天上の甘露を持つ壬氏^{ジンシ}は、幼いながら美姫と謳われた徳妃よりも艶やかであった。

普段の簡素な官服から、いくらか刺繡を加えて、髪に銀の簪^{うた}をさしてだけなのに、絢爛豪華な衣をまとう妃をかすませてしまつ。

ここまで来ると嫌味な存在であるが、かすんだ妃本人が目を潤ませてうつとつしているので問題ないだろつ。

まったく罪な人間である。

三人の妃たちを回り、次に玉葉妃のもとに向かう。
池の向こうの東屋にいるのを見つけた。

四夫人に対し平等に接すべき壬氏であるが、最近、どうにも玉葉妃の肩入れが強い。まあ、皇帝の寵妃といふことでそれほど問題視すべきでないが、理由は他にあるのは明確だ。

妃に礼をする。赤い衣がよく似合つとほめる。

たしかに、似合つて美しい。胡姫の神秘さと生来のあでやかさが空氣にまで混じるようである。

おそらく、後宮内では華やかさにおいて壬氏に見劣りしない人物といえば、玉葉妃くらいだろう。

だからといって、周りの女官たちが美しくないわけではなく、各自自分の魅力を引き出していた。

壬氏のすうじところは、それを明確に口にするところである。

誰もが自分が気に入っている部分を褒められたい、そこをつまみくくのだ。

壬氏は嘘をつかない。

ただ、本当のことを言わないだけで。

平静を装つているようだが、左の口角がわずかに上がつている。長年、仕えてきた従者にはわかる。玩具を目の前にした子どもの表情である。こまつたものだ。

公主の顔を見るように見せかけて、小柄な侍女に近づく。

が。

そこには無表情でどこか見下したかのようなあまりに不遜な顔をする、見慣れない侍女がいた。

「ノリヤギんよひ、ナニタま」

また来たのか、暇人野郎、とこう顔を表に出さないよつじ脈シテイを付ける。

高順が見ているので、できるだけ穩便にこきたい。

「化粧しているのか？」

「いいえ、していませんけど」

口とまなじりに紅を入れているだけであとはすつぴんだ。鼻の周りに薄ら斑が残っているが気にするほどでもない。

「そばかすが消えているぞ」

「ええ、消しましたから」

残っているのは、昔、自分で針を刺して入れた黥ゲイである。深く刺さず、薄い染料でつけたそれは一年ほどで消えてなくなる。たとえ、消えるとはいえ罪人の刑と同じことをするのに、おやじどのは難色を示していた。

「化粧して消したんだろう？」

「化粧を落としたから消えたんですよ」

(あー、適当にまじはつ言つとそばよかつたかな)

猫猫は、返答を間違つたことに気が付いたがもう遅かつた。

「おまえの言つてることはおかしいぞ、矛盾している」

「いゝえ。そんなことはありません」

化粧とはなにもきれいにするだけのものではない。既婚の女がわざわざ醜くなるように化粧をする場合もある。

乾いた粘土と染料を溶いたものを、猫猫は毎日鼻の周りにつけていた。刺青のそばかすをぼやかすと、うまい具合にしみのようになる。まさか、そんなことをやつているとは思わず、誰も気が付かなかつただけだ。

そばかすとしみを持つた特に特徴のない顔の女。
だから醜女じゅめと呼ばれていた。

逆を言えば、そばかすもしみもなければ、ただの特徴のない、つまり平均的な整つた顔立ちであることが言える。

それはほんの少しの紅でも、雰囲気が変わり、普段の猫猫とはまったく違う顔ができていた。

猫猫の説明に、なんだか理解できないといつ風に、壬氏が頭を抱えている。

「なんで、そんな化粧をするんだ？意味あるのか？」

「ええ、路地裏に連れ込まれないためです」

花街とはいえ、女に飢えた奴らもいる。そいつらは、大抵金も持たず、暴力的で、中には性病持ちも多かつた。

当然、ごめんこつむりたい。

ぽかんとした王氏がなぜか恐る恐る聞いた。

「連れ込まれたのか？」

「未遂ですよ」

いわんとした言葉がわかつたため、半眼でねめつける。

「かわりに入買いにかどわかされましたけどね」

後宮に売りとばす女は見目よいほうがいい。あのとき、たまたま化粧を忘れて薬草を取りに行つたのだ。薄れてきた刺青の染料をとるために。

「悪いな。管理が行き届いてなくて」

「別に、かどわかしの身売りと口減らしの身売りの区別なんてつかないだろ？ から、どうでもいいですよ」

前者は犯罪で、後者は合法にあたる。たとえ、かどわかしでも買った人間がそれを知らなかつたといえ、罰せられることはないのだ。

今現在、後宮でそんな化粧をしているのは、文字を書けることを隠していたのと同じ理由である。今更、どうでもよくなつたわけだが、いきなり素顔になるのも時機タイミングがわからずこのままでいただけにすぎない。

「ああ、申し訳なかつた」

(珍しく素直だな)

見上げようとするとい、頭にわくつと何かが刺さった。

「痛いのですが」

「そうか、やる」

ただの甘つたるい笑みではなく、どこか憂いと氣恥ずかしさの混じつた顔があつた。

頭を触ると、何もつけていないはずの髪に冷たい金属の感触がする。

「じゃあ、あとは会場でな」

後姿のまま、壬氏は東屋を去つた。

刺さっていたのは男物の銀の簪かんざしだつた。

「あー、いいなあ」

桜花インファがもの欲しそうに見ていたのであげようと思つたが、他のふたりも同じ顔をしていたので手を引っ込めるしかなかつた。
ホンニヤン
紅娘ホンニヤンは苦笑している。

「もう、早速約束破つたのね」

玉葉妃がすねた顔をしてみている。

猫猫の持つていた簪を取ると、結わえた頭にきれいに刺してくれた。

「私だけの侍女じゃなくなつたじゃない」

幸か不幸か、猫猫は宮中、特に上流階級の話に疎い。

それが示す意味もわかつていなかつた。

園遊会は中庭に設けられた宴席にて行われる。大きな東屋に緋毛氈ひもうせんが敷かれ、長卓が一列に並べられ、その先に上座が設けられている。

主上を上座とし、西脇に皇太后と皇弟、東側に貴妃、徳妃、西側に賢妃、淑妃が座する形となる。東宮が身まかられた現在、現帝の同腹の弟が、第一継承権をいただいている。

それにもしても、喧嘩を売るためだけの配置にしか思えない。四夫人の敵対心をあおっているようでならない。

その弟君であるが、母が皇太后であるにもかかわらず日の目を見ない生活をしている。

表向きこゝにして上座に席を設けられているが、空席である。病弱でほとんど自室から出ず、執務も行わない。

一部では、歳の離れた弟を皇帝が甘やかしているだと、もしくは幽閉しているとか、それとも皇太后がかわいがり過ぎて外に出しあたくないとしているのか、いろんな憶測も回っている。

まあ、マオマオ猫猫には関係ないことである。

料理が出るのは昼過ぎであり、今は曲芸や演舞を楽しんでいる。

ギョクヨウ玉葉妃には、侍女頭の紅娘ホンニヤウのみついており、なにか用がない限り他の侍女たちは幕の裏側で指示を待つのだ。

公主は皇太后があやしていた。漂う氣品と衰えを知らぬ美しさは、四夫人に囲まれても見劣りしなかつた。

(いつそ天幕テントを用意してくれ)

幕といつてもまさに田隠し程度なので、風よけにもならない。

懐炉を持った猫猫たちが、寒いと思うのに、それが他の妃の侍女たちとくればたまらないだろう。

案の定、控えている他の侍女たちは身体を小刻みに震わせ、中には内股になっているものもいる。今のうちに廁かわやに行けば問題ないと思うが、他の妃の侍女の手前行くにいけないとこらかもしない。

困ったことに、四夫人の侍女たちは主たちの代理戦争をしたがるのである。

各々こじあめる立場にある侍女頭はそれぞれの妃のそばに立っている。止めるものはいなかつた。

今現在、抗争の図は『玉葉妃軍対梨花妃軍』、『淑妃軍対徳妃軍』である。

ちなみに、玉葉妃軍は総勢四人なので、向こうの侍女の半分もない。いささか不利かと思われるが、桜花インフアががんばっていた。

「はあ、地味ですか？馬鹿じゃないの？侍女ってものは、主に仕えるものでしょ。無駄に着飾つてどうするのよ」

びつやから衣装のことでもめてこらへじ。向こうの侍女たちの衣装は、梨花妃に仕えるということで、青基調、ひれがついているのと飾りものが多いのでこちより派手である。

「なにいつひんの？見た目が悪いと、主が苦労するのよ。やつぱ、あの不細工を雇ってるだけのことはあるわー」

(おひ、田の前で莫迦にそれでいるよつだ)

他人事のように猫猫が思つた。言つまでもなく、不細工といつのは自分のことであつた。

偉そうに胸を張る女官は、以前、猫猫に反発していた一人だった。強気な性格だが、それに根性は付随しておらず、ことあるごとに「お父様に言いつけてやる」と言つていたのだ。あまりにうるさいので売り言葉に買い言葉で、「じゃあ、言いつけられない身体にしてやる」と言つたら怯えて近づかなくなつたのだ。

(妓女流の冗談は通じないのか)

少なくとも世間知らずのお嬢様には向かない言葉である。

「いないとこ見ると、置いてきたんでしょ。あんな醜女連れて来たら恥もいとこりうるものね。玉飾りの一つももらえないでしうし」

まったく猫猫のことに気が付いていないらしい。

(ひどい話だ。一か円も一緒にいたというのに)

桜花が爆発して飛び掛かりそうなのを残り一人がおさえているのを見ると、そろそろ静かにさせたほうがよさそうである。

猫猫は桜花たちの後ろにまわり、鼻を手のひらで隠して青い衣を着た侍女たちのほうを見た。

怪訝に目を細めた侍女が、何かに気が付くと隣の侍女に耳打ちする。
伝言遊戯のように、最後の意張りくさつた侍女に届くと、侍女は威

圧して突きだす指先をふるふるとわせ、口をあわあわと開いた。

(よひやく氣が付いてくれたか)

猫猫は自分なりに満面の、侍女たちから見れば獲物を狩る狼のよつ
な笑みを作る。

「あ、ああ、ああ」

「なつ、なによ」

後ろでにやにや猫猫が笑っていることも知らない桜花は、いきなり
小動物みたいに震える敵対者をいぶかしむ。

「あつ、ああ。も、もひれくじてあげるわ。か、感謝しな
れー」

と、わけのわからない捨て台詞を吐いて、幕の端に向かつた。他に
場所は空いているだらつこ、猫猫たちと一緒に離れた場所に向かうの
である。

ぽかんと呆氣ことじられる桜花たちと、

(やつぱつ、傷つくなあ)

などと思つ猫猫。

気を取り直し、桜花は猫猫に田線を合わせて、

「 もう、前からやな奴らだと思つてたけど。悪かったわね、不愉快

な思いをさせて。本当にこんなに可愛いの？」

すまなそつに桜花が言った。

「気にしていないので。それより、温石かえなくてよろしいですか」「ええ、まだ温かいし、大丈夫。それにもなんでいきなり震えだしたのかしら？」

「さあ、お花摘みにでも行きたかったのでは」

いけしゃあしゃあと猫猫は言った。

ちなみに、現在の猫猫は、親に折檻され身売りに売られて捨て駒の毒見役になつた、に加えて、水晶宮で一ヶ月間壮絶ないじめを受け、自分の顔を汚したくなるくらいひどい男性不信に陥つてている少女といつ設定になつてい。

困つたことに桜花たちの妄想力は年相応に半端ないのである。

壬氏が猫猫に突っかかるのも、天女のよつた御仁^{じん}が可哀そつな娘を気にかけているという図に描きかえられているので困つたものだ。

どこのをどつむればどうなるのか不思議なものである。

一方、もう一つの代理戦争はいまだ続いていた。

人数は、七対七。

白い衣装を着た侍女たちと暗色の衣装を着た侍女たちである。前者は徳妃、後者は淑妃側の侍女である。

「あそこも仲悪いわよね」

しみじみと桜花が言つ。

「齢十四と齢三十五。同じ妃でも親子ほど年齢がはなれてたらそもそも合わないわよね」

「若輩の徳妃に、古参の淑妃。そりゃあ、ねえ。いろいろあるものね」

おつとりした侍女、グイエン貴園が言つた。

「そうよね、元嫁姑だし」

長身の侍女、アイラン愛藍も頷く。

「嫁姑？」

なんだか後宮らしさからぬ話に聞こえる。猫猫は首を傾げた。

「ええ、ちょっと複雑なんだけれど」

二人は先帝の妃と東宮妃の関係だったといつ。

先帝が身まかられたとき、妃は喪に服すため道士となつた。

しかし、それは建前で、俗世を一度捨てることで先帝に仕えたことをなかつたことにして、今度は息子に嫁いだといつ。

(先帝の時代は五年前)

そのとき、徳妃は齡九つ、たとえ政略でもなんだかもやつとくる話である。この年で妃になるとは。

(こくら好色)でもそれはないよな

美髭の皇帝を思い出し、云々言つてこうじて衝撃の真実を知ることになる。

「ありえないわよね。九歳のお姑さんなんて」

愛藍は耳を疑つようなことを言つてくれた。

20 園遊券の発行（複数枚）

モテ期です。

徳妃、里樹の第一印象は、空気が読めない子であった。

宴の第一部が終わり、休憩時間がもうけられると猫猫と貴園は公主のもとへと向かつ。貴園が冷たくなつた温石を取り換えるあいだ、猫猫は赤子の容体を見る。

(特に体調は悪くないか)

きやつきやと林檎のような頬をした鈴麗公主は、最初に出会つたころよりもずっと表情が豊かで、父たる帝からも、祖母たる皇太后からも可愛がられていた。

(しかし、こんな屋外にずっとこじるのはどうよ?)

これで風邪でもひかせれば、首がどぶかもしれないのではまったくもつて理不尽である。

おかげで、籠に職人を使ってわざわざ蓋をつくり、まるで鳥の巣のようになんねができた。

(まあ、可愛いからいいか)

子どもが好きではない猫猫でも可愛いと感つのだから、赤子とは恐ろしい生き物である。

はいはいをするようになつて、外に出たがる公主をやんわりと籠の中に入れ、紅娘に渡そつとすると、後ろから荒い鼻息が聞こえてきた。

絢爛豪華な濃い桃色の大袖を着た、若い娘がこちらを見ていた。後ろに幾人もの侍女を連れている。

愛らしい顔をしているが、口をとがらせて自分の不機嫌を見せつけているようである。

(これが幼姑?)

紅娘ホンニヤンと貴園グイエンが深く頭を下げているのでそれにならう。

里樹妃はやはり不機嫌な顔のまま、侍女を連れてビロードへ行つた。

「あれが徳妃さまですか」

「ええ、そうなの。まあ、大体見てわかつたと思つけど」

「いろいろ読めないんでしょうか」

なにがといえば、その場の空気がである。

四夫人ともなれば、それぞれ己じが象徴じやうしゆを『えられる。

玉葉妃ギョクヨウであれば、真紅と翡翠を象徴じやうしゆとし、梨花妃リファであれば、群青と水晶、淑妃はたぶんお付の衣の色から黒だらう。柘榴富カクルイに住んでいるので、宝石は柘榴石カクルイシといったところか。

(五行からとつていてるとすれば、白が妥当なんだけど)

里樹妃の着ていた衣は濃い桃色で、いうなれば玉葉妃の赤い衣とかぶっている。宴席の席順を見ると、玉葉妃と里樹妃は隣り合つており、一旦見て色のつり合ひいが悪いのである。

(セツヒエバ)

遠巻きに聞こえてきた女官同士の喧嘩も、そんな話題だった気がする。

「なんていうか、まだ幼いのよね」

深くため息をつゝ紅娘の一言がすべてを物語っていた。

温石のぬるくなつたものは、あらかじめ用意していた火鉢に入れた。遠巻きによその侍女たちが見ていたので、玉葉妃に了解をとつていくつか渡してあげることにした。

縄や宝玉に見慣れた侍女たちが、たかだか温めた石くらいで喜ぶのだからなんだかおかしいものである。

残念なことに水晶宮の侍女たちは、猫猫が近づくとまるで磁鉄が反発するように一定の距離を置くので渡せずじまいである。

「なんだかんだでお人よし過ぎない?」

桜花インファが呆れたようになつて、「

「せつひえばそつかもしれません」

思つたことを素直に伝えた。

(せういえぱ)

休憩になつてから、どりにも裏幕に人通りが多い。
侍女だけでなく、武官や文官が入り込んでいるようだ。
皆、片手に装飾品を持っている。

女官と一対一で向かい合つているものもいれば、数対一で囲まれて
いるものもいる。

貴園アイランと愛藍エイランも知らない武官と話しているようだ。

「ああやつて、花の園に隠れた優秀な人材を勧誘するのよ」

「はい」

印に持つている装飾品を渡すの

「そうですか」

「まあ、違う意味もあるんだけどね」

「なるほど」

いつもと違つて、興味なさそじに返事するので桜花は腕組みをして
唇を尖らせた。

「違う意味もあるんですってばー」

「そうなんですか」

その意味を聞き出そうともしない。

「じゃあ、その簪かんざしちょうどいい」

「はい。でも、他の一人と猜拳じゃんけんしてください」

火鉢の温石をひっくり返しながらいった。

一年の奉公が終えたからと花街に戻るつもりの猫猫には関係ない話である。

それよりも、

(あんなのに口を使われるのなら、水晶宮で丁稚でいちしてたほうがましだな)

と、息絶えた蝉でもみるような田をしてくると、

「お嬢さん、これをどうぞ」

田の前に簪が差し出された。

顔を上げると精悍な顔をした大男が甘い笑みを浮かべている。まだ、若く髭はない。男前といわれる部類の顔をしているが、無駄に甘い笑顔に耐性の強い猫猫としては、何の感慨もなく見返すだけだった。

思つた反応と違うことを武官は感じたようだが、差し出した手はおさめられずにこご。中腰につま先立ちなので足元が震えている。

猫猫はどうやら男を窮地に立たせているのが自分だと気が付いたらしい。

「どうも」

猫猫が受け取ると、子犬が飼い主にほめられたような顔をした。なんとなく駄犬っぽいと猫猫は思つ。

「んじゃあなー、よろしく。俺、李白リハクといふから」

(たぶん、一度と会わないと思つた)

手を振る大型犬の帯にはまだ十数本の簪タマがさしてある。
侍女たちに恥をかかせないため、皆に配つているのだらうか。

(それならば悪いことをした)

桃色珊瑚のついた簪をながめると、

「もひつたの?」

と、貴園たちが来た。各自戦利品を帯にむけしている。

「参加賞ですが」

猫猫は感慨もなく答えた。

すると、後ろから、

「それだけでは、やみしいでしょ?」

聞き覚えのある高貴な声がある。

振り返ると、豊満な胸部、もとい梨花妃リハアが立っていた。

(少し太つたかな)

それでも、以前の肉体には及ばない。しかし、残つた陰りもまた妃

の美貌を引き立てていた。濃紺の裳に空色の上着、青い肩掛けを羽織っている。

(少し寒くはないだらうか)

玉葉妃付である限り、梨花妃には肩入れができない。
水晶宮を去った後も壬氏伝手にしか、容体をきいたことがなかった。
たとえ、宮を訪れても侍女たちに門前払いを食らうのはわかつているが。

「お久しうづけます」

「お久しぶりね」

顔を上げると、梨花妃は猫猫の髪をさわる。
また、壬氏のときと同じように何かがささつた。
今度は痛くない。

「じやあ、いきませんよ」

驚愕を隠しきれない妃付の侍女たちをたしなめながら、優雅に去つて行つた。

呆気にとられるのは翡翠宮の侍女たちである。

「あーあ。これは玉葉さま、すねるどいろじやないかもね」

桜花が呆れた顔で簪の飾り部分をはじいた。

紅水晶の玉飾りが三つ連なり揺れていた。

昼になると、**猫猫**^{マオマオ}は、**紅娘**^{ホンニヤン}と交代し**玉葉妃**^{ヤクヨウヒ}の後ろに立ついた。

イントラ
櫻花の助言を聞いて、とりあえず貰つた三本の簪はすべて帯につけることにした。玉葉妃のくれたのは首飾りなので、簪は一本くらいつけていいものだが、それではつけなかつた簪と優劣がつくこと。

あらためて宴席を上座から眺めると、なかなか壯觀である。

西側に武官が並び、東側に文官が並んでいる。長卓に座れるのはその中の一割ほどで、**高順**^{ガオシユン}も武官側の席に座つていた。思ったよりお偉いさんなのはわかつたが、宦官が違和感なく並んでいることに驚いた。

さつきいた大男も座つている。高順よりも末席に近いが、年齢を考えると出世頭なのかもしない。

王氏^{ジンシ}は反対にどこにも見えない。あれだけきらきらしていたら、すぐ見つかりそうなものなのに。

探す必要もないでの、本業に徹することにした。

最初に食前酒がきた。玻璃の器から銀杯に少しづつそがれる。ゆっくり杯を揺らし、接触部分に曇りがないか目視する。

砒石の毒があれば、色が黒ずんでくる。

ゆっくり回しながら匂いを嗅ぎ、口に含む。毒のないことはわかるが、毒見役として嚙下しなければ、毒見として認められない。じく

んと喉を潤すと、真水で口をぬすべ。

(おや)

（じつせなら、注皿をれてこるじしー。

他の毒見役はまだ、杯に口もつけていない。

猫猫が何もないのを確認すると、恐る恐る杯に口をつけるのだ。

(まあ、普通はね)

誰もが死ぬのは怖い。

誰か先にやるのであれば、見届けてからやったほうが安全である。

(宴席で毒を使つとすれば、即効薬しかないだらひし)

「の中で好んで毒を食らうのは猫猫くらいである。世の中こそうはない希少な人種である。

（じつせなら、河豚がいいなあ。内臓をつまへ羹に紛れ込ませて）

あの舌の先がしびれる感じがたまらない。あれを感じるために何度も嘔吐と胃洗浄を繰り返したことか。そんなことを考えているうちに、前菜を持ってきた侍女と皿があつた。口角が上がっている。気持ち悪くにやにやしていたようだ。完全に引かれているようである。

いつもの無表情に顔を戻す。

受け取った前菜は、皇帝の好物で夜食にたまにでていたものだ。食事は後宮側で作つてこるらしい。いつもと同じものである。

他の毒見たちが猫猫をじっと見るので、やつたと箸をつけてやる。

魚と野菜のなますだ。

好色親父であるが、案外食生活は健康志向だと、毒見役はいつておく。

(配膳間違えたな)

いつもと具が違う。

皇帝の好物の調理法を間違えることはない。

あるとすれば、別の妃用に作られたものがこちらにきてこるのである。

後宮の尚食は有能で、同じ献立でも皇帝用と妃用と作り分けている。玉葉妃が授乳中はずつとお乳にヨーメニューを作っていた。

毒見が終わり、皆が前菜を食べているところを見ると、やはり配膳を間違つたらしい。

空氣の読めない里樹妃リツキが青白い顔をしてくる。

(嫌いなものだつたか)

皇帝の好物という手前、残すわけにいかないものである。

我慢して食べている。

後ろを見ると、毒見役の侍女が目を瞑り、唇を震わせていた。微かに弧を描いているのは、見てわかつた。

(嫌なものを見た)

視線を戻し、次の料理を受け取った。

ただの宴席ならぬよいのに。

李白リハクは殿上から見下ろす高貴なかたとはそりが合わないと思つた。

なにが乐しうて、この寒い中、風が吹きすだる中、外で宴会など考えるのだらう。

いや、ただの宴会ならいい。古事にならうて、桃の園のなかで氣の合つ同士で酒を飲うて、肉を食むのはせせや乐しかろう。

しかし、高貴なおかたとともにになると、常に毒ともい一緒になる。いかに高級素材を使い、秘伝の技を駆使した余席も毒見を終えて冷えればうまやは半減する。

毒見を責めるわけではないが、毎回、怯えた青い顔でゆづくと匙を食むときは、それだけで胃の大きさを縮めるのだ。

今日もまた、同じように無駄に長い時間が過ぎるのだと思つていた。

だが、なんだかそつでもないらしい。

いつもは、毒見役が皆、顔を見合わせながら匙を運ぶ順を決める。でも今日は、やたら威勢のいい毒見役がいるようだ。

貴妃の毒見役、小柄な侍女は周りを一瞥もせず、銀杯を揺らして食前酒を口に含む。

ゆっくり嚥下すると、何事もなかつたかのように口をゆすりだ。

どこかで見たことがあると思ったたら、先ほど簪を渡したひとりだった。そして、目だった容貌でない、整っているが特徴がない。美形の多い後宮の女官の中ではあまたに埋もれるほうだろう。しかし、無表情のどこかに、他人を威圧する眼力を持つ娘だった。

愛想のない娘だと思ったが、表情は案外豊からしい。

無表情と思えば、なぜかいきなりにやにやして、かと思えば元に戻り、今度は不機嫌な顔をする。

それなのに、当たり前のようだに毒見をするので、これほんびんにもおかしかつた。

次はどうんな顔をするやう。暇つぶしにまちづっこ。

羹あつせのを差し出され、娘が匙スプーンをいれる。目視し、舌の上にゅうべりのせる。

娘の目が一瞬、見開いたかと思えば、急にとろんと蕩けるような笑みを浮かべた。

頬に赤みがさし、目が潤み始める。唇が弧を描き、半開きになつた口から白い歯と艶めかしい舌が見えた。

これだから女は恐ろしい。

唇についたしづくを舐めとるときは、熟れた果実のような最高級の

妓女の笑みであつた。

どれだけ美味しい料理なんだ。

平凡な娘をあれだけ妖艶にするにかがあるのだろうか、宫廷料理人の匠の技によるものか。

「ぐくりと生睡を飲んだ時、娘は信じられない行動にでた。

懐から手ぬぐいを取り出し、口につけると食べたものを吐き出した。

「これ、毒です」

無表情に戻った侍女は、業務事項を伝えると幕の裏側に消えていった。

宴席はどうよめきを見せながら終わりを告げた。

22 祭りの後（前書き）

クールダウン。

「随分とまあ、元気な毒見役だことだ」

口をゆすぎ終わり、ほんやりとしていた中、神出鬼没の暇人宦官が現れた。

宴席からずいぶん離れた場所にいるのによく見つけたものだ。

「！」おげんよう、ジンシ升氏セイジさま

いつもどおり無表情で返そうとするが、毒の余韻よいんか幾分頬がゆるい。笑顔で返したよう少し腹立たしい。

「むしろ」機嫌はそつちだわ

いきなり腕を掴まれた。

「なにするのですか」

「医務室に向かうにきまってるだる。毒食らってぴんぴんしているなんて洒落にならないぞ」

実際、元気そのものである。

吐き出さずに飲み込んでいたらどうなつただろつか。
好奇心が身体をめぐる。

今頃、しびれが体をめぐつてゐることだらけ。

(吐き出せなかよかつた)

せめて残りの羹あつものをいただけないだらうか。

壬氏にたずねてみる。

「おまえ、ばかだろ」

「向上心が高いと言つてへださー」

まあ、ふつゝ、そんな向上心は願い下げである。

普段、無駄にきらきらして壬氏だが、今はなんだか違つ氣がする。頭には新しい簪が差してあるが、先ほどと変わらぬ上等の衣をつけているの。いや、少し襟元が乱れている。乱れることがあつたところとかなるほどぞ、やうこいつとか、この不埒ものめ。

甘露の声は幾分かすれ、柔和な笑みもそこにはなかつた。

(きらきらのは調整できるものなのか)

それとも情事のあとで、疲弊してゐるのだらうか。

宴席にいなかつたのは、女面か文面か武面か面面を連れ込んだり、連れ込まれたりしていたのだらう。

そういうことにしておひづ。

まつたくお盛んなことである。

(ひかりのほうがまだいいな)

確かに美形であるが、これなら年相応の青年に見えなくもない。いや、むしろ幾分幼く見える。

今度から来る前は、いかがわしい運動のあとにしてもりえるよシヨンう高ガオ

順に頼んでおくか。

聞いてもらえるかは別として。

「おまえがあんまり元気そう出ていくもんだから、ほんとに毒かつて食べた奴がいたんだよ」

「誰ですか、その莫迦は」

使われたのは河豚毒だつた。

食べてしばらくしないと毒の効き田は表れない。

「大臣がしひれてる。あつちはそれで大騒ぎだ」

なるほど、これでは国の未来も危ないことだ。

「せつかくなので、これ使つてもうつたらよかつたのに」

胸元からじりじりと布袋を取り出す。胸の上げ底に入っていた嘔吐薬だつた。

「胃がひっくり返るほど、よく吐かれるように作ったのに

「いや、それは毒だろ?」

呆れた口調で王氏はこつた。

「IJつこも医官はこる。任せとおけば問題ない」

猫猫はふと思いつき、足を止める。
マオマオ

「どうした?」

「お願いがあります。一緒に連れてきてもらいたいかたがいらっしゃ

やるのですが

「だれなんだ？一体」

眉をひそめ、首を傾げる。

「徳妃、里樹リーチョウさまを呼んではくれませんか」

猫猫は凜とした口調で言った。

呼び出された里樹妃は、王氏には春のような嬉しげな笑みを、猫猫にはなんだこいつという白けた顔を見てくれた。落ち着かないのか、右手で左手をさすっている。

幼くとも女という生き物である。

医務室に向かおうとしたが、お莫迦なお偉いさんのせいで人だかりができており、仕方なく使われていない執務室を使うことにした。こうして比べてみると、建物にも後宮とそれ以外とで造りに違いがある。簡素で無骨な大部屋に里樹妃は少し不貞腐れた顔をした。

ぞろぞろ連れたお付は、高順に頼んで一人だけにしてもらっている。

猫猫は湯冷ましで解毒剤を飲む。飲まなくても平気だが、念のためと言われ、他人の調合した薬に興味があつたので飲んだ。

やぶ医者と違い、ここでの医官は優秀そうである。

河豚毒と知つていれば、解毒の意味がないことはわかつただろうが。

湯冷ましを置き、里樹妃に一礼する。

「失礼します」

「！？」

妃の左手をとり、長い袖をめくつた。白いたおやかな腕が現れる。

「やつぱつ」

本来、すべらかな感触のはずの肌に、赤い発疹ができていた。

「食べられないものがあるんですね、魚介の中に」

里樹妃はつづむいたままだつた。

「どうしてなんだ？」

壬氏が腕組みをしたまま、聞いてくる。
いつのまにか、また天女のおやかさを漂わせていた。
しかし、いつもの笑みはない。

「人によつては、食べられない食物がそれもある場合があるんですね。魚介の他に、卵、小麦、乳製品などもありますね。かくゆつ、私も蕎麦が食べられません」

明らかに驚愕の顔を見せるのは、壬氏と高順である。毒は平氣で食らひのことわんばかりだ。

(まつとこてくれ)

一応、食べられるように努力したが、気管支が狭まり呼吸困難になつた。そもそも、食べて腹から吸収されて発疹ができるので、量の調整が難しく治りも遅い。だから、慣らすのをあきらめた。そのうち、もう一度挑戦してみたいと思うのだが、やぶ医者しかない後宮では試すことはできないだろ？

「なんでそれがわかつたの？」

恐る恐る妃が口を開く。

「その前に、お腹の調子は大丈夫ですか。吐き気や痙攣はないように見えますけど」

よかつたら、下剤調合しますよ、といふ言葉にぶんぶん頭を振った。憧れの天上人の前でそれをいつのはなかなかひどい話である。ちょっと仕返しした。

「では、腰掛けて聞いてください」

見た目によらずまめな男の高順は、椅子をひいている。それに、里樹妃は座る。

「玉葉さまのお食事と入れ替わっていたからです。玉葉さまは好き嫌いがないので、ほとんど主上と同じものを口にしあがりますから」

それなのに、一品田も一品田も異材が違つた。

「鯖とあわびですか。食べられないのは」

妃がこくりと頷く。

後ろで侍女が動搖を見せたのを猫猫は見逃さなかつた。

「これは食べられない人間にしかわからないのですが、好き嫌い以前の問題なのです。今回は、じんましん尋麻疹程度すぎましたが、時に呼吸困難、心不全を引き起こします。いわば、知つていて与えたなら、毒を盛つたことと同じことです」

毒といつ言葉に過敏に反応する。

「里樹さまは、場の雰囲気もあって言い出せないことだったでしょうが、非常に危険な行為でござります」

猫猫は、視線をぼんやりと妃と侍女のあいだに定めた。

「ゆめゆめ、忘れないよ」としてくださー

どちらにこうわけでもなく忠告した。

しばらく間をおいて、

「常食の配膳係にもお伝えください

と言つたが、妃と侍女は頭にはいつていねいよつだ。

猫猫はお付の侍女に、詳しく危険性を説明し、もしもの場合の対処方法を書にしたためて渡した。

侍女は青白い顔のまま、小刻みに首を振つていた。

(齧しじはにこんなもんか)

侍女は毒見の女だった。

あの笑っていた女である。

里樹妃が退出したあと、後方からねつとりとした空氣と、肩に触れてくる手に気が付いた。

干からびた蚯蚓を見るほつがましだといつ冷めた目をする。

「下賤のものゆえ、お手を触れないでくださいますか

べたべたするな、」この野郎を婉曲に云ふ。

「そんなこと言つのはおまえくらいだぞ

「では、皆、気を使つてるのですね

すたすたと離れる。

胸やけがしそうな声にため息をつき、清涼剤の高順を探すが主に忠実な従者は「頼む、耐えてくれ」と曰いて訴えていた。

「では、玉葉さまのもとに報告にこきますので

「なんで、わざわざ毒見の侍女を同室させたんだ?」

いきなり核心をついてくる、だからやりにくく。

「なんのことでしょう。わかりかねますが

無表情のまま答える。

「では、配膳のものが間違えたところのか？」

「それもわかりません」

あくまでじりを切る。

「これくらいは答えてくれ。狙われたのは徳妃だということだな」

「他の皿に毒が入ってなければ」

やつこいことになる。

壬氏が考え込むのを見て、猫猫は部屋を退出すると、壁にもたれて深く息をするのだった。

22 祭りの後（後書き）

毒が決まりましたので、変更しました。

翡翠宮に戻るなり猫猫マオマオは、手厚い看護を受ける羽田になつた。

いつも使つてゐる狭い部屋ではなく、空き部屋の寝台に上等の被褥ふとんが敷かれ、あれよあれよと着替えさせられたらその中に放り込まれた。

上等の綿を使つており、いつもの菰ハサを重ねただけの寝台とは雲泥の差だ。

「解毒剤も飲みましたし、身体に異常はないんですが」

実を言えど、解毒剤は意味がない。そういう毒である。

「何言つてゐるの？あの後、食べた大臣がすつ『かつたんだから。吐ハラフき出したからって無事なわけないじゃない』」

櫻花は心配そうな面持ちで額に濡れた布をのせる。

(本当に莫迦な大臣だ)

初期治療でうまく吐き出せただろうか。

気になつたところで、今更、ここからでられないだろうし、仕方なく田を閉じることにした。

無駄に長い一日だった。

疲れはけつこなうたまつていたらしく、起きたのは毎前だった。

侍女としてこれはまずい。

起きて着替えると、紅娘ホンニヤンを探すこととした。

(そのまえに)

自室に戻り、いつも使っているおしおいを探す。おしおいといつても、皆が使っている真っ白なものではなく、いつものそばかすをつくるものだ。

磨いた銅板を鏡に、指先で刺青の周りをとんとん叩く。小鼻の上を特に濃く塗る。

(今更、すつぴんはねえ)

いちいち説明するのが面倒だ。

いつそ、逆にそばかすを隠したことにしてしまえばいいのかと思つたが、これはこれで恥ずかしい。たぶん、言われるたびに女の道が初めて通つたときのような反応をしてしまうだろう。

お腹がすいていたので点心の残りの月餅を一つ食べた。

紅娘ホンニヤンは玉葉妃ヨクハチのもとで公主の面倒を見ていた。

はいはいで動き回る公主に目を離せないようで、床の敷布の上からはみ出さないように移動させたり、つかまり立ちの練習で椅子が倒れないように押させていた。

「寝坊し、申し訳ありませんでした」

深く一礼する。

「今日は休んでもよかつたの?」

玉葉妃は困り顔で頬に手を当て、首を傾げている。

「やうもこさせん。なにかあればお申し付けください」

などというが、実際、普段から好き勝手にやっているのでこでもいなくても問題はないだろつ。

「そばかす……」

玉葉妃はあまり触れてほしくないと突っ込んでくる。

「落ち着かないの?」そのままようじでしうか

「それもやうね」

意外にも、簡単に引き下がつた。

猫猫は、怪訝な顔を妃に向ける。

「あの侍女は一体何者だつて。みんなから詰め寄られたのよ。大変だつたわ」

「申し訳ございません」

「その顔だと、一眼じやわからぬから都合がいいわね」

穏便に動いたつもりだが、それでもなかつたらしい。一体なにがいけなかつたのだろう。

「それと、朝から高順^{ガオショウ}が来ているけど、どうする？ 駄^{アラ}うのでも、外で草むしりしてもらっているんだけど」

(草むしり……)

たしか、けつこうな高官だったと思つが、さすがまめ男である。きっと、他の侍女たちの心をむんずとつかんでいるに違いない。

「居間を貸していただいてよろしいでしょうか？」

「わかったわ。すぐ呼ぶわね」

玉葉妃は紅娘から公主を受け取る。

紅娘は部屋をでて高順を呼びに行つた。

自分からいけば早かつたのだが、玉葉妃に手で制させ、そのまま居間に移ることになった。

「玉葉妃^{ジンシ}をまか^{シテ}これを」

来るなり挨拶もせずに、高順は布包みを卓においた。

ひらくと銀の器に盛られた羹^{あつもの}があつた。

猫猫^{ねこねこ}が食べたものでなく、本来、玉葉妃が食べるはずだつたものだ。昨日は断つたが、結局、ご丁寧に持つてきてくれた。律儀なことであるとともに、何か調べようとしていることだらう。

「食べないでください」
「食べません」

(銀は腐食が激しいからな)

食べない理由が他にあることを高順はわからないだろう。
疑わしげにこぢらを見ている。

猫猫は器に直接触れないように持ち、皿を細めてじつと見た。
器の中身ではなく、器 자체を。

「これは、素手で持つたりしましたか？」
「いいえ。毒が中身を匙でとつただけです」

毒物を触るのも嫌だといつらじく、布で触れずに包み込んだといつ。

それを聞いて、猫猫は唇をゆがめる。

「なるほど。少し待つください」

猫猫は居間を出ると、台所へと向かう。
「いや」とあるものをとつだす。

次は先ほど眠っていた寝室へ。

上等の褥に頭を下げる、布と布の縫い目をほどき、中身を取り出し居間に戻る。

持ってきたのは白い粉と柔らかそうな綿だった。

猫猫は綿を丸めると、粉をつける。
それをぽんぽんと銀の器にはたいた。

高順は首を傾げ、のぞきこんでくる。

「これな?」

器に粉のあとが残る。

「人間の手が触れた跡です」

指先は油が出やすく、金属など触れるとやけのあとが残るのだ。
腐食の激しい銀食器ならなおのことだろう。

黄、ねやじどのが猫猫の悪戯^{いたずら}防止こと、触つてはいけない器に染料をつけていたことがあった。

それを参考にして、思いつきでやってみたら案外うまくいくものである。粉の粒子がもつと細ければ、もう少ししあつたり見えただろう。

「銀食器は使う前に必ず布で拭きます。くもつがあつては意味がありませんので」

食器には指のあとがいくつかついている。

指の大きさと位置でどのように持っているのかくらいは推測できそうだ。

(さすがに模様までは読み取れないな)

「器を持ったのは……」

言いかけてしまつたと思った。

それを逃す高順でもない。

「いかがしましたか？」

「いいえ」

下手に隠し立てじようとも意味はない。
昨日の『こまかしは無駄になるがしうるがない。

「全部でおそらく四人。この器を触れていますね」

指先が触れないように白い模様をせじていく。

「食器磨きは指をつけることがないので、あつもの羹をよそつたもの、配膳あつしょんしたもの、それと徳妃の毒見役ともうひとりの誰か」

高順せいいかんが精悍な顔をあげて猫猫を見た。

「なぜ毒見役が？」

できれば穩便にすませたい。

それは、この寡黙な男の器量次第である。

「簡単なことです」

猫猫は器を置いた。

顔に苦味が走る。

「こじめですよ」

「こじめ……」

高順^{ガオシュン}は信じられない顔をする。

それはそうだ。上級妃に対して侍女が、そのよつなこととするなどあつてはならない。ありえないのだ。

「信じられないようですね

むこうが知りたがらないようなら、猫^{マオ}も話そつとは思わない。
憶測^{メイツ}でものをいうのは好きではない。

しかし、侍女がなぜ器に触れたのか説明することは、それを話す必要がある。

下手なまかしを入れるより正直に意見を述べることにした。

「聞かせてもらえますか?」

「わかりました。これはあくまで私の憶測であることを前もって言つておきます」

「問題ありません」

まず、里樹妃^{リーシュ}の特殊な立場から述べる。

幼いながら先帝の妃となり、そしてすぐに出家する羽田^{ヒタ}となる。多くの女は、夫に妻は身を以つて頗るよく教養^{けんよう}される。育ちがいいものほどそれが顯著^{けんしょ}だ。

たとえ政略^{せいりゃく}とはいえ里樹妃が、亡くなつた夫の息子のもとに嫁ぐな

「不徳も甚だしここつ」とある。

「里樹妃の園遊会の衣をみましたか？」

「……」

「空氣、読めてませんでしたよね」

しかし、お付のものは皆、白に準ずる衣を着ていた。

「普通なら、侍女は妃にまともな衣装をすすめるなり、もしくは合
わせて準ずる衣を着るなりするはずです。でもあれは、まるで里樹
妃が道化にしか見えなかつた」

侍女は主を立てるものである。それは、紅娘ホンニヤウが他の侍女に言い聞か
せている言葉である。それは、園遊会の際、桜花イシフラのいつた言葉でも
如実にわかる。

そのように考へれば、里樹妃の衣装のことで侍女同士がもめていた
件も違ひ見方が出でてくる。

(ふがいない里樹妃の侍女たちを淑妃の侍女たちがいわめていた)

年若い里樹妃は、侍女におだてられて似合ひからうとあの衣装をつけ
たに違ひない。

何の疑いもなく。

後宮内では、周りは皆が敵、信じられるのはまわりの侍女たちだけ
だといつのこと。

「それだけでなく、食事を入れ替えて里樹妃を困らせようとしたと

高順が確かめるようにたずねる。

「ええ。結果として命拾いをしましたけど」

河豚ふぐの毒は、しばらくたたねば効果はない。つまり、入れ替えていなければ、毒見が無事だと思い口にしていただろう。時間は十分にある。

「いやなやり方です」

(憶測はそこまでにして)

器を再び手に取り、指をさす。

「これは多分、毒をまぜたものの指のあとでしょ。ふちを押されても毒を混ぜられたのかと」

食器のふちに触れてはいけない。それも、紅娘の教えである。やんざとなきかたの脣が触れる場所を指で汚してはならないからだ。

「私の見解は以上です」

高順は顎をさすつて銀食器を見ていた。

「ひとつ聞いてよいですか」「何でしょ?」

食器を包み、高順に渡す。

「なんで、あの侍女をかばおつとしたのですか？」

怪訝に見る猫猫に対し、高順は興味本位です、と付け加えた。

「妃に比べたら侍女の命など軽くへやすこものです」

まじてや、毒見役なり。

高順は、いわんとしたことがわかつたらじく軽く頷く。

「王氏ジンシがまほひまく説明します」

「あつがとつゝざります」

高順が退出したのを見送ると、猫猫はどうぞんと椅子に腰かけた。

「せうだよね。お礼はしないとね

(せつかく取り換えてくれたんだから)

やつぱり、飲み込んでおけばよかつたなあ、と思つながら。

「以上で終了です」

高順の報告を聞き、王氏は髪をかきあげた。

机には書類が重ねられ、判を待つていて。

「いつ聞いてもおまえの物言いはつまいなあ」

「そうでしょうか」

精悍な従者はにべもなく言ひ。

「どう考へても内部犯だよな」

「状況からはそうなります」

頭が痛くなる。

思考を放棄したい。

なにせ、昨日から眠る暇もない。

着替えもできていない。

地団じだん太だいを踏みたくなる。

「素すが出てきていますよ」

普段の笑顔はなく、年相応に不貞腐れていた。
それが高順にははつきりわかるらしい。

「誰もいないからよくないか?」

「私があります」

「そこはおまけで」

「だめです」

軽口を聞いてみると、生真面目なこの男には通用しない。生まれたときから面倒をみられるのも厄介なものである。

「かんざし、簪かんざし、さしたままです」

「ああ、いけね」

「隠れていたので、気づくものはいなかと」

深くささつた簪を引き抜くと、匠の透かし細工（さくこう）が現れる。鹿とも馬とも言い難い伝説の動物は麒麟（きりん）といった。

「頼むわ、保管」

無造作にそれを投げつける。

「大切にしてください。大事なものですから」

「わかつてゐるよ」

「わかつてません」

お小言を言い終えると、十六年来の世話役は執務室をあとにした。

壬氏は、子どもの顔のまま、机に突っ伏した。

仕事はたくさん残つている。

はやく暇を作らねば。

「やるか」

大きく背伸びをして筆をとる。

暇人になるために、仕事を終わらせなければならなかつた。

24 麒麟（後書き）

まあ、『想像のとおりですね。』

「どうやら、くだんの毒殺騒ぎはけつこう大事らしい。
小蘭は猫猫に食つてかかるよつて聞いてへる。

洗濯小屋の裏は、下女たちの駄弁り場所となつてゐる。そこで、木箱の上に座り、団子のように連なつた山査子を食べる。

(おやか当事者だとは思ひまつ)

小蘭の山査子を頬張りながら足をぶらぶらさせる姿は、年齢よりも幼く見える。

「猫猫のところの侍女なんでしょ。毒食べたのつて
「やつだけど」

嘘は言つてない。

「何が知らないけど、何者だって話なんだけど。大丈夫なわけ?
「そうだね」

なんだかとても居心地が悪いので何度もほぐりかすと、小蘭は仕方ないと口を尖らせた。

小蘭は一粒残つた山査子の串をぶらぶらさせた。まるで血赤珊瑚の玉簪のようである。

「じゃあさあ。簪とかもつたりした?」

「一応

義理を含む、計四つ。玉葉妃^{ヤクハヒ}の首飾りもいれておく。

「いいなあ。じゃあ、いつから出でられるんだね」

(ん?)

「今、なんて言った?」

「えつ? いつから出るんじゃないの?」

桜花^{インファ}がしつこく言っていた。

それを聞き流していたのは自分だった。

失敗したと頭を抱える。

かぶりをふり自己嫌悪に陥る。

「どうしたん?」

怪訝に眺める小蘭を見た。

「それ、詳しく教えて」

いつになくやる氣のある猫猫を見て、小蘭は胸を張る。

「あい、わかった」

おしゃべり娘は簪の使い方について教えてくれた。

李白リハクが呼び出されたのは、修練のあとのことだった。
汗を拭きつつ、刃びきした剣を部下に渡す。

なよなよしい宦官かんがんは、木簡と女物の簪を渡した。
桃色珊瑚ももいろさんごの飾りのついたそれは、以前、幾多いくたも配つたうちの一につに
過ぎない。

義理とわかつて本氣にしないと思っていたが、どうやらやうでもないらしい。

恥をかかせるのも悪いが、本氣にされるのも困つものである。
しかし、美人であればもつたいない。

やんわり断る言葉を考えながら、木簡を見る。

『翡翠宮 猫猫』

そのように書かれていた。

翡翠面の女面にはひとりしか渡していない。

あの無愛想な侍女にしか。

はてはてと、顎をさすりながら李白は着替えの準備をした。

後宮内は基本男子禁制である。

べつに切り落としたわけでもない李白は、当然禁断の園である。今後はいることもなかろうし、あつたら困ることである。

そんな恐ろしい場所であるが、特別な許可を取れば、中の女官を呼ぶことができる。

その手段がこの簪だった。いくつかの手段のひとつである。

中央門の詰所を借り、呼び出し人を待つ。

さして広くない部屋には机と椅子が二人分、両側の扉の前には宦官がひとりずつ立っている。

後宮側の扉から、瘦せた小柄な侍女が現れた。鼻の周りにそばかすとしみがおおつていた。

「誰だ、おまえ？」
「よく言われます」

無愛想に淡々と話す侍女は、手のひらで鼻の周りを隠した。見たことある顔が現れる。

「化粧で化けるって言われないか？」
「よく言われます」

不機嫌な様子もなく事実として受け止めている。
なんとなく理解できる。

あの毒見役の侍女であると。

しかし、しみだらけの顔を見るどぞうともあの妖艶な妓女の笑みとつながらない。

まったくもつて不思議なものだ。

よつえん

「しかし、また俺を呼び出すなんて、どうこいつ意味かわかっているのか？」

腕を組み、足も組む。

身体の大きな武官が偉そうに座る中、小柄な娘は物怖じもせず言つてくれる。

「実家に戻りたいと思いまして」

何の感慨もなく言つのである。

李白は頭をかきむしる。

「それで、俺に手伝えと？」

「ええ。身元を保証していただければ、一時帰宅は可能と聞きましたので」

とんでもないことを言い出すものである。

本来の意味をわかつているのか、と聞き出したい。

どうにもこの猫猫という娘は、血分を里帰りのために利用しようとしているらしい。武官をつかまえてやることではない。

豪胆とこひやう、命知らずとこひやう。

李白は頬杖をつき、鼻を鳴らす。

態度が悪いといわれようど、正す気もならない。

「なんだ？俺は嬢ちゃんにつまく利用されたとか？」

李白は、好漢だといわれているが、睨み付けるとそれなりに恐ろしい顔である。

急げる部下を叱つづけると、関係ないものまで謝つてくる程度に。

それなのに、眉一つ動かそうともしない。
感慨なく、眺めているだけである。

「いいえ、こちらもそれなりにお礼ができるにいかと」

猫猫は机の上に、束ねた木簡を置く。
紹介状のように見える。

「梅梅^{メイメイ}、白鈴^{バイリン}、女華^{ジョカ}」

女の名だ、李白には聞き覚えがあった。いや、李白以外にも多くの男どもが知っているはずだ。

「^{るくじょう}緑青館^{うかん}で花見はいかがかと」

一晩で一年分の銀がなく、高級妓楼の名前だった。先ほどの名前は、三姫と呼ばれる売れっ子たちだ。

「心配ならば、これを見せればわかります」

娘は唇を歪ませるだけの笑みを向けていた。

「冗談だろ？」
「お確かめを」

まったく信じられないことである。

たかだか、侍女程度に高級官僚もなかなか手を出せない妓楼に伝手があるとは考へにくい。

どうこうことだ。

わけがわからないと頭をまたかきむしる、娘はふとため息をつき立ち上がった。

「どうしたんだ？」

「信じていないうえですので。お手間をかけました」

すっと胸元から何かを取り出す。

一本の簪、紅水晶と銀製のものだ。

「申し訳ありませんでした。他を当たりますので」

「ちよ、ちよつ」

持つていろいろとした木簡を押さええる。

表情のない猫猫の目が李白を見ていた。

「どうなさいますか？」

負けたと思つた。

「よかつたんでしょうか？玉葉さま」

紅娘は扉の隙間から、猫猫を見る。普段に比べ血色がよく、つわづわ

きと荷造りをしていく。

本人はあれでいつもどおりのつもりだから不思議なものだ。

「まあ、三日だけだしね」

「そうですけど」

侍女頭は自分につかまつり立ちしょくすする公主を抱き上げる。

「絶対、わかつてないでしょうけど」

「そうね、絶対」

他の侍女たちは、猫猫に「おめでとう」と伝えているのだが本人はわかつてないらしい。お土産買ってくると呑気な返事をしている。

玉葉妃は窓辺に立ち、外を眺める。

「まつたく、可哀そなのはあの子だわ

ふつつと、ため息をつくが、そこに悪戯な笑みが浮かんでいた。

仕事を片付けてようやく暇人になつた王氏^{ジンシ}が翡翠宮をおどずれるのは、猫猫の出発した翌日のことである。

25 李白（後書卷）

フラグクラッシャー

帰りたい、帰りたいといつてていた花街は、それほど遠い場所ではない。

後宮ひとつで町ひとつと変わらない大きさだが、それをすっぽり囲むのが王都である。

花街は宫廷の反対側にあり、高い塀と深い堀をこえれば、歩いて行ける距離にある。

(馬車で行くなど贅沢なのに)

隣に座る大男、李白は馬の手綱を持って鼻歌を歌っている。

木簡もっかんを渡し、話が本当たてまつだとわかつたからだ。

憧れの妓女に会えるなら、そんなものなのだろうか。

妓女と言つても、一括りにしてはいけない。身を売るものもいれば、芸りを売るものもいる。

売れつ子と言われるものほど、客は多くとらない。それによつて希少価値を上げるためだ。

茶を一つ飲むのに銀をいくらでも払わねばならない、夜伽よかなどもつてのほかだ。

そんな奉たてまつられた存在は、一種の偶像となり、市民の憧れとなるのである。

町娘の中には、憧れて遊郭の門をたたく者もいる。それになれるのはほんの一握りだというのに。

緑青館ろくしょうかんは王都の花街の中でも老舗せんぱいで、中級から最上級の妓女を取り揃えている。

その最上級の中に、**猫猫**^{マオマオ}が小姐と呼ぶものたちがいる。

がたんがたんと揺れる馬車から懐かしい風景が見える。

食べたかつた串焼き屋は、香ばしい匂いを通りにまき散らしていた。水路に沿い柳が揺れ、**薪売り**^{まき}が声を上げている。

豪奢な門をくぐると、極彩色にまみれた世界が広がっている。まだ昼間というだけに、人通りも少ないが暇な遊女が一階の欄干から手を振っている。

一際大きな門構えを持つ楼閣の前で馬車は止まった。

猫猫は軽い足取りで馬車を降りると、入口に立つ老婆に駆け寄った。

「ひさしぶり、婆さん」

煙管^{きせる}を噛む痩せた女にいった。その昔、真珠の涙を持つと言われた遊女は、今では、涙も枯れ果て枯木のようになつていて。身請けも断り、年季が明けても居残り続け、今では誰もが恐れるやり手婆になつてている。時は残酷だ。

「なにが、ひさしぶりだい。こん莫迦娘^{ばかむすめ}」

みぞおちに衝撃が走る。

胃液が逆流し、口の中が酸っぱくなるのも懐かしいと思つのだから不思議なものだ。

過去、何度これで摂取量をこえた毒物を吐き戻したことだろつ。

基本、お人よしの李白はわけがわからないまま、猫猫の背中をさすつている。

なんだ、ここの婆と顔が語っていた。

汚した地面をつま先で土をかける。
隣の李白は心配そうに猫猫を見る。

「ふーん、これが上密かい？」

値踏みをするように李白を眺める。
馬車は店の男衆にあずけた。

「いい体格だね。顔立ちも男前だ。話によると、出世株みたいじゃ
ないか」

「婆ちゃん、それ、本人の目の前でいつのどりよ」

やり手婆は素知らぬ顔で、門前を掃除する禿を呼ぶ。

「白鈴^{バイリン}呼んできな。今日は、茶挽きのはずだ」

「白鈴……」

李白が、じくじくと喉を鳴らす。

舞踊が得意と聞く名の知れた妓女である。

李白の名誉のためにいっておくが、それは単なる遊び女に対する情
欲でなく、憧憬^{アイドル}の思いである。

雲の上の偶像^{アイドル}に、目の前で会えること、茶を同席することだけで、
名誉なのだから。

(李白小姐があ、ひょっとしたらひょっとするかもなあ)

「李白さま」

猫猫は隣で呆けている大男をつづく。

「上腕二頭筋に自信はありますか?」

「よくわからんが、身体は鍛えているつもりだぞ?」

「そうですか。うまくやってくださいね」

首を傾げる大男は、女童に連れられて行つた。

猫猫としては、ここまで連れてきてくれたことに感謝している。やはり、それ相応にお返しもしたいわけである。

一夜の夢が見られれば、一生の思い出になるだらう。

「猫猫」

しわがれた声の主は、恐ろしい笑みを浮かべてゐる。

「十月も連絡よこさず消えやがつて」

「しかたないだろ、後宮で働いてたんだから」

木簡にしたためて、大体の説明はしてある。

「一見お断りのところを、こんだけ面倒見てやつたんだ
「わかつてゐつて」

ふといふ
懐から袋を取り出す。

今まで後宮で働いた給金の半分だ。

「こんだけじやあ、足りないねえ」

「まさか、白鈴小姐だすとは思わないけど」

上級妓女なら一晩いい夢を見ておつりがくるはずだった。

李白とて、ひとめでも三姫に会えたならそれで満足しただろ？

「お茶位ならきつきり負けてくんない？」

「莫迦。あの腕っぷしで白鈴が何もしないわけないだろ？」

(やつぱつ)

最上級の妓女は身を売らない」というが、恋をしないわけじゃない。
まあ、そういうことである。

「それって不可抗力……」

「なわけあるかい。ちゃんと勘定に入れとくからね

「払えないって」

(残りをいれても足りないなあ。どう考へても)

考え込む猫猫。

どうみても言いがかりである。

「なあに、最悪、身体で払えばいい」と。お上かみから女郎屋にうつるだけだ、かわりなこ。おまえみたいな傷物でも、すき好む好事家はいるからね」

ここ数年、婆は猫猫にやたら妓女になることをすすめてくる。一生を花街にさやげたこの婆は、妓女が不幸な職とは思つちやいない。

「年季まだ一年残つてんだけど」

「なら、上客どんじんよこしな。爺じゃなくて、さつきみたいな長

く適度に搾り取れそうなのをや、「

(「一む。やつぱり搾り取られるか)

強欲婆は算段しか頭にない。

身売りはもつけっこうなので、今後、生贊を適度に送らなければならなくなつた。

(「面でも密になるのか」)

王氏の顔が浮かんだが、あれはだめである。

妓女たちが本気になり、店がつぶれかねないので却下である。

だからといって高順ややぶ医者には悪い気がする。やり手婆に搾り取らせるまねはしがたい。

出会この場がないところのは、本当に不便なものだ。

「猫猫、爺はいま家にいるはずだから、さつとこいつてやんな

「ああ、わかつた」

深く考へても今のところの解決策はない。

猫猫は緑青館の脇道を抜ける。

通りを一つ抜けると、花街はとたんにさびしいものとなる。掘立小屋が立ち並び、割れた茶碗に錢がたまるのを待つ物乞いや、

梅毒のあとが見える夜鷹よだかもいる。

寂れた小屋のひとつが猫猫の家である。

一間の土間しかない狭い家に、背を丸め、すり鉢をするものがいる。深くしわの刻まれた、柔らかい輪郭をした、まるで老婆のような男である。

「ただいま。おやじ」

「おひ、遅かったね」

普段通りの挨拶をし、何事もなかつたかのようにひみつけた足取りで茶を用意する。

使い古された湯飲みに茶を入れるのでそれをいただく。ぽつぽつと今まであつたことを話すと、おやじどのはそれに相槌をうつだけだった。

薬草と芋でかさ増しした粥を夕餉ゆづけにとると、そのまま眠ることになった。風呂は明日、縁青館でもらい湯でもしよう。

土間に菰いのちを敷いただけの簡素な寝床に丸くなつた。おやじどのは上から着物を重ねて着せ、竈かまどの火を絶やすぬようになり鉢をすつていた。

「後あとか。因果だねえ」

おやじどのがつぶやいた言葉は、眠氣の奥に消えていった。

27 誤解（前書き）

だらだら会話ばかりの回です。

二日間の里帰りはあつといつまで過ぎていった。

懐かしい顔ぶれにあい、ずっとこのままいたい気持ちも強かつたが、後宮の仕事を放棄するわけもいかず、また、身元引受人の李白に迷惑がかかるので帰らないわけにいかない。

なにより、どんな嗜虐趣味サディストを猫猫マオマオの初売りに出そか考えてくるやう手婆に背中を押されたこととなる。

(いい夢みれたみたいだな)

やたらつやつやしている白鈴小姐バイリンと、眼尻あんしが下がりはちみつに漬けた杏あんずのよつにかわつた李白を見ると、過剰に報酬を払い過ぎたと後悔した。

おかげで次の身売り先が決定である。

まあ、一度、天上の甘露を知つた李白には、地上のそれが口に合わなくなることに多少は同情した。

きっとやり手婆は、生かさず殺さず搾り取ることだらけ。そこまでは、猫猫に責任はない。

そんなわけで、土産を持つて翡翠ひすいきゅう宮に帰ってきたわけであるが、い

たのはやたら剣呑な空氣を纏う天女のよつた青年だった。

柔軟な笑みの向こうに蠱毒のよつた禍々しい氣を感じる。

なぜだらけ、やたらひけをこらんでいる。

性格はなんであれ、美人は美人だ。それににらまれれば、迫力である。

面倒くさそうなのでできるだけ関わらないよつに頭だけ下げて、自室に向かおうとすると、しつかり肩をつかまれた。爪が食い込むいきおいである。

「応接室で待つぞ」

耳元にはちみつのよつな声が流れる。蜜は蜜でも、鳥兜の蜜である。

後ろで、諦めると田で語る高順。

困つたよつで目を輝かせている玉葉妃。

なぜだか猫猫を責めるよつな田で見る紅娘。

侍女三人娘も、心配より好奇心が上回つてゐる。

あとで根掘り葉掘り聞かれることだらけ。

（一体、なにがどうしたと？）

荷を置き、侍女服に着替え終わると応接間に向かつた。

「なにかご用でしょうか？」

部屋には壬氏一人しかいない。簡素な官服を優雅に着こなし、椅子に足を組み、卓に肘をついている。なんだか、いつもより態度が悪い気がする。気のせいだろうか、気のせいにしたい、気のせいにしよう。

清涼剤たる高順もいない。

玉葉妃も見当たらない。

まあ、つまりいたたまれない。

「里帰り、いつてきたようだな」

「はい」

「どうだつた？」

「皆、元気そうでなによりでした」

「そうか

「はい」

「はい」

「……」

「李白っていうのは、どういう男なんだ？」

「はい。身元引受人です」

(なぜに名前を?)

今後の常連もある。大切な金づるだ。

「意味がわかつてゐるのか？その意味が」「ええ。身元のしつかりした高官でなければ、引受人にはなれない」と

壬氏は、なんだかものすごく疲れた顔をしてゐる。当たり前のことはいうことだらうか。

（かんざし）
「簪をもひつたのか？」

「何本も配つていましたので。義理でいただきました」

今考へると、太つ腹である。シンプル簡素な意匠デザインだが、作りのしつかりした簪だった。

「つまり、義理で貰つたものに、俺は負けたんだな？」

（俺？）

聞きなれぬ一人称に首を傾げる。

「俺もあげたはずなんだが、まったく話は来なかつたな」

不貞腐れたような顔をする。

天女の笑みはそこになく、猫猫とさほど歳の変わらない、もしくはそれよりも幼く見えた。

表情一つでここまで変わる人間つているものだと感心する。

どうやら、李白に頼り、壬氏に話が来なかつたといふことが氣に食わないらしい。不思議なものだ。面倒事は関わらないほうが楽に決まっているのに。そのところは暇人だからか。

「申し訳ありません。壬氏さまに満足いただける対価など、私には思いつかなかつたもので」

(宿舎を妓楼に誘つなど、失礼でなかろうつか)

茶飲みや詩歌を吟^{ぎん}ずるだけの場所ならいざ知らず、色事にふけることもあるところだ。男でなくなつた人間をそこに誘うのは気が引ける。

なにより、壬氏ほどの人間だ。そんじょそこらの妓女ならば木乃伊^{みいら}とりが木乃伊になる。

「対価つてなんだ? おまえ、それを李白^{しらひ}つてやつに払つたのか?」

なにやら怪訝な顔をしている。

不機嫌に加えて、不安な表情が混じる。

「ええ、一夜の夢に喜んでおりました」

(あれじやあ、しばらく現に戻れまい)

勇ましい武人も白鈴小姐にしてみれば、猫の子のよつなものだらう。今後、小判を運んでくるのか。

壬氏をみると、どうにも血の氣の失せた顔をしている。
茶碗を持つ手が震えている。

(部屋が寒いのだろうか)

猫猫は火鉢に炭をくわえると、扇子で火をあおつた。

「大変満足いただけたようで、一いちらとしても頑張ったかいがありました」

(新規顧客探しも頑張らないと)

決意を新たに拳を結ぶと、後ろで茶碗の割れた音がした。

「なにしてるんですか?」

陶器の欠片が散らばっている。

青白い顔で突つ立つている玉氏の服は、茶のしみで濡れていった。

「ああ、すぐ拭くもの持ってきますから」

扉を開けるとそこには、お腹を抱えて笑つている玉葉妃。ものすごく疲れた顔をした高順。呆れてものが言えない紅娘がいた。

猫猫はわけがわからないまま、とりあえず布巾ふきんを探しに台所へと向かつた。

「こつまでいじけているのですか

執務室に戻つても玉氏は机に突つ伏したままである。高順は深くためいきをつく。

「仕事中だといつ」とを忘れないでください
「わかつてゐよ」

わかつていない。

壬氏という人物はそのような子どもみたいな返事はしない。
おもちゃ
玩具に深く執着しない。

あの後、笑い転げる玉葉妃から事の詳細を聞くのに苦労した。
身元引受の見返りとは、憧れの人気妓女との面会だったという。あの娘にそんな伝手があつたとは、まったく想像がつかなかつた。

しかし、主はどんな想像をしたことやら。ああ、若いって恐ろしい。

幾分、落ち着きを取り戻しているが、それでも不満が残るらしい。

まあ、仕事を急いで終わらせて会いに行けば、知らぬ男と里帰りなど青天の霹靂には違はあるまい。

いつまでも子どもをなだめている暇はない。

高順は漆の箱を机に置くと、中から書簡を取り出した。

「先日の報告がようやく届きました」

火傷の女官を探せといつ。あれからひと月はたつていた。

「時間のかけ過ぎだ」

うつむいた顔をあげ、壬氏の顔にもどる。

「申し訳ありません」

言い訳を付け加えることはしない。
それが高順の信条だった。

「一体、誰だ？」

「はい。意外と大物でした」

書簡を机の上に広げる。

「さくろきゅう柘榴宮、フオノミン風明。淑妃の侍女頭です」

「うわー、お嬢ちゃんもついてきてくれないかね」

やぶ医者が肩を震わせながら頬むものだから、何だと思えば。
連れてこられたのは、北門の屯所前とんしょである。
幾人もの宦官かんがんがなにかを取り囲み、そのまわりを同心円状ドーナツに女官たちが集まっている。

「冬場でよかつたですね」

筵むしろに隠れるは、青白い顔をした女。髪がはりつき、唇が青黒くなっている。

水死体のわりにきれいな姿をしているが、やはり見ていて気持ちのいいものでなかろう。寒い季節で本当によかつた。

検死をすべきやぶ医者だが、乙女のよつに猫猫マオマオの背中に隠れている。まったくもつて、やぶ医者である。

今朝、外の堀に浮かんでいたらしい。

恰好からどう見ても後宮内の女官である。

外で処理することままならず、じつしてやぶ医者が呼ばれたのであるが。

「嬢ちゃんかわりに、見てくれないかい？」

どじょうひげを震わせて、上田使いで見てくるがそんなの知ったことではない。

ひとをなんだと思つてゐるのだろう。

「だめです。死体にはさわるなどいわれているので
「それは意外なことだな」

これまた、失礼なことをいうのは、聞きなれた天上の声だった。
いつまでもなく、周りの女官が嬌声きょうせいを上げる。作られすぎて、舞台
劇でも見ていいようだ。

「（）せげんよう、壬氏ジンジさま」

（死体の前で）機嫌もなにもありませんが）

普段通り、何の感慨も持たず麗しき青年を見る。後ろには、いつま
でもなく高順ガオシユンが控えている。常に、目線で猫猫に訴える苦病人だ。

「で、老師せんせい。ちゃんと見てもらえないだらうか
「わかりました」

少し顔を赤らめながら、やはり氣の進まぬ様子で水死体を見る。
恐る恐るかぶせた筵をめくり上げる。
後ろで女官たちの驚く声が響く。

背の高い女で、固い木靴を履いており、脱げた片足には包帯が巻か
れていた。指先は真っ赤で、爪がむごたらしく傷んでいる。
衣から尚食のものだとわかる。

「見るのは平氣ひやぎそつだが
「慣れた風景です」

きれいな花街も一步裏に入れば、無法地帯である。

若い娘が犯され、まわされ、無残な姿で見つかることも少なくない。一見、遊女は籠に囮われ自由がないように思えるが、一方で周りの危険に巻き込まれないよう保護しているともいえる。

「後で見解けんかいを聞きこひ」

「わかりました」

(冷たかつただろうつな)

猫猫は、やぶ医者が検死を終えると、筵むしろを丁寧にかぶせてやった。

今更やっても意味のないことであるが。

連れてこられたのは、富田長の部屋だった。

いつもどおり、富田長は外で待機してもらっている。

翡翠宮ひすいきゅうで、死体の話をするなど避けたかったからだ。

赤子のいる場にふさわしくない。

(いつも、自室作ればいいのに)

年嵩とじかさのいつた長に頭おのを下げる。

毎度毎度申し訳ない。

「衛兵の見解としては、投身自殺といつているが」

堀を上り、堀に身を投げたのだろうと。

娘はやはり尚食の下女で、昨日まで働いていたりしご。やつなるべく、昨夜に身を投げたこととなる。

「自殺かどうかはわかりませんが、少なくとも一人では無理だと想います」

「どういひことだ」

優雅に椅子に座る壬氏は優美な声できこへくる。
先日の妙に慌てた青年とは別人のようである。

「城壁にはしじ」がありませんでした」

「そりやそうだな」

「鉤縄使って上れますか?」

「そりや無理だらうな」

試すように聞いてくる、本当にやうこへこ。

いちいち聞くなど言いたいが、高順が見ているので黙つておけ。

「別に、道具も使わずに上る方法はあるのですけど、あの女官には無理でしょう」

「なんだ? どんな方法があるんだ?」

以前、芙蓉姫の幽靈騒ぎの際、猫猫はずつとどうやらつて外壁を上っていたのか疑問だった。よじのぼれるものではない。

気になつたらわかるまで追求するのが性質なので、城壁を丹念にまわつてみたのだ。

見つけたのは、外壁四隅にそれぞれある突起である。わざと壁から煉瓦が飛び出しており、それに足をかけると上れない」ともない。舞踏が得意な芙蓉姫ならなんなく上つていたことだろうが。

「大抵の女性なら難しいでしょ、ましてや纏足てんそくのものは」

女の足には包帯で巻きつけられ、小さな木靴を履かされていた。足を潰し、布で閉じ込め、木靴に押し込む。足が小さければより美しいという基準のもと、その行為はおこなわれる。

「他殺だというのか？」

「わかりません。ただ、生きたまま堀の中に落ちたことは確かだと思います」

赤く血に染まつた指は、何度も堀の壁をかいだに違いない。冷たい水の中、考えたくもないことだ。

「もつと詳しく調べられないのか？」

断つきれないような甘い笑みを浮かべられても困る。できないものはできないのだ。

「私は死体には触れるなど、薬の師に教えられました」「なぜだ？ 忌いみを嫌うからか？」

薬師となれば、病人やけが人に触れる。死人とも接触は少なくなるうと言いたいらしい。

「人間も薬の材料になるんです」

猫猫は、ぼそりと理由を言った。

「うせやるなら最後にしておけど、おやじのから言われたことだ。」

一度、手をだしたら墓荒らしへりこするだらつと、なんとも失礼なことを言われた。

それくらいの良識はあると言いたいところだが、なんだかんだで言いつけを守つてこる。
まあ、やつこいつことである。

王氏と高順は、呆氣にとられ、顔を見合すと、「なるほど」と首を縦に振りあう。高順など可哀れうなものを見る王氏はじらじら見ている。

まつたくもつて失礼であると、猫猫は震える拳を抑えるのだった。
こぶし

その後、風の噂に聞いたのは、死んだ娘が先日の毒殺騒ぎの場にいたことだった。

それらしい遺書も見つかり、自殺といつことで事件は幕を閉じる。

世の中、誰かの思惑で嘘も真になるものである。

お茶会とこゝのものも、立派な妃の仕事である。
 玉葉妃もまた、毎日のようにおこなつ。翡翠宮でおこなつものもある
 れば、よその妃に呼ばれることがある。

(大切な大切な探し合い)

猫猫としては、お茶会とこゝのものがあまり好きではない。
 話すのは流行^{はやり}の服や化粧といったもの。
 たわいもない会話の中に探し合いを入れる、まさに後醍醐の縮図がそこ
 に広がっている。

(穏やかかそうに見えて、やはり妃である)

玉葉妃と話すのは、西の中級妃である。
 くわしいことはわからないが玉葉妃の実家とは、今後どんな関係になるか重要なところらしい。
 朗らかな玉葉妃のしゃべりに多くの他の妃たちは、ふとしたことで
 こぼすことが多い。
 それを文にしたためるのが、玉葉妃の仕事の一つである。

(昨夜はずいぶん遅かったのに、眠くはないのだろうか)

寵妃たる玉葉のもとへ、皇帝は三口とあけず通い詰める。つかまり立ちをはじめた娘に会うためであるが、まあ、訪問の理由はそれだけではないのも言つまでもない。
 昼の仕事もおろそかにしないといふから、いろいろ元気なことがわかる。

茶会が終わると、^{インフル}桜花から大量の茶菓子をもらつ。食べないわけではないが、量が多すぎるのでいつもどおりシャオラン小蘭のもとに向かつた。

ときには足らぬおしゃべりをする小蘭は、いつもどおり仕入れた噂を話してくれる。

自殺した下のこと、毒殺事件との関連、そしてなぜだか淑妃について。

「まあ、四夫人といつても年齢が年齢だけにね」

玉葉妃は十九、^{リーファ}梨花妃は二十三、^{リーシュ}里樹妃は十四。

淑妃アーデウオこと阿多妃は三十五、皇帝のひとつ上である。

子を産むのはまだ可能であるが、後宮という制度上、阿多妃はお禱シヨウネすべりをせざるをえない。

つまり、今後、国母になることは不可能である。

位を下げ、新しい上級妃を輿入れするという話が持ち上がっているらしい。

随分前から上がっている話らしいが、皇帝の東宮時代からの妃であり、一度は男児の母になつたことがあることから、なかなか踏み切れないそうだ。

(死んだ前の男児の母親か)

このまま梨花妃リファも、皇帝の子を孕はらまねば同じようになるのだろうか。それだけではない、玉葉妃もいつまでも寵愛を受け続けると断言できない。

美しい花もいつかは萎れるものだから。

後宮の花は、実を結ばねば意味がない。

慣れてきたとはいえ、やはり後宮は濁つた瀝おりの底にあるのだと思つ。

猫猫は、食べこぼした月餅の欠片を払つと、空を覆つ重い雲を見た。

今日の茶会の相手は少々、毛色が変わっていた。

相手は里樹妃、同じ四夫人である。

同じ階級の妃同士茶会をするのは珍しく、とくに上級妃であればな
おのことだ。

幼い顔立ちの里樹妃は、緊張した面持ちで、侍女を四人連れてやつ
てきた。

あの毒見役もいる。

猫猫が心配するほど罰は受けていないうし。

外は寒いので、中で茶会を行う。

宦官を**かんがん**使い、応接間に侍女用にと長椅子を用意させる。

円卓は螺鈿のはいつたものである。帳は刺繡入りの新しいものに取り換える。

正直、皇帝が訪れるときにもこんなに気を使うことはないのだが、やはり同性であれば身構えてしまふのは女だからだろうか。化粧も気合が入り、猫猫もいつものそばかす化粧メイクをはがされてしまった。威嚇するように、眼尻に赤い線ラインを入れられる。

年の功か常に玉葉妃が話しており、里樹妃はおずおずとうなづくばかりだ。

後ろに控える侍女たちは、自分の主のことよりも、翡翠宮の調度のことが気になるらしく、ちらりちらりと部屋中に視線を回している。毒見係だけは、猫猫に対するように妃の後ろに立つており、以前、脅してきた猫猫をうかがうように見ている。

(なんだかなあ)

水晶宮の侍女たちといい、ひとを化け物扱いするのはやめていただきたいた。

(一見すれば)普通の侍女たちだ)

猫猫は、以前、妃がいじめられていると高順ガオシユンに報告した。間違つていれば少々困るが、幸いなことである。

猫猫をのぞく少数精銳の翡翠宮の侍女たちに比べれば、動きは鈍いように思えるが、仕事はやってくれている。まあ、今日の茶会の主ホスト人は玉葉妃なので、仕事自体すべくないこともある。

愛藍^{アイラン}が陶器の壺と湯を持つてくれる。

「甘いものは嫌いじゃないから、今日は寒いから、この二つはどうかと思つて」「甘いものは好きです」

玉葉妃の言葉に、里樹妃は答える。

壺の中身は、柑橘の皮をはぎみつで煮たものだ。身体があたたまり、喉も潤う。

(おや~)

甘いものが好きだといつたばかりなのに、里樹妃の顔色が変わる。毒見もなんだか言いたげに茶碗に注がれるはちみつを見る。

(はちみつも駄目なのか?)

後ろに控える侍女たちは、なにも言おうとしない。

ただ、呆れた顔をして里樹妃を見ている。好き嫌いはやめろと言わんばかりだ。

猫猫は小さく息を吐き、玉葉妃に耳打ちをする。

玉葉妃は、あらりと目を見開き、愛藍を呼んだ。

「「めんなさい。これ、もう少し漬け込んだほうがいいみたい。違うものだすわ。生姜湯^{しょうとう}は飲めるかしら」「はい。大丈夫です」

なんだか声色に元気が戻ってきたようで、茶を変更して正解だったらしい。

そして、猫猫の予測も残念ながら正解だつたらしい。

ほんの一瞬であるが、つまらなさにつけてからを見る侍女と曰があつた。

夕刻、現れたのはいつもどおり麗しき宦官である。天女の笑みの背後には、高順が付いている。最近、眉間にしわが増えているように思えるが、なにか気苦労でも増えたのだろうか。

「里樹妃と茶会をなさつたようですね」「ええ。楽しいひとときでした」

後宮を統べる立場にいるのか、この宦官は他の四夫人のもとを定期的に回っているらしい。

今日の茶会の組み合わせは、なんだか変だと思つたら、こやつが絡んでいたらしい。

面倒なことにならぬ前に、猫猫は退室しようとするが、いつまでもなく止められる。

「はなしていただけませんか?」「話は終わつてないんだが」

天女の眼差しをこちらに向かってたとこりで、猫猫としては床に視線を落とすことしかできない。死んだ魚のような皿をしているに違いない。

「つふふ、ずいぶん仲良しさんね」

「玉葉さま、眼精疲労には田の周りを指圧するといいですよ」

あまりに楽しそうに玉葉妃が笑うものだから、つい皮肉を返してしまった。

いけない、いけない。

失礼なことをいうなら、壬氏までにことじめておかないと。

「先日の毒殺騒ぎ、犯人は自殺した下女だといつのは聞いたか

こくづとつなづく。口調から、玉葉妃ではなく猫猫に話しかけている。

玉葉妃はなにかを察したらしく、自分から部屋を出る。部屋に残るのは、猫猫と壬氏、そして高順だけだった。

「犯人は本当に自殺したのだろうか？」

「それを決めるのは、私ではありません」

虚を実にできるのは、権力者の力である。

判断を下したのは誰かわからないが、少なからず壬氏は関わっているはずだ。

「たかだか下女」ときが、徳妃の皿に毒を盛る理由はあるだろつか

？」

「私にはわかりません」

壬氏は笑う。蠱惑的 ^{ヒヤク}な笑みを使い、ひとをつましく利用する。

残念ながら猫猫にはきかない。そんなことをしなくて、命令すれば断らないことはわかつてゐるはずなのに。

「明日から、柘榴宮に手伝いに行つてもらえないか？」

疑問符をつけたところでなにになる。

猫猫には「御意」といふほか、答えはない。

30 錦織の糸（福井県）

セクハラ回

屋敷ヨウシキといふものは主の色に染まるといえる。
 玉葉妃ヒスイヒメの翡翠宮ヒスイノマサニは家庭的であり、梨花妃リファヒメの水晶宮リシヤウノマサニは高潔に洗練され
 ていた。

そして、阿多妃アーデウオの住まう柘榴宮ザクラノマサニは、実用的であった。
 無駄のない造りは、過度の装飾を好まず、それがまた一種の品の良
 さを醸し出していた。

主たる阿多妃は、まさにそのよつな人といえよ。

無駄なものが削り取られたその姿は、華やかさも豊満さも愛らしさ
 もない。しかし、その結果残つたのは、中性的な凛々しさと美しさ
 だった。

(これで三十五ですか)

官服を着れば、若い文官と間違えるかもしれない。女官と宦官しか
 いない、この後宮ではどれだけ女官の羨望を集めていゆことだらう。
 王氏ジンシとは、似て非なる魅力だった。

宴の席でどのような恰好をしていたのかは見ていないが、今着てい
 る大袖スカートよりも乗馬用の胡服を着たほうが似合うだらうに。

猫猫マオマオは他一人の女官とともに宮を案内される。

侍女頭フオノミツの風明フウメイは人当りのよいふくよかな美人で、てきぱきと屋敷の中を説明する。

年末の大掃除で人手が足りない、呼び出されたのはそんな理由だ。

(けがをしている?)

風明の左腕からひりひりと包帯が巻かれてあるのが見えた。

猫猫も同じように、左腕に包帯を巻いている。古い傷跡をみられたび、遠慮した視線をおくれるのも疲れたからだ。

宦官に力仕事を任せ、調度や書物の虫干しをするだけで一日が終わった。

後宮で一番長くいるだけあって、翡翠宮よりも荷物が多い。

翡翠宮には戻らず、柘榴宮の大部屋で残り一人の下女とともに雑魚寝した。寒いからと『えられた獣の毛皮はとても暖かかった。

(なにをしろともいわれていない)

猫猫は侍女頭のいつとおり、片付けに没頭するだけであった。

ふくよかな侍女頭がうれしそうに褒めてくれるので、まつたくせばることはできなかつた。

楽しそうに仕事をする、良妻といつならぬこのような女をいつのだらう。それが風明といつ侍女であった。

久しぶりにちゃんと働いた気がする。

猫のように丸くなるなり、じばらくもたたず寝息がもれた。

(本当に毒殺騒ぎの黒幕はいるのだろうか?)

翡翠宮の侍女たちも働き者であるが、柘榴宮の侍女たちも有能だと
言わざるを得ない。

皆が皆、阿多妃を慕つており、ゆえに行き届いた仕事を行つのである。

特に侍女頭の風明には感嘆する。

侍女としての枠にとらわれず、埃を見つけたら自ら雑巾を持って掃除するのである。

到底、上級妃に仕える侍女頭とは思えない。働きものの紅娘ホンニヤでさえ、ほかの侍女に任せることのない。

(口先だけの水晶宮の侍女に見せてやりたい)

どうにも、梨花妃リフアは侍女に恵まれないらしく、彼女の周りに無駄に侍女が多いのは、ひとりひとりの仕事量が少ないことが言える。それなのに、口だけは達者だから困り者だ。

まあ、それを一手に引き受けているのも、上に立つものの方ともいえるのだが。

しかし、忠誠心が強いということは、毒殺をおこなう理由にもつながる。

四夫人の座を下ろされようとしている理由は、高官が自分の娘を入れさせようとしているからだ。

下ろされるトすれば、阿多妃になるが、他の上級妃の座が空けばどうなるだろう。

玉葉妃や梨花妃はともかく、おれらの里樹妃のもとで皇帝は通つていいだろ。

(むちむちが好きだから)

妃としての役割を里樹妃もはたしていない。

まだ、幼い里樹妃にとつてもそれが望ましいことだらう。結婚適齢年齢に達しているとはいへ、もし、数え十四で妊娠し、出産となるといふらか身体に負担が大きい。交渉自体もきついものであらう。まあ、この点については、先帝時代はどうであったかと考えるのはえぐいのでやめておく。

落とすなら里樹妃を狙うのはおかしい話ではない。

台所の棚を整理しながら、マオマオ猫猫は思考をめぐらしていた。

棚を見ると、小さな壺がたくさん並んでいた。甘い匂いが鼻につく。

「これはどうしましょ?」

「ああ、それね。棚を拭いて元の位置に戻しておいて頂戴」

台所と一緒に掃除していた侍女に聞く。昨日、一緒に手伝いで来た下女はそれぞれ風呂と居間を掃除しているはずだ。

「全部、はちみつですか

「ええ。風明さまの」実家は養蜂をやってゐるらしいの

「どうりで

はちみつは贅沢品である。一種類あればいいといひを、こいつもや

ろえてあるのはそつこいつとか。中身を確かめてみると、琥珀色、赤茶色、褐色と色が違つ。とれる花の種類が違うと、味も違う。

(はて?)

はちみつといえば、なに引っ掛かるところがある。
ここ最近、聞いたような気がしたが。

「終わつたら、一階の欄干らんかん拭いて行つてくれない? よく、掃除の子
忘れちゃうの」
「わかりました」

猫猫ははちみつを片付けると、雑巾を持って一階に上がつた。

(はちみつ、はちみつ)

欄干の柱を一本一本丁寧に拭きながら、頭の中を整理する。
最近、あつたことをおさらいする。

(ー?)

二階から、外はよく見える。隠れたつもりで、柘榴宮さくりゅうぐうをうかがう人
物が見える。

(里樹妃?)

毒見の娘を一人だけ連れて、なぜこんなところに来ているのか。

まったく、猫猫には理解できなかつた。

(はみつ……)

記憶の中に数日前の茶会がよみがえる。
なぜ、里樹妃ははちみつが苦手なのだろう。

ただ、そんなことが妙に気になった。

翡翠町の応接間を借り、猫猫は壬氏に柘榴町での報告を行っていた。

「と、こりとであつたくわかりませんでした

わからないものは、わからない。

猫猫は自分を過小評価しないが、過大評価もしない。
正直に麗しき町に伝えた。

三日間、柘榴宮に入った結果である。

壬氏は長椅子に優雅に寝そべり、異国の甘い香りのする茶を楽しんでいた。檸檬を絞り入れ、はちみつをかき混ぜている。

「そうか、そうだよな」

「ええ。そのとおりです」

「最近、美しい町は、以前ほどきれくなつたのはいいが、妙に口調が軽い気がする。町色に甘さが消え、少年のような感じられるせいかもしれない。」

「猫猫^{マオマオ}になにを求めているのか知らないが、本人はいたつて普通の薬屋である。間諜^{スパイ}の真似事などできるわけない。」

「では、質問をかえよう。もし、とある特別な方法で外部と連絡をする人物がいるとすれば誰だと思う?」

(また、いやな質問の仕方を)

「猫猫は根拠のない考えを口に出すのは好きではない。憶測^{モノ}をいうな」という教えからだ。

猫猫は、眼を瞑り、大きく息をはく。心を落ち着けないと、また、天女のような青年を潰れた蛙でも見るような目で見てしまうかもしれない。

「あいかわらず高順^{ガオシユン}は必死に目でなにかを訴えている。

「可能性の話ですが、あるとすれば侍女頭の風明^{フヨウメイ}さまではないかと」「根拠は?」

「左腕に包帯が巻かれていました。一度、巻きなおすとこゝろを見ると、火傷のあとが見えました」

以前、薬液を浸した木簡の事件である。なにか意味があるとすれば、暗号^{だいごう}だと気付いていたが、口にはださなかつた。

袖の燃えた衣に木簡が包まっていたことから、腕に火傷を負つている可能性は考えられた。いうまでもなく、壬氏はそれを調べていたのだろう。そして、猫猫に間諜^{スパイ}まがいのことをさせたのだろう。

正直、あのおだやかな侍女頭が何かをやつているよつには見えなかつたのだが、そんなものの猫猫の主觀でしかない。客観的にものをみなければ、正しいことにはたどり着かない。

「まあ、及第点だな」

壬氏はふと長卓テーブルに置いてある小瓶に目をやつた。つきに、猫猫のほうを向き、甘露のような笑みを浮かべる。

笑みの一枚皮の下に蠹セリヒぐなにかを感じる。

猫猫は瞬時に全身が総毛だつた。
ものすごく嫌な予感がした。

小瓶を持ち、猫猫のまつに向かってくる。

「いい子にはいい褒美ハグメをあげないとね」「遠慮します」「遠慮しなくともいいんだけど」「けつこううですので、他のかたに当たつてください」

いい加減にしろと、射殺さんばかりの視線を向けるのだが、ひるむ様子はない。

じりじりと距離を詰められる。半歩ずつ下がった結果、背中に壁が当たる。

高順に助けを求めたが、寡黙な従者は窓辺に座り、空飛ぶ小鳥を眺めていた。妙に決まっているので小憎らしい。

(あとで下剤盛つてやる)

壬氏は誰もが蕩けるような笑みを浮かべたまま、小瓶の中に指を入れる。たっぷりと指先にはちみつがついている。嫌がらせにもはなはだしい。

「甘いものは嫌いなのか？」

「辛党ですので」

「でも、食べられるだろ？」「

やめる気はないらしく、指先を猫猫の口に近づけてくる。にらみつける猫猫の目を一つとりした顔で見ている。

(やつにえぱ、そういう人間へんたいだった)

ヒヒ命令と割り切つて口に含むか、それとも尊厳ブライアンを保つためにどうにかして逃げ出すか。

(せめて鳥兜とりかぶの蜜なら、割り切れたのに)

毒花の蜜はやはり毒である。蜂蜜に混ざり、食中毒をおこすのだ。

あれつと、猫猫の頭でなにかがつながった。

思考を整理したいところだつたが、変態が執拗に指をもじだしていくので何も考えられない。

指先が口の中に入れられそうになつたとき。

「いつの侍女に何してゐるの」

不機嫌な顔をした玉葉妃が立っていた。

後ろでは、頭を抱えた紅娘ホンニヤンがいる。

3.1 蜂蜜その参

「王氏さまも、つい悪戯いたずらが過ぎただけなので、許してあげてはいかがでしょうか？」

里樹妃の住まい金剛宮じんごうぐうを案内いたすりするのは、高順カオシユンである。彼の主は、さきほどの件について、ひすいきゅう眞理宮しんりぐうにて玉葉妃キヨクヨウたちにいってり絞きょうられていくはずだ。

「わかりました。今後は、高順さまが舐ねぶれば問題ないかと」

「ね、舐ねぶる……」

「わかればいいんですね」

猫猫マオマオは口を尖らせたまま、つかつかと歩いていく。

まったくもつて変態である。顔がよいだけにたちが悪い。

ああやつて何人も舐し込んでいるに違いない。

破廉恥はれんち極まりない。

お偉方えらいがたでなければ、股間ふくまへでも蹴つてやるのに、と思ったが、ないものは蹴つてもしかたないなど、結論に落ち着く。

そういうことで、南天なんてんの植えられた真新しい宮に到着した。

里樹妃は、桜色の衣を着、柔らかい髪を花簪はなかんざしでまとめている。

園遊会のときの豪奢な衣装よりも、このような可憐な衣装のほうがよく似合つと猫猫は思った。

玉葉妃がのりこんできた後、猫猫は氣になることを明らかにするために、里樹妃との面会を頼んだのだ。

里樹妃は、王氏がないことに気付くと明らかに落胆の色を見せる。見かけだけはよいのだから、仕方ない。

「わたくしに聞きたことつて、なにかしら？」

扇子で口元を覆い、長椅子カウチにゅつたりと座っているが、そこに他の妃にあるような威厳はない。どこかおどおどした、まだ幼い妃である。

美姫と謳われるだけの美しさはあるが、女の色香はまだ纏つていない。

背後にはお付の侍女がふたり、やる気なさげに立っていた。

見知らぬそばかすの女官を不機嫌な目で見ていた里樹妃だったが、それはよく見ると園遊会のときの侍女だということに気付いたらしい。目を見開くと、少しだけ落ち着いた表情になった。

「はちみつは、嫌いですか？」

なにかしら前口上をつけて話してもよかつたが、面倒なので端折はなこころつた。

「なんでわかるの？」

「顔でていますから」

(みりやわかりますよ)

不思議そうな顔が、だんだん膨れていく。本当にわかりやすい。

「昔、はちみつでお腹を壊したことはありませんか」

さらじ里樹妃は顔を膨らます、肯定の意だらけ。

「食中毒になつて、食べ物を受け付けなくなる」とは珍しくないですかからね」

里樹妃はなにもかも見透かされたことに、不思議だと腹立たしさをいり混ぜた顔をしている。

「失礼じやなくて。いきなり来て、里樹さまにすけすけと」

(おまえがいうか?)

先日の茶会で、はちみつ嫌いの主あいじをかばおうともしなかつたひとりである。

(ひやりって、味方のふりをしてるんだな)

時折、外部のものを悪役にしたてあげ、里樹妃の味方のふりをする。世間知らずな幼い妃は、周りの人間を敵だと思い込む。味方は自分たちだけだと言い聞かせ、妃を孤立させる。

妃は侍女たちに頼らざるをえない、悪循環である。

本人がいじめだと気付いていなければ、なかなか表ざたにはなるま

い。園遊会のときは、調子に乗り過すぎたようだが。

「私は王族ジンジさまの命を受けてここにきておつます。なにか問題がありますか」

虎の威を借るついでに面倒もつけておいつ。

それくらいやつてもいいはずだ。

顔を火照らせた侍女たちが、何を理由に変態けんたい面に近づいてゐるのか楽しみである。

「ひとつも」

猫猫は無表情のまま、里樹妃に視線を戻す。

「柘榴宮さくりゆうぐうの侍女頭とは、以前から面識はありますか？」

驚いた顔がその答えを示していた。

「探してきてもらいたいものがあります

猫猫に頼まれ、高順は宫廷の書庫にいた。

後宮女官である猫猫は、基本、後宮内を出ることはできない。さて、なにがわかったのや？

齡十七には思えぬ知識の深さと冷静さは、目を見張るものがある。理性的に物事を考え、処理する能力は女子にしておくのが惜しいと思つ。もちろんそれは、一部の性癖をのぞけばの話であるが。

大変使いやすい駒。

そのように扱えばよいの。

本人も、いやいやながら了承することだらう。

「悪いことをした」

ぽつりといます。

主の過ぎた悪戯はやはり止めるべきだったろうか。

止めたところでどうなつたか。

恨みがましい猫の目を思い出すと、今後、なにか盛られるかもしれないという不安がよぎってきた。

(十六年前。皇弟も同時期に生まれてゐるのか)

猫の手にはひもで綴じられた書が一冊。
後宮内の出来事をまとめたものである。
高順に頼んで持つてきてもらつたものだ。

現帝の東宮時代に生まれた子はひとり、母親は東宮の乳姉弟であり、

のちの淑妃である。

子は乳幼児期に死亡し、その後、先帝が崩御し新しく後宮ができるまで子は産まれていない。

(東宮時代の妃は、ずっとひとりだったのか)

意外なことだ、好色親父のことだから東宮時代から妾をたくさん作っていたものと思っていたが。十年以上ひとりの妃と連れ添つていたとは。

やはり、噂や人伝手でなくきちんと書に記したものも必要である。

十六年前。

乳幼児死亡。

そして。

「医官、ルオメン羅門、追放」

見覚えのある名前を見つけた。

浮かび上がってきた感情は、驚きではなく納得だった。なんとなく、そんな気がしていたからだ。

後宮に数多く生える薬草は、皆、猫猫がよく使うものだった。

自然と生えたのではなく、以前、誰かが移植したものだと想像できだ。

「おやじ、なにせってんだよ」

老婆のような足を引きずる男。

猫猫の薬の師は、片足の膝の骨を抜かれた元宦官であった。

「玉葉妃からの文?」

「ええ、直接お届けするようのこと」

「阿多さまは茶会にでているのだけど」

ふくよかな侍女頭、風明は困つたように、猫猫を見た。

猫猫はさしだした文箱を開く。中には、書のかわりに小瓶と喇叭型の赤い花がひとつ入っていた。瓶から嗅ぎなれた甘い匂いがする。

それが何か、風明もわかつたらしく、ぴくりと肩が動いた。

「風明さまにお話しさしたいことがあります」

「わかつたわ」

風明は固い面持ちのまま、柘榴宮に猫猫を招き入れた。

風明の自室は、紅娘^{ホンニヤン}の部屋とほぼ同じ造りをしていたが、なぜか荷物が部屋の隅で固められている。荷造りを終えた後のようだ。

(やつぱつ)

招かれた部屋で、円卓を挟んで向かいあう。身体の暖まる雑茶に、茶請けには固めの麵麌^{パン}が添えられた。上に果実のはちみつ煮がかか

つてゐる。

「一体、どうしたの？大掃除はもう十分よ

優しい声音だが、探るような声である。

「ええ、いつ引っ越されるのですか？」

猫猫は部屋の隅に置かれた荷を見た。

「察しがいいのね」

大掃除など、表向きの理由だった。

新年のあいさつとともに、新しい四夫人を迎えるために、阿多妃はこの富を去らねばならない。

後宮で子を産めぬ妃はいらない。

それは長年連れ添つてきた妃でも同様で、阿多妃には強い後ろ盾はなかつた。

皇帝と乳姉弟ちきょうだい、実の肉親よりも深い関係が今まで彼女の地位を保つてきたのだろう。

せめて、生まれた男児が生きていれば、阿多妃は大きく胸を張れただろうに。

(たぶん、阿多妃には)

青年のような凜々しい姿、それに女らしい匂いはなかつた。
まるで、女が宦官にでもなつたかのよう。

憶測でものをいつのは嫌いである。

しかし、それが確信であれば、口に^トするしかなかつた。

「阿多妃はもう子は産めないのですね」「……」

沈黙は肯定を意味する。

風明の表情がどんどんこわばっていく。

「出産時になにかあつたのですね」

「関係ない話じゃなくて」

中年の侍女頭は、目を細める。

そこに優しげな面倒見の良い女はおらず、敵愾心てきがいしんが目の奥に燃えていふ。

「関係ない話ではないです。出産の場にいたのは、私の養父おやぢなので

風明は立ち上がり、感慨もなく真実を告げる猫猫を見る。

後宮の医官は常に人手不足である。やがて医者が今の地位に居座り続けることができる程度に。
医官という特殊な職を持ちながら、わざわざ面倒になる必要はないからだ。不器用なおやじどのことだ、体よくおしつけられたのだ
らひ。

「不幸なのは、皇弟の出産と重なつたことでしょうか。どちらかに天秤をかけた結果、阿多妃の出産は、後回しにされた」

難産の末、子は無事生まれたが、阿多妃は子宮を失つた。

そして、子もまた、幼くしてなくなる。

先の毒おしろい事件と同様に、阿多妃の子もそれによつて亡くなられたのではないかといわれていたが。

「風明さまは責任を感じているのではないですか？当時、出産後芳しくない阿多妃にかわつてお世話をしていたのは貴方のはずです」「なにもかも知つてゐるのね。阿多さまを助けることもできなかつた、やぶの娘なのに」

「やうですね」

仕方ないといひ言葉で、医療は片付けるものではない。おやじびの言葉だ。

やぶとののしられても甘んじて受けける、そんなひとなのだ。

「そのやぶは、鉛白いりのおしろいを使うのを禁じていたはずですよ。聰明な貴方がそれによつて、赤子を死なせることはない」

猫猫は文箱の小瓶をあける。とろりとしたはちみつがきらりと輝く。一緒にある赤い花を猫猫は口にくわえた。

甘い蜜の味がする。花をつまみ、指でぐるぐると回す。

「花の中には、毒があるものも多い。附子^{とりかぶと}や蓮華躑躅^{れんげつつじ}の蜜にも毒性がある」

「知つているわ
「でしうね」

実家が養蜂を営むのなら、その知識があつてもおかしくない。大人が中毒症状をおこす毒を赤子に与えるわけがない。

「でも、赤子にのみ効く毒が、ただのはちみつに混ざつてこぬ」とは知らなかつた

憶測ではなく、確信。

まれではあるが、そのような毒がある。抵抗力の低い赤子にのみきく毒が。

「自分が毒見をしても大丈夫だと、滋養にいじと詠えていた薬がまったく逆効果だつたとは思わなかつた」

そして、阿多妃の子は息絶える。
死因は謎として。

当時、医官だつたおやじどのこと羅門ルオメンは、出産時の処置も合わせ、度重なる失態により後宮を追放される。肉刑として、片膝の骨を抜かれて。

「知られたくなかつたんですね。阿多妃には」

自分が主あゆじの唯一の子を殺した原因だと。

「だから、里樹妃を消そつと考えた」

里樹妃は先帝時代、年上の嫁である阿多妃になついてた。
阿多妃も、里樹妃のことをかわいがつていたという。
親元から離れた幼い娘と、子を持つことのできない女性。一種の共依存が生まれていた。

しかし、ある日突然、里樹妃は阿多妃に拒絶される。何度も会いに来て、風明に追い出されるからだ。

そのまま、先帝は崩御し、里樹妃は出家する。

「里樹妃は貴方に、はちみつこは毒があることを教えたのじょうね」

もし里樹妃が通い続ければ、そのことを話すかもしれない。聰い阿多妃はその言葉で、なにかに気付くかもしない。それだけは避けたかった。

出家し、二度とあいつとのないと思われた娘は、再び後宮にあらわれる。

同じ上級妃として。

阿多妃を追いやる立場として。

なのに図々しくもあの小娘は、母親を求めるように阿多妃に会って来ようとする。

空氣の読めない、世間知らずの小娘は。

だから、消そうと思つた。

おだやかで面倒見のよい侍女頭は、そこにはなく、冷たい視線を送る女がそこにいた。

「ほしいものはなに？」

「そんなものはいません」

首の後ろにぴりぴりとしたを感じた。

後ろの棚には、先ほど麺^{パン}麿^{ナイフ}を切った包丁^{ナイフ}がある。

風明が手を伸ばせばすぐ届く距離にある。

「なんでもいいのよ
「そんなの意味がない」とを風明あまはり自分でわかつているでしょ？」

ここ数日、書を調べていることは王氏に報告されているだろう。
後宮を司るあの宦官に、猫猫は隠し事ができないだろう。芙蓉姫のときの「とぐまかせるとは思えない。
ごまかすべきではない。

猫猫の話を聞けば、王氏は風明をつかまえる。
そして、極刑は逃れられない。

十六年前の真実も明らかになる。

だからとて、猫猫がここに消えても同じことだ。
遅かれ早かれ、ばれることである。

賢い侍女頭にそれがわからないわけがなかつた。

猫猫にできるのは、ひとつだけ。

減刑を望むことでも、阿多妃の処遇に言ふることでもない。

一つあつた動機をひとつにすることだけ。

阿多妃にその動機を隠し続けることだけだった。

「結果は変わりません。それでよろしければ

提案を受けてください、と。

(疲れた)

猫猫は翡翠宮の白室に戻ると、固い寝台に倒れこんだ。

衣が汗でべとべとしている。緊張したときの発汗は、べたべたし匂いが強いのだからさう。湯あみをしたくなつた。

せめて着替えようとい、上着を脱ぐと胸から腹にかけて、布が巻きつけられている。油紙を幾重にも重ね、それを固定していた。

「必要なくてよかつた」

(刺されたら痛いからな)

猫猫は油紙を剥いで、新しい衣に袖を通した。

「というわけで、風明が自首してきたのだが」「それはよかったです」

とくに感慨もなく、無愛想な侍女は言つてくれる。

壬氏は卓に肘をつく。^{テーブル}高順がなにか言いたげにひざを向くが無視

^{ガオシュン}

する。行儀が悪いといいたいのだらう。

「なにか知らないか？」

「なんのことでしょう」

「やたら、高順に書物を書き集めさせていたみたいだが」

「ええ。無駄になつてしましました」

小馬鹿にしているのかと思うくらい淡々と言ってのける。
あいかわらず、汚泥でも見るような目を向けている。失礼を通り越
して、いつそすがすがしい。

「動機はお前の言つた通り、四夫人の座を保つためだつたそうだ」
「そうですか」

まつたく興味なさそうにこちらを見る。

「残念だが、阿多妃は上級妃をおりる」とは決定している。後宮を
出、南の離宮に今後住まうことになった

「それは、今回の件が原因でしょうか？」

猫猫が聞き返してきた。

猫がよつやく小判に興味をしめしたらしい。

「いや、元々決まつていた。皇帝の判断だ」

実家に帰さず、離宮で囮つのは長年の愛着からだらうか。
珍しく、猫猫が興味あるらしく聞いてきたので、つい調子にのつてしまいたくなる。

立ち上がり一歩近づくと、なんだか身構えた様子で半歩下がる。

言わん！」ひやないと、高順に呆れた顔をされた。

先日のわざこな悪戯いたずらをまだ根に持つていてるのか。

あまり身構えられると壬氏みどりとしても困る。また、椅子に腰をねじす。

小柄な女官は頭を下げ、退室しりゆつしようとしがふと足を止める。赤い喇叭ひづば型の花の枝が飾られていた。

「さつき、紅娘ホンニヤンが飾つていた」

「ええ。狂い咲きですね」

猫猫は、花を取ると、軸を取り口に含んだ。

壬氏は首を傾げる。ゆっくりと近づき、猫猫の真似をする。

「甘いな」

「毒ですかね」

噴出して口をおさえると、高順が水差しを持つてきた。

「死ぬことないので大丈夫ですよ」

唇を舐めるおかしな娘は、ほんのり甘い笑みを浮かべていた。

猫猫^{マオマオ}が夜中眠れず、翡翠宮^{ひすいきゅう}を抜け出したのは本当に偶然のことだった。

明日、淑妃は後宮^{ごくう}を去る。

なんとなく、外にでてぶらぶら歩いていた。凍えるほどではないものの、寒さは冬のもので綿入れを一枚重ねてでかけた。

あいもかわらず後宮内は、なかなか不健康な愛があふれているようで、間違つて茂みや物陰をのぞかぬよつ氣をつけねばならなかつた。

ふと、空の半月を見ると、芙蓉姫^{ふよしひめ}のことを思いだし、ついでだからと外壁に上ることにした。どうせなら、月見酒^{つきみしゅ}と決め込みたかつたが、翡翠宮にはなかつたのであきらめた。蠻酒^{まんしゅ}が久しづりに飲みたくなつた。

外壁の隅の煉瓦^{スカート}の飛び出た部分に足をかけ、つまくよじ登つっていく。裳^{スカート}に気を付けないと、引っかけてしまつかもしれない。

なんとかと煙ははとこゝが、やはり高いところは気持ちの良いもので月と小さな星明りが都を照らしていった。向こうに見える輝く明かりは花街のものだろう。夜の街というふわわしく、花と蜜蜂たちの語らいが始まつてゐるに違ひない。

なにをするわけではなく、堀のふちに座り、足をぶらぶらさせて空を見るこゝにした。

「おや、先客かい？」

高くもなく、低くもない声が聞こえる。

振り返ると袴服をはいた凜々しい青年が立っていた。いや、青年のように思えるが、それは阿多妃だった。髪をひと結びに背中に流し、肩から大きな瓢箪を下げていた。

「いえ、空きますので」

「いいや、一杯付き合わないか」

さかづきを見せつけられ、猫猫は断る理由がみつからなかった。

普段なら玉葉妃に遠慮するところだが、後宮最後の晩酌に付き合わないほど野暮ではない。

さかづきを両手に掲げ、濁り酒をいただく。

甘味が強く酒精の少ない味がした。

なに喋るわけでもなく、ちびちびと酒を舐めた。阿多妃も豪快に瓢箪にそのまま口をつけている。

「男のようであらう?」

「そのように振舞つていろように見えます」

「はは、正直者だな」

阿多妃は片膝をたて、顎を乗せる。その整った鼻梁と長いまつげを縁取った眼にどこかしら見覚えがあつた。誰かに似ていると思つたが、頭が曇つていた。

「息子がこの手からいなくなつてから、ずっと私は皇帝の友人だつたんだよ。いや、友人に戻つたのかな」

妃として振舞わず、友人としてそばにいた。乳飲み子のときから一緒にいた幼友達として。

妃として選ばれるとは思われなかつた。ただ、最初の相手として指南役に選ばれただけのはずだつた。

お情けで十数年も飾りの妃をやつていたと。早く受け渡したかつたのに。

なぜすがりついていたのだらうと。

阿多妃の独白は続く。

そこにいるのが、猫猫であるうとなかろうと誰もいなかろうと続いていただろう。

明日にはいなくなる妃。

どんな噂が後宮内でたとつとも最早関係ない話だ。

猫猫はただ黙つてそれを聞いていた。

阿多妃の言葉が止まると、妃は立ち上がり瓢箪を逆さにすると中身を壜の外、壜へとこぼしていった。

餞別のように流す酒を見て、先日の自殺した下女のことを思い出した。

「水の中は寒かつただろうな

「そうですね」

「苦しかつただろうな

「そうですね」

「莫迦だよな

「……そうかもしません」

「みんな、莫迦だ」

「やうかもしれません」

なんとなくわかつた。

やはりあの下女は自殺だつたのだと。

そして、阿多妃はそれを知つていたのだらう。

みんなといつのは、それに風明^{フォンミン}も含まれているのだろう。

阿多妃の意思にかかわらず、彼女のために命をかけるものたちがいる。

(本題にもつたいない)

ひとの上に立つ素質と資格を持ち合わせているの^だ。妃としてではなく、違つ形で皇帝のそばにいれば、政はよりつまくいつたのではないだろうか。

そんなくだらないことを考へながら、猫猫は白い刃を眺めた。

正門には多くの見物人が集まっていた。

後宮にもつとも長くいた元妃^{もひき}は、昨夜とは違い、やはりあまり似合はない大袖^{スカート}と袴^{スカート}をはいていた。

周りの女官たちのなかには手布ハンカチを噛むものもいる。

凛々しき青年のよつな妃は、若い女官にとつて一種の崇拜対象だつたに違ひない。

壬氏ジンシが阿多妃の前に立ち、なにかを受け取つてゐる。淑妃たる証あかしを示す冠あんだつた。これは、しばらくもたたず、違う女のもとへ向かうことが決まつていた。

(服装を入れ替えたらいよいに)

天女のよつな相貌と凛々しき青年のよつな相貌。まったく違はずのそのふたつが妙に似通つてゐる氣がした。

昨晩、阿多妃が誰かに似てゐると思つたらそれは壬氏のことだつたよつだ。

もし阿多妃が壬氏の立場であれば、どうなつただろう。
まったくだらない考え方である。

阿多妃の立ち振る舞いは、けして後宮を追い出される哀れな女というものではなかつた。

胸を張り、仕事を成し遂げたと、そのよつな達成感さえ見える威風堂々たる姿だつた。

ふと、どうしようもない憶測が頭に浮かんでしまつた。

なぜ、あんなに堂々としていられるのかと。
妃としてのつとめを果たさずして。

『息子がこの手からいなくなつてから』

昨日の阿多妃の言葉がよみがえる。

(いなくなつてから? 死んでから、ではなく?)

とらえかたによつては、まだ生きていることとができる。

阿多妃が子を産めなくなつた理由は、皇太后の出産と重なつたことだつた。皇弟と妃の子は叔父甥の関係になる、しかもほぼ同時に生まれたとしたら双子のように似ていたのではなかろうか。

(もし取り換えたとしたら?)

出産の際に、阿多妃は身に染みてわかつたことだらう。ふたりの赤子、どちらが今後大切に育てられていくのかを。

庇護がより大きいとしたら、それは乳母の娘の阿多妃のもとでなく、皇太后のもとであろうと。

産後の肥立ちが悪い阿多妃に、なにが正しいのか判断などできなかつたのかもしない。

しかし、入れ替わつたことにより、己の息子が助かつたのであれば、それは阿多妃の望みであろう。

後日、それがばれたのであれば。

本物の皇弟が死んだあとであれば。

おやじどのが追放だけでなく、肉刑まで受けたことにも納得がいく。入れ替わりに気付かなかつたのだから。

皇弟が狭い立場にあることも。

潔い阿多妃が後宮にじどりより続けた理由も。

(実にくだらない)

猫猫は頭かぶりを振ふった。

ばかばかしいくらいの妄想である。翡翠富ひすいきゆうの二人娘むすめこえこまで飛躍して考えないだろう。

(これ以上見ても仕方ないな)

猫猫は翡翠富に戻もどるとすると、前方から慌ただしく近づいてくるものがいた。

幼い愛らしい顔立ちをした娘、里樹妃リーチョである。

猫猫に気付いた様子もなく、正門へと走つていいく。
後ろには、あの毒見の女が息を切らしながらついていた。

その後ろには走る様子もなく、面倒くさそうにしている残りの侍女たちがいた。

(あいかわらずですな。一召いつめいをのぞき)

猫猫が何かしてやれるわけでもない。身内のことなど、自分で始末できなければこの女の園で生きていけるわけないのだ。

ただ、少なくとも今はひとりでない。
それだけでもましなはずだ。

里樹妃は、阿多妃の前に出ると、からくらのよつたな動きで右手と右足を同時に出した。裾を踏んだらしく、顔面から地面に転んだ。

周りから笑いをこじりえる声に泣きだしそうになる里樹妃に、阿多妃は手ぬぐいで顔を拭いてあげていた。

青年のような凛々しい妃の顔が、母親の顔に見えた。

「どういたしましょうか?」

寡黙な従者は主に書類を渡す。

どうにもこうにも頭を抱えたくなる案件だ。

「先日の風明の事件より、彼女の実家及びその関係者の名簿なので
すが」
(フオノミツ)

風明はそのまま処刑、一族郎党皆殺しは行われなかつたものの、親族は皆、財産をすべて奪われ、重さの違いはあるもののすべて肉刑に処せられている。

主である阿多妃にはなにも沙汰さたがなかつたのは幸いである。

関係者の中には、実家の商いの取引先も含まれていた。ただの養蜂農家だとおもつていたが、なかなか手広くやつっていたようである。

「後宮内に八十人ほどその子女がいます」
「なんで、一千人中八十か。なかなかの的中率だな」
「そうですね」

高順カオジュンは眉間にしわを寄せる主にたずねる。

「隠ぺいしますか?」

「できるか?」

「お望みであれば」

お望みであれば。

高順は壬氏の言葉通りに従うだろ？

それが正しいのかは関係なく、壬氏のこつままで。

深くため息をつく。

関係者の中に見慣れた名前が記述されてあつた。

かどわかされて、身売りされた先は、くだんの関係者だつたらしい。

「わざわざすべきか」

簡単に決めてしまえばよいのこ。

自分の選んだ行為によって、娘がどんな顔をするのか、とても恐ろしかつた。

「大量解雇？」

「そだよ」

おやつに干し柿を食べながら小蘭シャオランはいった。干し柿は、猫猫マオマオが果樹園から失敬し、こつそり軒下につるして作っていたものだ。

「なーんか、一族郎党皆殺しとかそんな感じで、取引のあつた商家とかの娘はやめなくちゃなんないんだって」

(それは、なんだか嫌な予感がする)

猫猫の予感はよく当たる。

書類上の猫猫の実家は、交易をおこなつてゐる商家だった。

(いま、解雇とかかなり困るんだが)

それなりに今の生活は氣に入つてゐる。
そりや、花街に戻れるのならうれしいことに違ひないが、戻つたと
ころで錢の算段していふやり手婆につかまるのがおちだ。

李白ののち、いまだ上客を送り込んでいない。
それが問題である。

(確實に売りとばされる)

猫猫は小蘭と別れると、普段会おうとか思わないその人物を探すこ
とにした。

「珍しいな。息が荒いぞ」

後宮の正門で、麗しき宦官は軽く言つてくれる。

猫猫は、翡翠宮ひすいきゅうのほか四夫人の屋敷をすべて周り終えた後だつた。

「……っ」

「落ち着け。顔が真つ赤だぞ」

壬氏は天女の顔に、いささか焦りを見せてゐる。

「おひ、お話が、あ、あります

猫猫は切れ切れに言葉をつむぐ。

壬氏は目を細めた。なぜだか、憂いを含んだ顔だった。

「わかった。中で話そいつ」

通されたのは富富長室で、いつもどおり外で待つけつけを食ひしつけには悪いと思ひ。一礼して中に入る。

「どうせ、今度の大量解雇について聞きたいのだろ？」「はい。私はどうなるのでしょうか？」

返事の代わりに壬氏は書類を見せる。上質の紙に書かれた中に、猫猫の名もあった。

「つまり解雇とこつわけですね」

(どうしようか)

解雇といわれてやめてくださいと言える立場ではない。自分はたかが女官だということは重々承知している。

無表情のまま、媚びる目をしないようにこらえた。結果、いつものくせでも虫でも眺めているような顔になつた。

「どうしたい？」

うかがい聞くその声に、いつも甘くはない。むしり、逆に甘える
ような少し幼い声だった。声色と違い、顔だけは真剣に固まつた顔
をしていた。

「私は、ただの女官です。言われるままで、下働きでも、まかない
でも、毒見役も命じられればやります」

(だから、解雇にしないでくれ)

精いっぱい雇つてくれといつたつもりだった。

青年の表情は、固まつたままで、ふと視線をそらすと小さくため息
をついた。

「わかった。退職金ははずむ」

青年の声は冷たく、うつむいて表情は読み取れなかつた。

交渉は失敗した。

いじけた主^{あいじ}を見るのは、今日で何日連續だらうか。

仕事には今のところ支障はないが、執務室に戻ると部屋の隅に座り
込み、陰気な空気を醸し出すのは勘弁願いたい。
胞子でも飛ばさん勢いである。

麗しき天女の笑みとはちみつの声を持つ青年はそこにはいない。

猫猫は解雇通告の翌週に出て行つた。愛想はないが、礼儀正しく、世話になつたところに一軒一軒回つて行つたらしい。
玉葉妃は渋つていたが、壬氏が決めたことだと聞くとどうあえず引き下がつた。「後悔しても知らないわよ」と「丁寧に捨て台詞を残して。

「やつぱり引き止めればよかつたのでは

「なにもいづな」

高順^{ガオシユン}は腕組みをし、眉間のしわを深くする。

お気に入りの玩具^{おもちゃ}をなくしたときは、どんなものだったか。より新しい珍しい玩具^{おもちゃ}をあたえるのに、どのくらい苦労しただろうか。

玩具といつしょにしてはいけないのかもしねない。

壬氏は娘を道具として扱いたくなくて、引き止めるのをやめたのだった。そこで、新しい毛色の違つた娘をあてがえたといひで何にならう。

まったくもつて厄介である。

「代替がだめなら、本物を用意するしかないか

壬氏に聞こえない声でつぶやくと、ふとある人物を思い出した。

娘の実家をよく知る武富である。

「手間のかかる」

苦労人、高順は首の後ろをかいだ。

終 宦官と妓女

「仕事だよ、いってきな」

やり手婆にせつつかれ、乗せられたのは随分立派な馬車である。
今宵の仕事はとある貴人の宴らしい。

都の北の大きな屋敷に連れられて、ため息をつく猫猫である。
アオマカ

小姐たちと、他数名。皆、麗しい衣を着、艶やかな化粧を施している。自分もそれと揃いの姿をしていると考えると、なんだか妙に居心地悪い。

長い回廊を通り、らせんの階段をのぼり、広い部屋に通される。

天井から灯籠が下がり、赤い房飾りが揺れている。
赤い毛氈の敷き詰められた床に、獣の毛皮が幾重に重ねられ、そこに今宵の客が座していた。

五人ほど横一列に並んでいる、思つたよりも年若い。

ゆらめく炎に照らされる若人たちみて、白鈴小姐が舌舐めずりをする。横の女華小姐が脇腹を小突く。

（もつと早く紹介してくれよ）

宦廷につかえる高官だといふ。
紹介は李白らしい。

李白の縁とあれば、猫猫の借金も少しは減るはずである。

アオマカ

まあ、退職金は思つたよりはずんでもらえたので、身売りするほどでもなく、こゝやつて短期就労ですんでいるのでよかつたが。

(婆、呑みしあひして)

どつこもやり手婆は、猫猫を妓女にしたいらしい。

ここ数年、その動きが顕著である。

薬屋の真似事などやめると何度もいわれたことだが、それは無理である。自分の興味を薬学から、歌や踊りに向けることなど皆無である。

(それにして、大した金持ちだわ)

妓女を屋敷に呼ぶことは妓楼で宴をするよりも費用がかかる。そのうえ、呼んだのは一晩の酌で一年の銀が消える売れつ子妓女たちだ。
緑青館の三姫こと梅梅、白鈴、女華をまとめて呼びつけるとは。

猫猫は三姫を引き立てるため、連れてこられた数人の一人だ。しつけはあらかた受けているが、詩歌も吟ぜず、二胡も弾けない、舞踏などもつてのほか。

せめて客の杯が空かぬよう、田を配りせるしかできやうにな。

表情筋に笑みを固定せると、空いた器に呑みくくり酒をそそいでいく。

皆、小姐たちの詩歌や踊りに夢中であり、こゝちをみないので楽だつた。

(おや?つまらないのか?)

皆、笑いを浮かべ、酒に酔いしれ、演舞を楽しんでいた。ひとりだけ下につつむく者がいる。

上等の綿の衣を着た若者は、片膝をたてて手酌で酒をあおっていた。そこだけ、空気が灰色に濁っている。

(仕事がなくなるじゃないか)

妙に生真面目なところのある猫猫は、たっぷり入った酒瓶を持ち、陰気な男の横に座る。

つやのある前髪が、顔の上半分を覆っていた。

「ひとりにしてくれ

(?)

はて、聞いたことがあるような。考えると同時に手が動いていた。
無礼とか、失礼とか頭から抜けていた。

うつむく男の額に触れぬよう、そっと前髪を上げた。

麗しいおもてがあらわになる。

いじけた顔が、一瞬で驚きに変わる。

「壬氏さま?」

きらきらしい笑顔もなく、はちみつのよつた甘さのない声だったが、見慣れた宦官に違ひなかった。

壬氏は瞬きを数回する。なんだかじつと見られて、とても落ち着かない。

「おまえ、誰だ？」

「よく言われます」

「化粧で変わったって言われないか？」

「よく言われます」

なんだか以前も似たような会話があつた気がする。
つまんだ前髪をもとに戻す。

すると、壬氏の手が伸びてきて、猫猫の手をつかもうとする。

「なんで逃げる」

不貞腐れた顔でこひらを見る。

「妓女には触れないでください」

規則なので仕方ない。追加料金をいただくことになる。

「そもそも、なんでそんな恰好をじこるんだ？」

「短期就労中です」

「妓楼ですか？……もしかして、おまえ」

壬氏が何を言いたいのかわかり、猫猫は半眼でこひらむ。
どうにもひとの貞操観念を疑う性格らしい。

「別に、個人で密をとつたりしてませんよ。まだ」

「まだ……」

「……」

言い返せない。残りの借金返済前に、婆が無理やり密を連れてくる可能性は無きにしもあらず。

おやじどのと小姐たちの抑制で、こまのところは事なきをえている。

「俺が買つてやうつか?」

「はあ?」

〔冗談を、と言いかけてふと頭になにかがよぎる。〕

「いいかもしけませんね」

「!?」

壬氏は驚愕きょうがくを顔にのせる。

なんだか、今日はきらきらしていないので表情が豊かである。天女の笑みは麗しいが、人間とは思えない表情なのだ。
たまに、魂こんが一つあり、ひとつのお魄はくにおさまっているのではないかとさえおもう。

「もう一度、後宮勤めも悪くないです」

壬氏が肩をうなだれる。

「うしたのだわい。

「おまえ、あそこが嫌でやめたんじゃなかつたのか?」
「そんなこと、こつていました?」

借金返済のため、続けさせてもうえないかと頼みにいったのに、解雇したのはそちらのほうである。

面倒事は多いものの、玉葉妃ヨククモチの侍女はかなりの好条件だ。毒見役など希少な職、なにうつと思つてなれるわけじゃない。

「気に入らないとすれば、毒実験ができない」とくらいで
「それは、さすがにやめろ」

壬氏は、立てた膝に顎をのせる。苦笑が浮かんでいる。

「そうだよな、おまえ、そういうやつだよな」
「なんですか。それは」
「言葉が足りないついでいわれないか?」
「……よく言われます」

苦笑はだんだんあじけない笑みにかわる。

今度は猫猫が不機嫌ヒツヅムにひつむぐ。そこへ、壬氏の手がのびる。

「だからなんで逃げる?」
「規則ですか?」

言つたとひで、壬氏は伸ばした手を戻そうとしない。じつと猫猫をにらんでいる。

「少しきらこならいいだろ?」
「だめです」
「減るもんじやないだろ」
「気力が減ります」

「片手だけ。指先だけならいいだろ」

「……」

しつこい、やうこえぱいの男、粘着質である。

しかたないと目を瞑り、深く息を吐いた。

「指先だけですよ」

唇になにかがおしゃべつけられる。

まぶたをあけると、壬氏の長い指先に赤い紅がついていた。

猫猫が呆気にとられているつむじ、壬氏は指先を自分のもとに戻す。そして、あわいひとが、己の唇にしゃとのせたのだ。

(いづつ)

一本の指をはなすと、ほんのり紅が形良い唇にうつっている。壬氏は目を細め、さらにあどけない笑みを浮かべる。頬にも紅がうつったように、かすかに桜色をしていた。

猫猫はふるふると肩を揺らしたが、あまりに幼い笑顔を壬氏が向けるのでなにもいえず、うつむいて目をやらいした。

(うつるじやないか)

口をぎざぎざに結んだ猫猫の頬は、桜色になつている。頬紅はつけていないはずなのに。

くすくすと笑い声が聞こえると思つたら、周りでみんながこひりを

見ていた。

小姐たちがにやにやとこちらを見ている。

あとが怖い。

すこぶる居心地が悪い。

いつのまにやら現れていた高順^{ガオシュン}はやれやれと腕組みをしていた。一仕事終わりましたといわんばかりだ。

もうなにがなんやら困ったもので、その後のことはよく覚えていない。

ただ、小姐たちの追及が、とてもしつこかつたのは覚えている。

数日後、都の花街に麗しい貴人が現れる。

やり手婆も目のくらむ金子^{きんす}、それとなぜか虫から生えた奇妙な草を持ったその男は、一人の娘を所望した。

終　宦官と妓女（後書き）

とつあえず、一区切りです。

肝心なことがはつきりしてないところもあると思こますが、そういう仕様なのであしからずです。

続きはただフラグをたててばぶつた切つていくだけの話を書いていく予定なので、そういうのがお好みのかたは今後もおつきあいおねがいします。

タグに推理があるとなると、ものすごくしきつことがわかりましたので、今後はファンタジーにかえて書いていきます。
気が向いたらよろしくお願ひします。

登場人物紹介

・猫猫
マオマオ

花街の薬師で十七歳の娘。
かどわかされて売りとばされて後宮の下女となる。
痩せぎすで小柄、整っているが特徴のない顔をしており、普段はそ
ばかすを化粧でつくっている。

好奇心旺盛で薬と毒に異常な執着を見せるが、人間にはあまり関心
がない。

左腕に実験で作った自傷行為のあとと、顔には刺青のあとがある。

・壬氏
ジンシ

後宮を統括する青年。

天女の微笑みとはちみつのような甘い声を持つ人間離れした美貌の
青年。

二十そこそこに見えるが、実際は十七、八歳。
自分の容貌も含めて、使えるものは道具とみなす。

粘着質。

・玉葉妃
ギョクヨウ

皇帝の寵妃。位は貴妃。十九歳。

赤い髪と翡翠の目をもつ胡姫。
娘に鈴麗公主を持つ。

後宮の翡翠宮に住む。

笑い上戸。

・高順
ガオシュン

壬氏の従者。

武官と思わせる精悍な顔をした壮年。

苦労人でまめ。

・紅娘

ホンニヤン

玉葉妃の侍女頭。三十路。
侍女の鏡であり、同時に苦労人。

・桜花

インファ

翡翠宮、侍女三人娘のひとり。
活発。

・貴園

ゲイエン

翡翠宮、侍女三人娘のひとり。
おつとり。

・愛藍

アイラン

翡翠宮、侍女三人娘のひとり。
長身。

・鈴麗公主

リンリー

皇帝と玉葉妃の娘。赤子。

・皇帝

美髭の偉丈夫。

猫猫曰く好色親父。

・小蘭

シャオラン

下級女官。

甘党のうわさ好き。

・梨花妃

リフア

皇帝の妃、位は賢妃。

東宮である息子をなくし、病に倒れていた。

見事な胸部の持ち主。

住まいは水晶宮。

・里樹妃
リーショ

皇帝の妃、位は徳妃。十四歳。

元は先帝の妃であり、出家して再び後宮に入った。
その特異な経歴からいじめを受けているようである。
魚介アレルギー持ち。

・やぶ医者

どじょうひげの宦官。

性格はいいが仕事はできないおっちゃん。

猫猫の茶飲み仲間。

・李白
リハク

若い武官。出世株。

白鈴に骨抜きにされる。

基本的におひとよし。

・白鈴
バイリン

緑青館三姫のひとり、猫猫の姉貴分。

舞踏を得意とする最高級妓女。

筋肉フェチ。

・やり手婆

金にがめつい緑青館の仕切り。

昔は売れつ子妓女だつたらしい。

・おやじど

老婆のよつな男。

猫猫の薬の先生。

苦労人。

本名は羅門ロモン、元後宮医官の直官で、追放され肉刑を受けていため、片膝の骨がない。

(よーし、次は)

猫猫は雑巾と桶を持ち、窓辺に座る。
飾り窓は近くで見ると埃が溜まっている。かたく絞った雑巾で丁寧
に拭いていく。手がかじかむがたいしたことはない。

なんだかんだで猫猫は、宮廷に戻ってきた。しかし、後面ではない。
マオマオ

(なーんで、あいつの部屋付なんだ)

婆が金子に、猫猫は冬虫夏草に田がくらんだ。
その結果がこれである。

正直いえば、自業自得なのだが。

宮廷の西側に壬氏の浴室がある。部屋とこつより、棟といつべきか。
基本、寝泊りはここでしているらしい。

まあ、正直言おう。

(無駄に広い)

ある程度、要職だと思っていたが、広さだけなら翡翠宮とかわらな
い。無駄に部屋が多く、湯殿までついている。食事も作れるよう台
所もある。寝台は「丁寧に天蓋付」だった。窓の外を眺めると、贅を
こらした枯山水が雪化粧に隠れている。

(金持ちはよいねえ)

せつこえば、縁青館の妓女を呼び出した宴も、平民一生分の銀がなくなる算段である。随分と偉そつなわけだ。

(もひとつ給料交渉しようとばかりよかつた)

とつあえず一年間、猫猫は女官として働くことになった。

表向きは王氏の部屋付といつ形になるが、無論、性に合わない。仕事がないからだ。

掃除や洗濯は専用の下女がやる。

妃たちの侍女と同じく、食事を運んだり、着替えを手伝つたりするわけだが、食事はいつのまに準備してあるし、着替えも王氏一人でできる。たまに、こちらをちらちら見るが、言われるまでやううとは思わない。

(一体、何のために雇つたんだ?)

だから悪態をつきながらも、無駄に広い部屋を掃除する。下女の仕事をとるようだが、窓の様を見る限りあまり行き届いていない。だから問題ないだろう。

貰つた報酬が報酬だけに、借りを作るような真似はしたくなかった。妙なところで生真面目である。

(あー、それにしても向に使おつ)

猫猫の頭の中にあるのは、虫から生えた奇妙な草のことである。

眼がぼんやりしてきたところで、いかんいかんと頭を振る。今は仕事中である。しかし、だんだん顔がゆるんでくる。

あの気持ちの悪い干からびた虫からのびた枯葉色の草。^{サブリ}薬酒にしようか、それとも丸薬にしようか、考えただけで楽しくなつてくる。

給料とは別に、現物報酬で年に一回、珍しい薬草をくれるというのだ。たとえ、相手があんな変態宦官でも、少しだけくしてやりつと考えないでもない。

あまりにうれしいものだから、にやけた顔のまま部屋の主をむかえてしまつた。

呆けた王氏の顔を見て、猫猫はそつとうつむいた。

基本、王氏のそばにはお目付け役の高順^{ガオシユン}がいる。寡黙な宦官はよく猫猫に目で訴えかける苦労人である。

今日もまた、主の食事に付き従つてゐる。食事は一人分、しかし高順の分はない。

「いつも思ひますが、量が多すぎやしませんか？」

(毒見の量じゃない)

普通は、小皿一枚ずつのはずだ。量が多すぎる。

「やつか普通だと思つが」

猫猫の前に、王氏とかわらぬ量の夕餉が準備されている。

「つして朝タ一回、毒見役を行つのも数少ない仕事の一つである。

同じ卓^{テーブル}に相席する^{テー・ブル}のは失礼だと思つが、量が多いだけに立ち食いをするもの問題である。高順も何も言わないで椅子に座る。

そのあいだ、高順が立ちっぱなしであるのを見かねて、椅子を用意したのだが、寡黙な従者は立つたままであった。

猫猫がひと匙ずつ口に運ぶのを見て麗しい宦官は微笑ましい目で見ている。まるで愛玩動物に餌をやっているよつな顔だ。

(失敬な)

大変、居心地悪く皿をそらしながら毒見を行つ。残念ながら、毒物は入っていない、ええ、毒物は。

皿を全部あけてから王氏に食事をすすめるべきだが、菜^{さい}が冷えるので途中で食事を始めてもらつ。さすがに、一緒に吃べるのは憚^{はばか}るので、盆に皿を乗せ、部屋の外に出ようとするが毎度止められる。

「途中退室とはいひ度胸じやないか」

「いえ、同席はやはり恐れ多いと思いまして」

高順に皿で「あきらめか、しつこいから」と訴えられて、もう一度椅子に座る。

(食事自体はおこしの元)

なんとも食欲のやせらないう夕餉である。

夕餉のあとは、高順に部屋まで送つてもいい。

後宮のやうに何倍も広い宮中だ。女官の住む部屋まで時間がかかる。

「別にひとりで帰れます」

「命令です」

その言葉には逆らえない。

部屋付の女官なので、王氏の棟に泊まつ込むこともできるが、
断固拒絶せてもひつた。

(夜中、誰も声でも聞こえたらたまらない)

あの変態はきっと毎夜、女官なり文官なり武官なり宦官なり連れ込んでこいつ。間違つても、皇帝とかきたら怒りしくてたまらない。

女官ならまだいいが、他のは少し抵抗がある。見慣れた妓楼のむつみじとは、所詮は男女のそれである。違う世界は知らないほうが賢明だひつ。

(今日もだれか連れ込むのか)

きつとそうに違いない。

ああ、いやだ、これだから変態は。

女官の寮の前で別れるとき、高順が首を傾げてたずねてきた。

「」「最近、夜に体調変化はありませんか？」

「とくにありませんがなにか？」

「いえ、それならば問題ないです」

なぜかとぼとぼと帰つていぐ高順。

(どうしたんだうづ)

そう思いつつも、部屋に入る。

寝台と机の置かれた簡素な部屋だ。机の上に細長い箱が置いてある。中に不気味な薬草が入っていると思うだけで、猫猫は満面の笑みをおさえることができなかつた。しばらくして、隣から壁を蹴る音が聞こえたことから、なんだか無意識のうちにやらかしてしまつたかもしれない。

「最近、寝不足のようですが大丈夫ですか？」
「ああ、気にすることはない」

天女の麗しい顔に、うつすらくまができていた。
かんぱせ

残念なその仕様も、見るものには憂いと勘違いされるかもしねり。

(寝不足ねえ)

実は、それには思い当る。

(あんだけ、毎晩強壮剤食べてたらね)

眠ろうにも眠れまい。

薬だからと黙つていたが、取り過ぎると毒になる。皇帝の夜食で慣れていた猫猫は、すっかりそのことを忘れていた。

それに、てっきり本人の指示で入っているものと思つていたが。

(誰かに盛られていたのか)

悪いことをしたと、朝餉の皿を片付けながらおもった。

1 盛（後書き）

蛇足はこんな感じの内容です。

「一体、なにがおきてこるんでしょうか」

「わからんな」

問い合わせる高順^{ガオシユン}に、そつけなく壬氏^{ジンシ}は答える。

場所は、後宮内の講堂前。

妃たる勤めを果たすべく、現在、上級妃たちが学んでこる。

周りには、閉めだされた宦官やお付の女官たちが、壬氏と同じ表情^{かお}をしている。

秘密にされると氣^きになるもので、扉に耳をそばだてるものさえこる。

一体、なにが。

好奇心を搔き立てられるひとつの中の理由に、なぜか講師がそばかす顔の若い女官であることがあげられた。

十日前にさかのぼる。

「新しい淑妃が来た」と、妃教育をしたいそつなんだが

「そうですか」

無表情な女官は、興味なさそうに答えると、せつせと床の拭き掃除

を続ける。ト女の仕事を奪つかのよう、親の仇かのよう掃除をする。それが、壬氏の部屋になつてからの猫猫の日課である。マオマオ

他にしても「らしい」とはたくさんあるのに、それを避けるように違ひ仕事を見つけてくるので困ったものだ。

まあ、元々最低限のことでしか、女官を入れなによつとしていたので、問題はないのだが。

「講師をしろとの」とじだ」

「へえ、誰ですか」

「おまえだ」

目が据わつたまま、壬氏を見る。直属の女官になつたところで、冷めた塵芥を見るような目はやめたりしない。一種のくせになりそうな目で、これを見るとなんだか悪戯いたずらを仕掛けたくなるので困つたものである。

「」[冗談を]

「なにが[冗談だ」

勅命の書を見せる。

猫猫が目を細めてみると、自分に都合の悪い文章を発見したらしく。

「おい、田をそらすな」

「なんのことでしょうか」

「今、しつかり見ただろ」

「気のせいではないですか」

壬氏は書を広げ、猫猫にとつて都合の悪い部分を指さした。

「ここに、推薦人の名前が書いてあるだろ」

「……」

指をさした先には『賢妃 梨花^{リファ}』と書かれてあつた。
なにがなんだか、わからなかつた。

観念した猫猫は、ため息をつきつつも、実家に文を送つたり、前準備をしつかりしていた。実家と言つても薬屋のほうではなく、親同然に世話になつてゐる妓楼のほうだ。

数日後、届いた荷物とともに、必要経費を請求された。

どんな荷物が届いたのか、確認しようとしたら、けだものを見るようないふねいふね形相^{ぎょうけいふ}でにらみつけられ、寮の自室に持ちかえられた。

一体、何だったのだろ？

そして、現在に至る。

講堂は三百人以上入る空間^{スペース}なのに、猫猫は「門外不出です」と、四夫人とそれぞれの侍女頭をのぞき、全員締め出してしまつた。

壬氏は立場上いても問題ないかと居座っていたが、猫猫に背中を押され追い出された。

「丁寧に入口につつかえ棒がかけられる音がした。」

気になつても耳を壁にそばだてるわけもいかず、たとえそうしても中の声は聞き取れないだろう。

猫猫は広い講堂の中心に妃たちを集め、内緒話でもするようだつた。妃教育とは、秘密が多いものだが、ここまで隠匿する必要はあるのだろうか。

以前、後宮医官が語つた内容は、御子ができるやすい生活習慣についてだつた。

そのまえは、皇太后じきじきに妃たる振る舞いを教えていた。

猫猫が教えられる内容とすれば、身体によい薬についてだろうか。

さすがに、証拠の残らない毒殺講座などやるわけがなからう。

梨花妃の推薦というのだから、身体によくない身近なもの教えているのかもしれない。

どちらにしろ、内緒にするよりもないと想つただが。

一時にじかんが過ぎたころ、入口からつつかえ棒が外れた音がした。

中に入ると、各自講義に対する感想が、表情に現れていた。

玉葉妃は、うきつきした顔で「まんねり離脱」と、はしゃいでいる。侍女頭の紅娘は、いつもの「」とく疲れた顔で付き従っている。

梨花妃は、真つ赤な顔をしながらも、授業内容を^{はんすう}反芻するように指を動かしている。なんだか満足した顔である。

リーシュ
里樹妃は、講堂の隅で壁に額を打ち付けながら、「無理、ぜつたい無理」と、青い顔でつぶやいていた。傍には、最近侍女頭になつたばかりの女官が心配そうに背中をさすつていて。確かに、元毒見役の女だつた。

新しい淑妃こと楼蘭妃は、目を見開き、顔を真つ赤にさせ、化け物でもみるかのような顔をしている。

視線の先には、一仕事終えたと椅子に座り湯冷ましを飲む猫猫がいた。齡十八の知的で冷静な妃だと聞いていたが、見る限りその片鱗はなかつた。

梨花妃と樓蘭妃の侍女頭たちは、樓蘭妃と同じく顔を真つ赤にさせ奇異の目を猫猫に向けている。

一体、どんな授業が行われたのだ。

各々、妃たちは教材として持ち込まれた例の荷を持っていた。あるものは、大事に抱え込み、あるものはおぞましげにさわっている。どの荷にしても、風呂敷が丁寧にくるまれていて中をうかがう」とはできない。

気になることこの上ない。

「 なあ、どんな授業をやつたんだ

壬氏がたずねると、猫猫は遠い田をして、

「 後日、皇帝に感想をつかがつてください」

と、答えた。

全く意味がわからなかつた。

部屋付女官生活がひと月も続くと、大体主人の生活習慣がわかつてくるものである。

卯の刻に起床し、着替えと朝餉。辰の刻に仕事に出かけたと思ったら、一度、午の刻に帰り点心を食べる。帰りは遅く戌の刻のころ、夕餉をとり猫猫マオマオは帰る。

そのあとは湯あみなり、なんなりしていことがある。もつとゆつくりしていけと言われても、今宵の相手と鉢合ハコガタわせしたくないのでさっせと帰る。

まったくお盛んなことである。

正直、広すぎる棟の掃除はあらかた終えて暇になっていたところだ。昼間は手がすいて、たまにくる初老の女官と話し込むくらいしか時間潰すことができない。

実家から調合道具も取り寄せたところなので、なにかしら薬を作りたくてたまらなかつた。

むしろ、禁断症状に近い。

最近、指先が震えているのは手がかじかむだけが原因だろうか。

冬虫夏草を加工しようとも、一緒に調合する薬草が必要である。実家から取り寄せるにも限界がある。薬草と毒草は紙一重なので、宫廷に持ち込む時点ではじかれてしまつものが多い。

なので部屋を抜け出すことにした。

部屋付とはいつも、ずっと王氏の棟に籠もっている必要はないはずだ。

主人が帰つてくる前に用事を済ませてくれればいい。

問い合わせられたら、切れた油の補充にいつたどこまかしてしまおつ。

と、いうわけで、猫猫は午前中に仕事をあらかた終わらせ、点心を終えた王氏を見送ると、棟の外へと飛び出していく。

(おやじい、 ひびひひひひも植えときやよかつたのに)

後宮内では、おやじいのこと羅門ローメンが移植した薬草がたくさんあつた。のんびりとした苦労人であるが、けつこう好き勝手に後宮内の植生じょくせいをかえていたようである。

後宮の何倍の広さもあるのに、材料にできる薬草はあまりない。見つけることができたのは、蒲公英たんぽぽ、蓬よもぎといったことにもあるのくらいだ。あと曼珠沙華まんじゅしゃげも見つけた。

冬場であるため見つけにくこともあるが、それでも期待は薄からう。

はてさてと歩こぐるひびひ、見覚えのある影を見つけた。

精悍な顔をした若い武官である。妓楼の常連の李白リハクだ。帯の色からみると、出世したようである。

傍に部下りしき男たちとなにせり話してこる。

(がんばつてるんだなあ)

休みのたびに縁青館ゑんしょくかんにきては、禿相手かむろに茶を飲んでいる。うし。

もちろん、本命は白鈴パーリン小姐だが、彼女を呼ぶには平民の半年分の年収が必要である。

それでも、最高級妓女としてはかなり安いわけだが、その理由は軽いという一点にあげられる。希少価値フレミアがついてこそその妓女である、つまり食いが多ければそのぶん価値が下がるのだ。

哀れ天上の蜜の味を知った男は、高嶺たかねの花の顔を帳の隙間からでも垣間見ようと通うのである。

出世したのも、花に近づこうとがんばつていることがうかがえる。
憐憫れんびんの目が届いたのか、李白リハクは猫猫ねこねこのほうに手を振つて走ってきた。
まさに大型犬である。

「おひ、今日は妃の付き添いかなんかか?」

「いえ。後宮勤めから、とある御仁ごじんの部屋付になりましたので」

「部屋付? 誰だ、そんな物好きは」

大変失礼なことを言つてくれる李白だが、まあ、普通の反応であろう。

すき好んでしみだらけの顔をした枯木のような娘を部屋付にはすまい。

別にそばかす化粧メイクを今更するつもりはなかつたのだが、主人がいえ

ば従つしかない。面倒など慣れてしまつたことであるし。

(一体、なにがやりたいんだ、あの男は)

「そういや、最近、高官がおまえんとこの妓女を身請けしたらしいな」

「やうですね」

(そう思われても、仕方なかろう)

雇用契約が決まり、宮廷に行く際、張り切つた小姐たちに全身を磨き上げられ、とつておきの衣装を着せられ、髪を結いあげられ、化粧をふんだんに施された。到底、新入り女官には見えなかつたことだろう。

なぜか、おやじどのが子牛でも見送る田で見ていたのを覚えている。

宮廷内に妓女が入ることもおかしいが、わらじ王氏ジンシが田立つので、いやに注目され居心地が悪かつた。

(それにしても)

本人が目の前にいるのに、この男はまったく気づきもせず喋つている。わすが駄犬である。

「ところで、お取込み中のようにでしたが、よろしいのですか?」

「ああ、ちょうど行き詰つてたんだ」

部下が近づいてくる。遠くから女官を見て嬉しそうにしていたが、猫猫の顔を確認すると明らかに落胆した顔をした。まったく、上司が上司なら部下も部下である。

話を察するに、昨晩、小火ほやがあつたらしい。その原因を調べている
ということだ。

猫猫はなにかしら興味を覚え、小火騒せうぎの倉庫に近づく。

(ふうん)

上手く隠してこらつもりでも、おかしな点がいくつがある。

本当に小火ほやですんでいるなら、なぜ李白やまとほどの中官が出向でむけしている
のだろうか。

また、小火ほやというわりに、建物の破片が散らばっている。むしろ、
爆発ばくはつというのではなかろうか。けが人もでているのではなかろうか。

(組織的暴力の疑いありとみているわけか)

概ね平和な時代であるが、皆が不満を持たぬわけではない。
異民族はたまに襲つてくるし、飢饉ききんや干ばつもなきにしもあらず。
特に、先帝の時代ならば、毎年行われる女官狩りによつて、農村部
の嫁不足が深刻になつたこともあつた。今だ恨むものも少なくなか
らう。

「おい、なにやつてんだ」

「あつ、ちょっと気になりまして」

壊れた窓から中を見る。焼け焦げた荷が積まれていた。
床に芋が転がつていてことから、食糧庫だとうかがえる。

「勝手にうひうひするな」

李白の言葉を無視するように、猫猫は腕を組む。頭の中で何かがつながった。

「話聞いているのか」

「聞こえてますよ」

聞こえてるが、聞こじとしないだけである。

猫猫は近くの廃材置き場に向かつ。

「これ、もうつていいですか？」

「ああ、別に問題ないだろ」

猫猫は木箱をみつけたと、それに合ひ板を探し出した。
李白の部下に槌つちと鋸のこと釘を探してもらつた。なんだ、この女官と不満そうに見ていたが、上司も頭が上がらない様子を察し、用意してくれた。

ぶつくさ言つていた李白だが、猫猫がなにをやつているのか興味はあるようだ。

猫猫は真ん中に穴のあいた板を作り、それを空の木箱の蓋にして打ち付けた。

「妙に手馴れてるな」

「育ちが悪いものでして」

仕上げに焼けた倉庫のそばにある荷から、あるものを取り出すと木箱の中に入れた。

「すみません、火種ありますか」

部下の一人が火のくすぶる荒縄を持つてくる。

そのあいだに、猫猫は井戸から水を汲んで持ってきていた。

猫猫は部下に礼をいい頭を下げる。

そして、木箱の前に立つた。

「李白さま。危ないので離れていてはくれませんか」

「なにが危ないんだ？ 嬢ちゃんがなにかやるんだろ。武官の俺が危ないものか」

随分、大きく胸を張るので、仕方ないとため息をつく。

「わかりました。危険なので重々気を付けてください。すぐ逃げてくださいね」

いぶかしむ李白を後田じづちに、猫猫は近くにいた部下の袖をひっぱりこちらへ来いと誘導する。倉庫の裏から見ているように伝える。

戻ってきたところで、先ほどの木箱に火種を投げ入れると、頭を隠しながら走つて行つた。

箱から炎が噴き出し、激しく燃え上がつた。

驚いた李白は、逃げ遅れたらしい。

髪に火が付き慌てふためく李白に、猫猫は桶の水をぶっかける。

「逃げてくださいって言つたのに」

「……」

言い返せず、黙り込む李白。

鼻水を垂らす李白は、急いで毛皮をかける部下。

「倉庫番のかたに、倉庫で煙管たばこはおやめくださいことをお伝え願えますか」

「ああ。わかった」

放心した顔で李白が答える。

「なにがどうなってるんだ?」

「燃えやすい粉が空中に舞うと、それに火がつくことがあるんです」

それが爆発するのだと。

「んな」とよく知ってるな

「ええ、よくやつましたので」

狭い花街のあばら家で、小麦のほかに宇金うきんや鉄粉もよく燃える。

わけがわからないと、李白も部下も顔を見合せざる。

「風邪をひかぬよう気を付けてください。ひいたらひいたで花街の羅門」という男の薬はよく効きますので」

営業活動も忘れない。白鈴に会いに行くついでに買ってくれるかもしない。

(思つたより、時間を食つたな)

えしゃく
会釈をすますと、主人の自室に急ぐのだった。

4 変人

部屋に戻ると、いつもより帰りの早い主人^{あるじ}が慌てた様子で探し物をしていた。

寝台の下をのぞいたり、帳^{とぼ}の裏を確認している。

「なにがあつたんですか？」

疲れ顔の従者、高順^{ガオシユン}にたずねる。

「ええ、子猫^{こねこ}が見つからなくて」

「猫^{ねこ}なんて飼つてましたっけ？」

「いや、今見つかりました。小猫^{シャオマオ}」

壬氏^{ジンシ}は猫^{マオマオ}に気付くと、一いちらにものすゞい勢いで近づいてきた。走りはしないが、足の動きが半端でない。なんとなく臆^{おく}してしまい、さつと高順の後ろにまわった。

「なぜ、隠れる」

「天^{てん}上^{じょう}人にいきなり近づかれでは、目^めがくらんでしまいますゆえ」

半分嘘ではない。あらきらしげ壬氏を見るたび、そのよつに思つのだ。

最近は、そうでないほつが多いのだが。

「高順の後ろにまわることはないだろ」

「いえ、なんとなく落ち着きますので」

一瞬、高順の肩が揺れた。脂汗^{しじか}がたらたら流れているようである。

むすつとした顔の壬氏を高順の肩越しに見る。

「高順がよくて、俺じやなんで駄目なんだ？」

(生理的に受け付けません)

とほ、正直に言ひ難い。

遠回しに応えることとする。

「さうですね。もう少し、お腹が出て、加齢臭が漂つよつになれば落ち着くかと」

(その頃こほ、今ほど麗しくないはずだ)

そのつもりでいったのだが、なぜか高順の肩がびくづびくづと一回震えて、首がゆっくりもたれていった。

壬氏はなぜか考え込み、左手を顎にやる。

「腹は別として、加齢臭はビリキアればいい?」

薄々、気が付いていたがこりつ、頭は良つが莫迦である。

「年齢を重ねることですけど、確かに心身負荷^{ストレス}によって代謝が悪くなると臭いますね」

また、高順の肩がびくつと揺れると、そのまま床に膝と手をついたつむいた。

「どうかしましたか?」

「ええ、ほつとこへぐださー」

珍しく投げやりな高顯の言葉に猫猫は首を傾げる。

壬氏が夕餉にするやと呼び立てるので、言われた通りそのままにしておくことにした。

食事中はちくちく小言をいわれた。いつそがみがみいってもらいたいが、粘着質なのでちくちくである。

薬が作れない旨を説明すると、納得したようで鈴の根付のついた札を渡された。複雑な模様の焼き印が押してある。

「これがあれば、医局と書庫に顔が通る」

とのこじりこい。

なるほど、冬虫夏草以来のいい仕事である。

もうひとつこの初老の女官に言付けして、門限を守れば、外出してもよることのこと。

うれしくて笑い出しそうになるが、いかんいかんと顔をこわばらせた結果、いつものよつとてびひを眺める田線をおくつてしまつた。悪い癖になりつつある。

不思議なことに、この視線を壬氏に送ると、なぜかうすうすと好奇

心にかられた顔をするので困る。まるで獣の肉球を前にして、指先で押したがっている顔だ。

(もしかして愛玩動物扱いされてこるので)

食事のときといい思い当たる節はある。さつきの鈴の根付も、首輪みたいなものなのか。

しかし、猫猫にとってはたまつたものではない。自分が愛玩用に向いているとは到底思えないのだ。

(今度、子猫でも貰つてこようつか)

猫猫はぐつと拳に力を入れて、せわやかな決心をするのだった。

翌日、初老の女官に途中まで案内されて、書庫にいくと貴重な薬の文献が山のように積まれていた。

目が輝き、一心不乱に読み漁つてみると、ちょこちょこと図書の小父さんに呼び止められた。

周りの迷惑になるので、持ち帰つて読みなさいとのこと。また、無意識になにかやつていたらしい。

帳面に題名と名前を明記し、風呂敷一杯に包んで持ち帰らつとしたところ、また呼び止められた。
貸出は五冊までとのこと。

タイトル

荷物が軽くなつたついでに医局に顔を出すことにした。

用があれば、ひからいで薬の材料をもらふる手筈になつてゐるらしい。

園遊会の時に一度たずねてゐるので、広い宫廷内でも迷つことなくつけた。

それでも大小百をこえる建築からなり、どれも赤と緑を基調とした意匠^{デザイン}なので、氣を抜くと迷うくなる。

医務室に入ると、不機嫌な顔をした医官が眉間にしわを寄せていた。氣難しそうなやせぎすの男でどのようにもさばをよんでも三十路にはいくまい。

猫猫が中に入るのを拒まないものの、明らかに領域を荒らす」とこいら立つてい。

「なにを考えているんだ、あのかたは」

別に隠すつもりもない小言が聞こえてきた。

まあ、それは普通の反応なのでとりあえず無視する。

素性のわからない醜女^{しうじょ}の図々しい態度に、医官がさらに眉間にほりを深くるが、そんなもの関係ない。

目の前に広がる巨大な薬棚と、むせ返るような匂いの前に意識がとびそつになる。

(あーい、すーい、すーい)

後宮の薬棚もよかつたが、それとは比べ物にならない。

量も半端でないうえ、材料ひとつひとつが丁寧に仕分けされている。

管理の行き届いているのは、薬の名が張つてある宛名に仕入れた日付が書いてあることで読み取れた。

やぶ医者が腐りかけた高麗人参を置いていたのと大違いである。

棚のひとつひとつ名前を調べ、自分の記憶にないものを見つけると、引出をあけ実物を確認する。効用を備え付けの図鑑にて調べて、文 章を丸暗記して実物と結びつける。

それを何度も繰り返し、全部の生薬じやくが頭に入ったときにそれは聞こえてきた。

「初日から門限を破るとはい一度胸だな」

甘さのかけらもない麗しき御仁じゅにんの声が背中に悪寒おかんを走らせた。

どう考へても、申し開きのできない状況なので、素直に正座して二つ指をついて頭を下げる。

壬氏の後ろには、昨日から遠い日をしている高順が付き従つていた。珍しく香が焚き染められた官服を着ていた。

4 変人（後書き）

o
r
z

門限破りをねちねちと言われた猫猫マオマオであつたが、どうやら今後、破らなければ今回は目を瞑るといつ。

よくよく考えてみれば、多少の変態行為に目を向けなければ、随分待遇のいいことに改めて気が付いた。

(それなのに、自分は好き勝手に)

ジンシ壬氏ヒナシに対して、愛想のない返事をしたり、敬わなかつたり、変態扱いしたり、這い回る地虫を見るかのごとくながめたり。自分が主人なら、こんな女官即解雇にしているところだ。むしろ、縛り首にしていることだろう。

(そうなると、薬草が)

給金はどうでもいい、ほかに稼ぐ方法はある。しかし、渡来物の薬草など花街の薬屋には手の届かない一品だ。毒実験を数年我慢しても欲しいものはいくらでもある。

今後は、誠心誠意仕えるべきだと、表情筋に妓女教育で鍛えられた営業微笑えいぎょうスマイルを貼り付けて壬氏を迎えてみた。

壬氏ヒナシが呆けた顔をしたので、貼り付ける表情を間違えたのかと思つたら、いきなり抱きつかれた。

がらにもなく声を上げてしまったので、何事かと高順ガオシュンと初老の女官、

水蓮^{スイレン}が飛び出してきた。

高順は額をおさえた、水蓮はあらあらと香氣に「だめじゃないの、坊ちやま」^{かんばせ}と軽くいなしてくれた。

忘れていた。

たとえ宦官であつたとしても、存在 자체が卑猥^{ひわい}である。歩くわいせつ物だ。花の顔に騙^{かんばせ}されではいけない。

それにもしても、一十半ばにみえるのここまだ坊ちやま扱いなのかと、猫猫は思った。

「このところ、仕事の帰りが早いのは、溜まっていた仕事を片付けていたかららしい。

たまたま、部屋を飛び出した口に、仕事が片付いたようだ。

(もう少し時間を置けばよかつたか)

今更、遅い話である。

その仕事どころのまゝ、どうにも相手が悪かつたらしい。

軍部の高官^{こうかん}りしへ、頭は切れるが変人だと有名^{めいめい}らしい。

とにかく難癖をつけて、客人を部屋に連れ込み、または突撃し、将棋をうつたり、世間話をしては案件の判^{はん}をうつのを先延ばしにするところ。

今回、^{ターゲット}標的にされたのは壬氏とのこと。

おかげで、毎日、一時は執務室に居座られ、その分残業していたのだといつ。

「どこの隠居ですか、それは」

「まだ四十路過ぎだ。自分の仕事は終わらせねばふん、たちが悪い」

(四十路すぎ、軍部の高官、変人?)

「どこのおぼえのある言葉だつたが、思い出してもひくことがな
れやうなので猫猫は忘れることにした。

まあ、忘れたじりで、こつもの嫌な予感せきていたのが。

「案件はもつ通りたはずですが」

招かれざる密に、壬氏は天女の笑みを浮かべていった。ひきつらな
じよひにあらには努力を要する。

「こやこや、冬に花見は難しい。ならば、いかりでと思こましてな」

無精ひげに片眼鏡をつけた飄々とした中年がそこにいた。
武官服を着ているが、その姿は文官にこそふさわしく、細い狐の
よつね耳は理知とともに狂氣を孕んでいた。

男の名を羅漢ラカン、軍師をやつている。時代が時代なれば、太公望と言われた男だろうが、今の世ではただの変人にすぎない。

家柄は良いが、四十を過ぎても妻帯せず、甥御を養子にとつて家の管理を任せている。

羅漢の興味のあるものといえば、碁と将棋と噂話。相手が興味なくとも無理やり巻き込んでいく。

「こ最近、壬氏に突っかかつてきた理由といえば、緑青館ろくじょうかんの妓女を身請けした件である。

さすがに、富廷内に派手な衣装を着た娘が歩いていれば噂になる。正直もみ消すのに苦労した。

表向きは後宮四夫人の話相手である。別におかしな話ではない。妓女といつても、才のあるものはそのまま宣にむかえられることも皆無ではないのだから。

それなのに、うら若き娘の」とく噂の好きなこの御仁は、あることないことがある」と吹き込んで、軍部では壬氏が身請けしたとこうことになつてゐる。いや、間違つてゐるとは言い難いが。

猫猫は「田立つので着替えましょ」「と言つてくれたが、今後、まともに着飾ることはそんなにないだろうと、そのままでさせた。その考えが甘かったとは思つが、今その状況に陥つても多分着替えさせることはないだろう。

おつさんのどこからわくのかわからない話の数々を右から左に聞き流し、高順の持つてきた書類に判を押す。

「やついえば、緑青館に昔、なじみがいましたね」

意外な話だ。

色事などまったく興味のないことと思つていたが。

「どんな妓女ですか?」

つい興味をひかれて返してしまった。

羅漢はにんまりと笑うと、瑠璃杯に持参の果実水をつぐ。

「いい妓女おんなでしたよ。碁と将棋が得意で、私も将棋は勝てるが碁は負けてばかりだった」

軍師殿を負かすとは、それは強かつたのだろう。

「あれほど面白い女にはもう会えないだらうと、身請けも考えましたが、世の中うまくいかないものでね。ちょうど、物好きの金持ちが一人、競り合つようになに値を釣り上げていた」

「それはそれは」

時に妓女の身請け金は、離宮がひとつ建つ額になる。羅漢にも手が出せないと、いのはそういうことなのだろう。

「変わり者の妓女として、芸は売れど身は売らず。それどころか、客を客とも思わない。茶を注ぐにも、主人に接するというより、下賤の民に施しを『える』ような尊大な目で見ておりました。まあ、かくゆう私もそのひとりなのですが、背筋にぞくぞくとくる感覚がたまらないものでして」

「……」

「いつも居心地が悪く、田をそらしてしまった。控える高順も一文字にした歯を強く噛んでいた。

世の中、同じ趣味の人間はけつこいつこるものだ。

その心のうちを知つてから羅漢は続ける。

「こいつか組み敷いてみたいと思つていたのですよ」

にやりと笑う男の田に、狂気に満ちた炎を垣間見た。

「結局、私もその妓女のことは諦めきれず、仕方なく少々汚い手を使いました。まあ、高くて手が出せないなら、安くなければ問題ないわけでした」

希少価値下げたんですよ」と。

「どんな方法をとったか知りたいですか?」

片眼鏡、じに狐のような田が笑っている。

いつのまに相手を引き込む。これだから恐ろしい。

「いいまできてもつたいぶるのですか?」

「いやほや、もつ時間でして。長居をすると部下に怒られる」

手のひらを返したよ、て。羅漢は果実水を片付ける。もう一本用意していた徳利を王氏の机の上に置いた。

「部屋付の女官たちにでもあげてください。甘すぎない飲みやすい

口ですから

「では、また明日」

と去つて行つた。

中年武官は手を振りながら、

6 値値

「変人からの土産だ。水蓮^{スイレン}と飲んでくれ

壬氏^{ジンシ}が徳利を卓の上に置く。

栓を開けると、柑橘の匂いがした。

「変人からですか」

なんの感慨もわかない声で答える。

壬氏^{カウチ}は長椅子に寝そべり、火鉢に炭をくぐる猫猫^{マオマオ}を見る。

高順^{カオシュン}は、底の尽きかけた炭をみると部屋を出て行った。とりでつてくれるのだろう、さすがまめ男である。

「縁青館^{ゑんじょくかん}のなじみとかくわしいのか?」

「派手に立ち回るひとであれば」

「どんな奴がいる?」

「守秘義務^{しゆひぎむ}ですの」

壬氏はそつけない答えに眉をしかめる。

質問の仕方を間違っていることに気づいたらしく、違つて葉で言いつえた。

換えた。

「では、妓女の価値を下げるに至らなければいい」

「不愉快なことを聞きますね」

猫猫は軽くため息をつく。

「いらっしゃりでもありますよ。特に上位の妓女ならば」

最高級の妓女になると、仕事の数も月に数回と少ないものだ。売れつ子が常に客を取つてゐるわけでない。むしろ、客を毎日とらねばならぬのは、夜鷹よだかといったその日の銭だいせんにあえぐものたちである。

上位の妓女ほど、露出かわらを好みない。

詩歌や踊り、樂がくを学び、その教養にて客をとるのだ。

緑青館では禿かむろ時代に一通りの教育を済ませる。そのなかで、容貌の悪くない、見込のあるものと、そうでないものに分ける。

後者は、顔見世が終わるとすぐ客をとるようになる。芸ではなく身を売るのだ。

見込みのあるものは、茶飲みから始まり、より顧客をつかむ話術の長けたもの、才知の長けたものはどんどん値を釣り上げられる。そこで、わざと人気妓女の露出を減らすことで、茶飲みだけで一年の銀が尽く売れつ子妓女が出来上がるのだ。

なので、身請けまで客に一度も手を付けられない妓女もいる。まあ、男の浪漫ふまんといつもので、花を最初に手折たおるのは自分でいたいと思うのだ。

「手つかずの花だからこそ、価値があるのです」

猫猫は鎮静効果のある香を焚く。

「手折たおれば、それだけで価値は半減します。さう」

猫猫は小さく息を吐いて、鎮静香を吸い込んだ。

「子を孕ませれば、価値などないに等しくなります」

なんの感慨もなく言つてのけたはずだ。

にせにやとした狐のような御仁は、昨日の言のとおりに現れた。
「寧に柔らかい座布団付の長椅子を部下に持つてこさせていた。
一体、どれくらい居座るつもりなのだ。

「昨日の話の続きをしまじょうか？」

持参の徳利から果実水を手酌で注ぐ。

茶菓子まで持ち込んで、書類だけの机の上に、乳酪香る焼き菓子
が置かれた。直に置くのはやめていただきたい、書につく油の跡を
見て高順が頭を抱える。

「本当に、随分あくびに事をなされたようですね」

書類に判を押しながらいった。書類の中身は頭に入らなかつたが、
後ろに控える高順が何も言わないので問題ないだろう。

猫猫の答えから、このする賢い狂人が何をやつたか想像がついた。
そして、もうひとつあまり歓迎できない憶測が頭に浮かんだ。
理解できないわけじゃない、辻褄もあつ、いくつかの点で納得がで
かる。

なぜ、縁青館の身請け話から突っかかつてきただのか。
なぜ、昔の馴染みの話をしたのか。

しかし、そのことを認めてしまいたくなかった。

「あぐぢことは失礼な。とんびに言われたくない話だ」

片眼鏡の奥の目を細め、モノクル 羅漢ラカンが笑う。

「よつやく、やつ手婆を説得したのに。十年以上かかつたんだ」

からんと杯を傾ける。果実水の中には氷の欠片がうかんでいた。

「油揚げを返せと？」

「いや、いくらでも出しましよう。昔と同じ轍じづつは踏みたくないの
でね」

「嫌だといつたら？」

「そういわれると、何も言えませんな。貴方様あなた様に逆らえるものなど、
片手の指折りほどに存在しない」

じわじわと回り込む言い方をする。すゝぶる居心地が悪い。

羅漢は片眼鏡を取ると、手ぬぐいで拭く。曇りがとれたと確認する
と、左目につけた。さつきまで右につけていたので、ただの伊達で
あることがわかる。さすが変人だ。

「ただ、娘がどう思うかなのですから」

『娘』といつ言葉を強調する。

ああ、いやだ、つまりそいつことなのだから。

羅漢は猫猫の実の父親だ。

壬氏は判を押す手を完全に止める。

「そのうち会いに行くと伝え願えますか？」

羅漢は^{バター}乳酪だらけの指を舐めると執務室を出て行った。

長椅子を置いて行つたままなので、また来るところことなのだから。

壬氏と高順は、示し合せるわけでもないが、同時に頭をうなだれると、大きなため息をついた。

「今度、おまえに会いたいとこいつがいるのだが」

伝えないわけにもいかず、正直に猫猫に言つた。

「どんなかたですか」

猫猫は無表情の奥になにかうずくづしたものを隠していて、いつもだが、いつもどおり冷静な口調であった。

「ああ、羅漢とこいつ……」

最後まで言葉を紡ぐ間もなく、猫猫の表情が変わった。

今まで、地虫のように、干からびた蚯蚓のように、汚泥のように、塵芥のように、蛤蝓のように、潰れた蛙のように、とりあえずいろいろな侮蔑の目で見られてきたが、そんなもの生ぬるいものであつたと気が付いた。

到底、筆舌しがたい。

たとえ王氏でもこれを向けられたらさすがに生きていけないだろう。心の根底を叩きつぶし、煮えたぎる鉄に流し込まれ、灰も残らないよつた。

そんな表情を猫猫は作っていた。

「……どうか断つておく」

「ありがとうござります」

放心状態のまま、それだけしか言えなかつた。心臓が止まらなかつたのが不思議なくらいだ。

猫猫はもとの無愛想な顔に戻ると、自分の仕事に戻るのだった。

6 値値（後書き）

顔芸

(? ? ? ? ? ?
; ? ; ? ? ? ? ? ?)

「無事、送り届けました」
「いつも悪いな」

ここ最近、氣苦労の多い主人であるが、今田は殊更激しいようだ。長椅子に寝そべり、力なく手をぶらぶらとせめてくる。縄糸のような髪が乱れて、頬にかかるっていた。

あの変人、羅漢(ラカン)のことが原因だとわかるのだが、少し自分が部屋を出たときにまたなにかあつたらしい。戻つてくると、なにやら地獄の釜の中をのぞいたかのような青白い王氏(ジョンシ)がいた。

また、小猫(シャコマオ)にちよつかいをだしたのだろうと思つたが、当の猫猫(マオマオ)は変わらぬ様子でせつせと仕事に励んでいた。

一体、なにがあつたのだろう。

多少の苦労はわかつてもらいたいところだが、結局、高順(ガオショウ)のもとにかえつてくるので困つたものだ。

「明日は後回だな」
「はい」

猫猫を送り届けたあと、医局に向かい、あるものを調合してもらひ。苦味の多い奇妙な液体である。

一時に分け、まず高順が口にする。もう五年飲み続けているが、や

はりなれそつにない。

口の端を拭いたところで、もう一方を壬氏に渡す。
鼻をつまむ所作は、見た目は大の大人の分、滑稽である。誰もが六
つも年齢を^{ねい}鯖読んでいるとは思つまい。

「いやなら飲まなくてよいしこの」

「一応のけじめだろ」

手の甲でぐこつと口を拭く姿は、実年齢以上に幼いものだ。

現帝の後宮になり、五年。歪な仮面をかぶり続けて五年。

口ついて男でなくす薬を飲み続ける。

下級妃以下は好きなよつこじゆ、と皇帝の言葉をもらつてこゐるのもかかわらず。

「そのつが、本当に不能になりますよ」

口直しに果寒酒を飲んでいた壬氏が噴き出した。口をむせび、恨み
がましそうにこぢらをみる。

たまには、これくらい仕返しじとも問題なかろう。

「おまえだつて同じだろ」

「いえ、先月、孫が生まれたそうです」

子はもう成人している。今更、作る必要もない。

「いくつだったか？おまえ」

「数え三十七ですけど」

十六で娶り、翌年から年子で三人生まれた。別に無理な話でない。

「はやく孫を抱かせてください」「努力する」

へたれた主人を見る限り、まだ先のことだと思わずにはいられない。これならば、もっと過激に遊ばせておくのだったと、高順は大きく息をはいた。

定例である四夫人のもとへの訪問は、どぞこおりなく終えた。

新しく入った樓蘭妃は、先日の狼狽えぶりもなく、うわさ通りの理智的で冷静な妃であった。

ただ妃たるもののが何とはなにか、ひたすら演説するかのじとべ語るので、聞いていて耳が痛くなつた。

そんな話、公務で耳にたこができる皇帝に話したのだろうか。夜の嘗みにまで、仕事のことは思い出したくないだろう。

案の定、皇帝の通いは數度で止まり、玉葉妃と梨花妃のもとを往復しているようである。

皇帝なりの指針として、十六になるまで手をださないとあるので、あと一年、里樹妃は安泰である。

わざわざやれてしまえばいいのに。

壬氏も高順も同じ気持ちを持つている。

例の妃教育のあと、皇帝の足の運びはずいぶん増えたのだが、結果がでるのはまだ先だつとおもつたが、案外早く出るかもしない。心配そうに玉葉妃の侍女頭である紅娘ホンニヤンがあることを打ち明けた。

昨日も翡翠富ヒスイキウに皇帝が訪れたらしく、玉葉妃はけだるげにしていた。心配そうに紅娘が世話をやく。ねばたまの黒髪シラヘが乱れていた。なにかしら苦労の多そうなこの侍女頭とは時折、共感シンバンを持つてしまう。

ちゅうどいこと、壬氏はある提案をする。

玉葉妃は目を輝かせ一つ返事でうなづいてくれた。

紅娘もやれやれといった顔をするが、むしろ歓迎した顔である。部屋の外で聞き耳を立てている侍女三人娘にその話をする。

どうやら選択は間違えではないらしい。

「後宮ですか」

「ああ。おまえの大好きな仕事だ」

猫猫は銀食器を鏡のように磨き上げていた。

曇りひとつないのを確認すると、もとの棚に戻す。

ながら作業で話を聞くのは失礼なことであつから、わざともの

を片付ける。

それくらいのけじめはつけたい。

壬氏は蜜柑を食べている。皮くらいう自分でむけばよいのに、^{スイレン}水蓮にひとつずつきれいに薄皮を取つてもう、目にきれいに並べてもうつっていた。

まさに坊ちゃまである。

初老の女官は、この宦官を甘やかす傾向にあるらしい。寒いからと綿入れを着せたり、熱いからと茶をぬるめたり。大の大人が恥ずかしい。

「玉葉妃の月の道が途絶えているらしい」

(妊娠の可能性ね)

鈴麗公主懷妊時に、妃は一度毒殺未遂にあつてゐる。
リンリー

心内はおだやかでないはずだ。

「こつからでしょうつか
「今日からでも行けるか
「むしろ都合がよいです」

後宮内は男子禁制、名前も聞きたくないあれと顔を合わせることはないだろ?。気をきかせてくれたのかもしれないし、都合がよいとしたのかもしれない。

どちらでもよいことだ。

つとめて冷静に動いていたつもりだが、

「あら、いいことあったの？」

と、水蓮が話しかけてきたので、浮足立っていたようである。

7 高順（後書き）

後宮編 33 阿多妃 挿入しました。

内容が唐突すぎる後半だったので、少しワンクッシュョンいました。

(以前は合わないとと思っていたが)

そうでもないらしい。

猫猫は久しぶりの後宮生活を満喫していた。
もともと女だらけの場所で育つてきたので、そういう雰囲気が水に
あつのかもしれない。

以前とかわらず、毒見と調合と散策の毎日を過ごしている。

玉葉妃

の懷妊についてはまだよくわからない。

鈴麗公主の妊娠時も、ひどい悪阻はなかつたらしく、味覚変化もほ
とんどない。月経不順以外これといった確証はない。

しかし、翡翠宮内では、箱口令^{かんこうれい}がしかれ、万が一の対策を行つてい
る。

一番流れやすい時期を狙つにきまつてゐるのだから。

好色親父^{じと}こと皇帝には、念のため夜のむつみ^じことを控えてもらつこ
とにした。

普通に事を行うのであれば、問題ないのだが、玉葉妃が妃教育を実
践していたら普通の範疇^{はんちゅう}から外れており、まあいろいろと問題が起
きる可能性が否定できないからだ。

自分からこつのも難なので、壬氏^{壬ジ}を通して伝えてもらつた。

できれば、玉葉妃への訪問回数も減らしてもういたくないが、そこ
までは提言できない。

いきなり夜伽^{ナガ}の数が減ると、勘ぐる輩^{やから}もいるだらうナビ。

しかし、皇帝は意外にも訪問回数を減らはず、可愛い娘と遊び、玉葉妃^{アーチョウオ}とたわいない会話を楽しんでいる。阿多妃^{アーチョウオ}の件も思つたが、好色親父とくへりをつけろべきでないかもしれない。

ただ、少し物寂しそうな顔をたまにするので、妃教育の残りの教材を渡すことにした。時間つぶしにくらいになるだろうと。

(一次元で我慢してくれ)

後日、違つものを用意しろと言われた時は、やはり好色親父のままでいいのだと確信したが。

こつして、あつとこつまにひと円が過ぎた。

寒さも薄れていき、春の芽吹きを感じるこゝろである。

やはり、充実した毎日だと口が経つのも早い。汗^{ムダ}の棟^{むな}にいたふた月間は、無駄に長かった気がするのに。

医局の薬棚に未練は残るが、それは今後、やぶ医者を使って後宮医局の改造を行えば問題なかろう。書庫については、高順^{ガオシユン}に頼めば、何かしら見繕^{つく}ってくれる。

これでこつでも後宮の外に出られるのであれば、なおのことよかつ

たがそれは贅沢な話である。

玉葉妃の妊娠はほぼ確実といつてよいだろう。血の道は止まつたままで、けだるさが続いている。体温もわずかに高いようであり、排せつの回数も増えたようだ。

鈴麗公主リンリーが、なぜか玉葉妃のお腹に顔を当ててはこっこり笑うさまを見て、もしかしてなにかがいると気付いているかもしれない。

子どもとは不思議である。

よたよたと歩き回るようになった公主は、皇帝から賜つた赤い履くつをはき、侍女たちを手間取らせていた。

猫猫マオマオは、特に用事もないときは公主の相手をするようになつた。他の働き者の侍女たちが面倒見るより、毒見以外ろくな働いていないものが面倒を見るほうが効率よいはずである。

今日も猫猫は、鈴麗公主と遊んでいた。積木つみきを組み立てては壊して遊ぶ公主。積木は、わざわざ軽い木材を使用して作らせたものである。

そんなとき、久しぶりにあらわれた見田麗しき宦官は、「厄介」とを手土産にもつっていた。

「青い薔薇ですか」

「ああ、皆が興味を持つてね」

困った顔でうなづく王氏。

(また面倒くさいことを)

「私は薬屋ですが」

「なんとなくできそうだと思つて」

「それは言えてるわね」

ゆつたりと長椅子に座る玉葉妃も尻馬にのる。隣では、公主がちびちびと果実水を飲んでいた。

「（だれか知らないが、玉葉妃の侍女なら何か知つていてるのでは」と、言つていたらしい。

(まさかやぶ医者じやないだらうな?)

ありえなくもない。

あの気のいいおっさんは、他人を過大評価しすぎるのはきらいがある。

薔薇の知識がまったくないというわけではない。花弁から得られる精油は美肌効果があるとして妓女たちが取り寄せていた。香の強い野ばらの花びらを煮詰めて蒸留し、小遣い稼ぎに作ったこともある。

「昔、宮廷内で咲いていたらしい」「幻覚でしょう」「言い出したのはひとりだが、聞けば複数の証言がでた」「阿片は流行つていませんか?」

壬氏は天女の笑みに憂いをのせてばかりを見る。

やはづ、」のやうな顔は苦手である。

あらあらと葉妃が面白そうながら見てくる。しかしとてつは面白くない。

「無理なのか？」

（身をのつだしてくるな）

これ以上近づいてくるのも鬱陶しい。
ため息がでる。

「どのよつすればよろしいのですか？」

「来月の園遊会に欲しい」

春の園遊会である。

もう前の園遊会からそんなにたつているのか。

しみじみ感慨にふけつてみると、あることに気が付いた。

（ん？ 来月？）

「壬氏さま、知っていますか？」

「なにがだ？」

やはり、わかつていない。

色が云々以前の問題である。

「薔薇が咲くのは、少なくともふた月以上先ですナビ」

「……」

(やひぱつ)

なにやら、いやな感じがする。

困らせるために無理難題を押し付けるもつた。

「なんとか、断つておくれ」

「ひとつ聞いていいですか?」

肩を落とした王氏が、じりじりを見る。

「もしかして、とある軍師から持ちかけられた話ではあつませんか?

「ああ。うか……」

荒れて口をむきあわせた王氏。

玉葉妃と紅娘ホンニヤンが、不思議そうに首を傾げる。

「つまでもなく、あの男のことだの。」

(仕方ない)

そうなれば、自分にも責任がある。

「できるかわかりませんが、やるだけやってみます」

「いこのか」

「はー。その点で、こいつが必要なものと場所があるのでですが」

逃げているだけも腹立たしい。
どうせなら、にやけた片眼鏡をかち割つてやりたくなつた。

春の園遊会は、春牡丹の中行われる。例年ならば、もう少し早く行われるのだが、毎度寒さに敵わぬものが続出する中このようになつた。

赤い毛氈けりせんを敷き、長机と椅子が並べられている。楽団が今か今かと、楽器の手入れを行つてゐる。慌ただしく女官たちが、用意に不備はないのか確認し、若い武官たちがまだ薄い髪をなでながらそれを楽しそうに見ていた。

背後の田隠しに幕が引かれ、裏で誰かが騒いでいた。

げつそりと瘦せた小柄な女官が、大きな花瓶を抱えている。そこに生けられたるは、季節にはまだ早い、色とりどりの薔薇わうびだつた。

「本当にできたのか」

壬氏ジンジは、まだつぼみの開ききらぬ花を眺める。色は、赤、黄、白、桃、青、それどころか黒や紫、緑色まで生けてある。

「やはり、難しいですね。開花には至りませんでした」

心底、残念そうな猫ねこ。

これは、壬氏に対するすまなさといつより、自分の思い通りにできないふがいなさがたつた言葉であつた。

「いや、十分だ」

青い薔薇といったのに、ずいぶんと賑やかに盛つたものだ。

過労で倒れそうな娘を翡翠宮の侍女に任せて、花瓶を宴席の上座に飾る。

つぼみのままの花々は、絢爛たる牡丹の花から注目を奪うには十分だつたらしい。

遠巻きに皆、驚いている。

「あなた、もう水晶宮にこっちじゃダメよ」

宴席より少し離れた東屋にて、桜花が猫猫をひざまへりしている。

桜花は、猫猫が心配でついてきていた。

懷妊^{がはつきり}した玉葉妃^{エバクヨウヒ}は、今回の宴席を見合わせた。表向^はきは、淑妃^{ロウフイ}こと楼蘭妃^{ロウランヒ}のお披露目として席を譲った形となる。

なぜ、桜花が心配するほど痩せこけたのには、原因がある。

でも、猫猫は水晶宮にこくと過労になるらしい。

ここひと月あまり、猫猫は再び水晶宮に通っていた。
侍女たちにはあいかわらず物の怪を見る目であつかわれたが気にしない。

壬氏にあらかじめ頼んでおいた場所、それは水晶宮の蒸氣風呂サウナだつた。

以前、猫猫が突貫工事で作らせたものである。

梨花妃はあいかわらず高貴なただが、一いつ返事で許可してくれたらしい。

猫猫は悪いと思い、

「これは、皇帝の愛読書です」

と、先日新たに妓樓けいりゅうから取り寄せた書を渡しておいた。

梨花妃は中身に気が付くと、優雅な足取りで浴室ルームに戻つて行つた。

まさか、あんなものが高貴なたへの袖の下になるとは、誰も思つまい。

館の主人の「機嫌を得たところで、蒸氣風呂の蒸氣が流れ込むように庭に小屋を作る。窓が大きい、天上にも大窓がついた奇妙なつくりの小屋である。

そこに運ぶのは薔薇の鉢。ひとつふたつではなく、何十と持ち込まれた。

蒸氣で温められた空氣のなかで、薔薇を育てる。できるだけ日光に

当てるようにし、天気の良い日は外に出した。

いまだ霜が降りるような寒い日は、焼石に水をかけ、徹夜で小屋を温め続けた。

猫猫が何をしたかったのかと言えば、それは薔薇を狂わせたかったのである。

狂い咲きをおこしたかったのだ。

なので、すべての鉢がつぼみを付けるとは思わず、何十も用意した。花の種類も、できるだけ早咲きのものを選んだ。

期間がひと月あまりと短く、できる確証はなかつたが、つぼみができたのを見たときはどんなに喜んだことか。

なにより、花の色をつけるより、花のつぼみをつけることのほうがよっぽど苦労したのだ。

壬氏から宦官かんがんを数人よこしてもらつたが、温度調節など微妙なものには猫猫が行わないといけない。間違つて、薔薇をすべて枯らしてしまつたらおしまいである。

時折、物珍しそうにか、怖いものみたさにか、水晶宮の女官うつろつぐので、鬱陶うとうしいからと他の事に目をやるふうにした。

紅べにを爪に塗り、布で丁寧マニキコアに撫でる。

花街では当たり前の爪紅だが、後宮内ではありませんみない。仕事の上で邪魔なのだろうが、普段からあまり仕事をしていない侍女たちは興味津々で食いついてきた。

わざと見せつけるようにのぞかせると、侍女たちは自室に自分の紅を探しに行つた。

(これは都合がいい)

少しだけ悪いことを考え、梨花妃にも爪紅をすすめてみた。

後宮には流行トレンドがある。そしてその流行最先端トレンドバーとなると、大抵、寵愛トランジーダーを受けた妃たちである。

たとえ下女でも、皇帝の御手付きになれば、妃に召し上げられる。ならば、皇帝の気に入った女の真似をするのは不思議でないことだ。

毒見のために翡翠宮ヒスイキユウに戻つた際、玉葉妃や侍女たちにも爪紅を見せてみる。紅娘は、非効率ホンニヤツだといったが、残りはみな興味深ひすいきゅうそうだった。

(ほつせんか 爪紅の異名つまべにとかたばみ 凤仙花と片喰かたばみがあればな)

爪紅の異名つまべにをとる鳳仙花と、ねこあしの異名つまべにをとる片喰かたばみを潰して練り合わせて爪につける。片喰かたばみが鳳仙花の赤の発色をよくするのだ。

爪紅が後宮内の女官たちに流行る上り、薔薇のつぼみは膨らみ、どれもが白い花びらをのぞかせていた。

猫猫が選んだ薔薇は、すべてが白い薔薇であった。

「あれは一体どうしたんだ?」

壬氏が眉間にしわを寄せる。

後ろに控える高順ガオシュンも興味深そうに見ていた。

桜花は壬氏たちがもう大丈夫だといったので帰つていった。表向き、猫猫は玉葉妃付の侍女だが、雇用形態は壬氏付のままである。

「染めただけですよ」

「染めた? そんなことはない。花びらにはなにもついていなかつたぞ」

「外側ではありません。内側から染めたのです」

白い薔薇を色のついた水につけ放置した。

ただ、それだけだ。

茎から水ごと色素が吸い上げられ、白い花びらを染め上げる。だから、薔薇が吸い上げる水ならばどんな色でも問題なかつた。ただ、葉の色はどす黒く汚くなるため、花瓶に生ける際、白い花以外すべてむしりておいた。

同じ花瓶にすべて生けたように見える薔薇だが、そのひとつひとつ
の茎の根元は、色つきの濡れた綿あぶらがみで包まれ、油紙あぶらがみで固定されている。

実に単純な話である。

方法が方法だけに、なにかしら言いがかりをつけてくる連中がでるかもしね。その対処法として、前夜、翡翠宮をおどされた皇帝に種明かしをしておいた。誰もが、一番最初に秘密を教えてもらえたのはうれしいことらしく、何か言われても意氣揚々と説明をかつてくれるだろう。

「つまり、以前青い薔薇を見たところのは、毎日毎日、青い色水を薔薇に吸わせる暇人がいたんですよ」

「なんでまた、そんなことを」

「さあ、女を口説く道具でも欲しかったのではないでしょ？」「

猫猫はそっけなくいって、胸元から細長い桐箱をとりだす。冬虫夏草の箱に似ているが、中身は別物だ。

「珍しいな」

壬氏が覗き込んでくる。

「爪を染めているのか？」

「ええ、似合こませんけどね」

薬と毒と水仕事で荒れた手は、左の小指の爪が奇妙な形に歪んでいた。赤く染めても、歪さは変わらない。

じろじろと面白がりに見てくるので、またいつも水面に浮かんだ魚を見るような目を向けてしまった。

(いかん、いかん)

頭を振る。少しぐらいで気にしていたら、このあとがもたない。まだ仕事は残っている。

「高順さま。頼んでいたものは」

「ええ、言われた通りに」

「ありがとうございます」

舞台は設置セッティングしてもらつた。

あとは、いけ好かないやつに一泡吹かせるだけだった。

嫌味な」とく色とりどりの薔薇は宴席の注目を集めていた。

まるで、見せつけるかのよつたさまは、生け手の性格の悪さを示しているようである。

宴があつたのは覚えている。

薄絹のひれが舞い、弦楽器の音が流れる。

贅^{ぜい}を尽くした懐石が振舞われ、酒の匂いが立ち込めた。

どうにも、昔から興味のないことは記憶に残らない。
それがあつたのは覚えているが、それに付随する感慨というものが
まったく浮かんでこなかつた。

気が付けば宴の席は終わり、黒と青の衣装を着た二人の妃たちが、
皇帝よりそれぞれの色を示す薔薇を賜つていた。

それにしても、つまらない。
来ていないのか。

何のために挑発したのかわからない。

しかたないから、いつもどおり違う相手をからかうか。腹いせ位させてもらおう。

周りを見ると、まだ多くのものが残っている。
人ごみは苦手である。

多くの人間の顔は碁石のようにしか見えない。

男女の区別はつく、だが男は黒石、女は白石と見えるのだ。それに
もへじをつけたようにしか見えない。

顔見知りの軍部の人間でも、せいぜい将棋の駒に変換されるくらい
だ。

多くのものは雑兵で歩、階級が上がるほどに香車、桂馬となつてい
く。

軍師の仕事とは簡単だ、駒に見合った配置を行えばいい。適材適所、
それで大体の戦は勝てる。

天女のよつな笑みを持つ男、皆がほめるそれでさえ、自分にはわから
ない。

ただ、成り銀を連れた金将、それを探せば問題ない。

それにも、今日はいつも以上に目が痛い。

赤い色が目につく。指先に皆、紅をつけている。

いまの女官たちの流行は、爪紅つまくれないといふことか。

よみがえる記憶の中の爪紅は、あれほどけばけばしい赤ではない。

うつすら染まつた赤い色。

鳳仙花ほうせんがの赤色だった。

懐かしい妓女の名前がふいに浮かぶと、視線の先に小柄な女官がう
つっていた。

小さく貧相だがしたたかな、片喰かたばみのよつな娘である。

がらんどうの目をこちらに向いていた。

自分の視線に気が付くと、ついてこいといわんばかりに背中を向ける。

牡丹園の向こう側、小さな東屋に将棋盤が置かれている。盤の上には、桐箱があり、中から枯れた薔薇^{ヨウヒ}が軀^{もく}ごとく横たわっていた。

「お相手できないでしちゃか」

将棋の駒をつかみ、棒読みで娘がたずねてくる。
そばには、金将と成り銀が立っていた。

断る理由などなからづ。

可愛い娘の頼みとあらば。

いつたいなにがやりたいのだ。

壬氏^{ジンジ}はできれば帰つてくれという猫猫^{マオマオ}の言葉を無視してここにいる。
猫猫は心底いやそうだったが、何も口を出さないとこいつ条件で黙つてくれた。

軍師殿を誘いだし、猫猫^{マオマオ}は将棋の駒を並べている。

その顔に、感情という文字はなく、普段の無愛想がまだ人間じみていた。

「先攻、後攻どちらがよいかね」

片眼鏡^{モノクル}の奥の細い目が、心底嬉しそうなのがわかる。あれだけの執着があるのだから、それは当たり前のことだろ。

「その前に、規則と賭けの代償を決めませんか」

「それは話が早い」

王氏^{ジョンシ}は猫猫^{ネコネコ}の後ろから盤をのぞく。

羅漢^{ラカン}から不気味な笑みを向けられるが、負けるわけにはいかない。流すように笑みを返す。

変則なしの五回戦。つまり、三勝したほうが勝ちである。

どうにも王氏には理解できない。軍師殿は将棋負けなしである。選んだ遊戯^{ゲーム}からして間違っている。

高順^{ガオシュン}も同じ意見らしく、眉間にしわをさらに深くしていた。

「何の駒がいるかね。飛車か角か」

「なにもいりません」

せっかくの申し出も受け入れない。大人しく受けていればよいものを。

「では、私が勝てばうちの子になってくれるね」

「雇用中の身ですので、年季があけたあとになりますが
「雇用中?」

狐のような目がじっとこちらを見る。

王氏は笑ったままで、頬がひきつるのをじらえなければなかつた。

「本当に雇われているのかい？」

「ええ、書にはそのように記されました」

そのとおりである。猫猫の見た書類にはそう書かれていた。
だが、署名サインをしたのは、保護者替わりであるやり手婆ルオメンだつたりする。
おやじのじの」と羅門ロウモンは、持つた筆を奪わっていた。

「それならいいんだが。それより、そつちばどうするんだい」「
なにもいりません。ただ、規則を一つ加えていただけないでしょ
うか？」

「別に問題ないが」

「それでは」

猫猫は高順にあらかじめ用意させていた酒瓶を取り出した。
五つのせかづきに均等に注いでいく。そのための蒸留酒である。

それに、袖から取り出した薬包紙を開き、さらさらと粉を入れる。
入れたのは三つ、それぞれ違う粉のようであった。猫猫は杯を傾げ、
それらを混ぜると、素早く五つのせかづきを入れ替えた。どれがど
れなのかわからなくなる。

「一回負ける」と、相手にこれを選んでもらい飲んでもらいます。
別に一口飲めばそれでかまいませんので」

なぜだらう、ものすごく嫌な予感がする。

壬氏は、猫猫の後ろから横に回る。

無表情だった顔がほんの少しだけ紅潮している気がしないでもない。

そつき入れた粉が一体何なのか、聞きたいが聞き出せない。

そんな自分がもどかしい。

「さつき入れた粉はなんだい？」

壬氏のかわりに、羅漢がたずねてくれた。

「薬です。単体ならば」

三つまとめれば、猛毒になりますけど、ヒ。

おかしな娘は微笑みながらいってのけた。

えぐい」とを考えると壬氏は思つしかない。
たとえ三つ飲まなければ問題ないとはいへ、簡単に口にしたいもの
ではない。

相手のゆさぶりをかけるためだろうか。
たしかに、一般的の相手ならひるんでしょうね。
でも相手は、奇人といわれる軍師殿である。ただのゆさぶりで心み
だされるとは思えない。

案の定、猫猫は一連敗していた。
多少は心得があるのかと思いきや、どうやら規則を知っている程度
で、まったく実戦はないようである。

すでに一杯の酒を残さず飲み干している。

一体、何を考へていいのだと想ひ。

三戦目は始まつたばかりだが、結果はみえている。

三杯目のさかづきを飲んだとして、毒にあたる可能性を考える。最初に毒のもとを選ぶ確率は五つに三つ、次に再び毒のもとを選ぶとすれば四つに一つ、最後に三つにひとつ。つまり十ひとつの中の一つまり十ひとつの中の一つの可能性で、猫猫は猛毒を食ひ立つのだ。

正直いえば、猫猫ならば毒にあたつたといひで問題がなれども思えるのが怖い。

羅漢がそれをどこまで知つてゐるのかは知らないが。

さて、賭けに負けた後のことを考えよつと、高順と顔を見合わせていふと、

「王手です」

と声が聞こえた。

羅漢ではなく、猫猫の声が。

高順と顔を見合わせ、盤上を見ると、王将がと金に狩られようとしていた。

ひどく拙い駒の流れであったが、たしかに王将に道は空いていなかつた。

「まいったよ

両手をあげ、お手上げする羅漢。

「お情けでも、勝ちは勝ちとこうじとでよいですね」

「ああ、娘に間違つても、毒をすすめるわけにはいかんからね」

さきほどの一杯の酒で猫猫の表情はかわらなかつた。飲んだものに、薬が入つてゐるのか、入つていなのがわからない。

おどけた笑みを浮かべ、無表情の娘を眺める。

「さつきの薬つていのは味があるのかい？」

「どれも苦味が強いので、一口飲めば味が違つのはわかります」

「それならわかつた。どれを選んでくれる？」

「お好きなものをどうぞ」

なるほど、羅漢は一回までなら負けることができる。その一つでも苦味があれば、猫猫に害が及ばないとわかるだらう。確率としてはかわらないが、確實である。

やはり抜け目ない男だ。

羅漢は真ん中のさかづきをとると口にする。

「苦にな」

壬氏は首をうなだれた。

これで、次の対局で猫猫が勝つことまできないうだらう。

「それに、あついな」

羅漢の言葉に顔を上げると、羅漢は真っ赤な顔をしていた。そして、次第に血の氣が引き、真っ青になると力なく倒れこんだ。

高順が走り寄つて羅漢を起しす。

「おまえ、『じつこいつ』だ? 一種類では問題ない薬なのだろう?」

いへり嚙みしことこつて本物に毒を盛るものか。

「いえ、薬ですよ」

猫猫は心底、面倒くねやつにひつた。脇に置いていた水差しをとると、羅漢と高順のもとに近づいた。

羅漢が昏睡していなことを確認すると、水差しをそのまま突っ込み水をくびくび流し込む。かなり乱暴な手つきである。

「壬氏さま」

高順が困惑した顔で見る。

「酔つてこるよつですか」

「旦薬の長ですから」

猫猫はとりあえずやつときますか、とこつ程度のやる氣のない看病をしていた。

一応は薬師という職業柄、やつてしまつたりじ。

「トヨなんですよ、」の人に

1.1 凤仙花と戯（前書き）

お父さんの回想が長くて申し訳ないです。

間接的ですが、残酷な表現が含まれています。

古い記憶がよみがえる。

無数の白黒の光景のなかで、そこだけは淡い赤色に染まっていた。

碁石を持つ、駒を持つ指先に赤く染まつた爪が映える。

無駄のない、流れに迷いのないその筋に、誰もが両手を上げる。それをつまらなそうに眺める尊大な女、それが鳳仙ファンシェンという妓女だった。

付き合いで妓楼に向かうことはあつたが、正直どうでもよかつた。酒は飲めぬし、一胡も演舞も興味はわかない。いくらきれいに着飾ろうと、自分には白塗りの碁石にしか見えなかつた。

昔からそつである。

人間の顔といふものの区別がつかない。それでもましになつたほうだ。

母と乳母を間違えるどころか、男女の区別もつかなかつた。

父はこれでは役に立たぬと、若い妻めかけのもとに通つようになつた。

母は自分の顔の区別もつかぬ子どもにかまわず、愛人に走つた夫をどうにかして取り戻そうか画策していた。

そんなわけで、名家の長子ちよつしに生まれながらも、奔放に生きてこれたのは幸運だった。

手習いでおぼえた碁と将棋にのめりこみ、噂話に耳を傾け、ときによつとした悪戯いたずらも行つた。

宫廷に青い薔薇を咲かせたのも、叔父貴の話を聞いてから試してみた。

要領は悪いが優秀な叔父だけは、自分を理解してくれた。

顔ではなく、声や素振り、体格でひとを覚えろといわれた。身近な人間は、将棋の駒に当てはめるとわかりやすかつた。

叔父が竜王駒に見えたとき、やはり優秀な男なのだと再確認できた。

遊びの延長である碁や将棋が、自分の才を発揮するとは思えなんだ。家柄のおかげで、武の才はないのにいきなり長^{ちょう}をまかされたのが幸運である。自分が弱くとも、部下を無駄なく使えればおつりはくる。ひとが駒となる将棋となれば、なにより面白い遊戯^{ゲーム}に違ひなかつた。

無敗記録が続く中、底意地の悪い同僚にすすめられ、噂の妓女と対決することになる。妓楼で負けなしの鳳仙と、軍部で負けなしの自分。

どちらが負けても観客^{ギャラリー}は面白いことである。

所詮は井の中の蛙^{かわづ}。

そんなことを考えていた自分をぶつた切るかのように、鳳仙は自分を負かした。白石を持つたとはいえ、後攻であつたとはいえその陣地の差は圧倒であった。優雅な爪紅をつけた指は、見事、相手の鼻つ柱をたたきつぶしたのである。

負けたのはいつ以来だつたろうか、くやしさよりもその容赦ない切り口にすがすがしささえ覚える。自分が悔つていてのが、気に食わなかつたのだろう。

腹をかかえて笑つてしまつた。涙目まじりに、容赦ない妓女の顔を見ると、いつもの白い碁石でなく、不機嫌そうな女の顔^{かほせ}があつた。名前とおり、鳳仙花のような、触れたらはじけそうな、人を寄せ

付けない眼をしていた。

ひととは「いつ」顔をしているものか。

当たり前のことを初めて認識できた瞬間であった。

鳳仙は隣に控える禿かむろに耳打ちをする。女童おんなわらわはぱたぱたと将棋盤を持ってきた。

初顔見せには声も聞かせない、高慢じやまんな妓女は無言で次の勝負を持ちかけていた。

次は負ぐるまい。

袖を上げ、盤上に駒を並べた。

ひたすら碁と将棋を繰り返す、それだけの逢瀬おうせが何年続いたらどう。しかし、その頻度はだんだんと減つていった。

才能ある妓女は、ある程度人気者となると売り惜しみが行われる。鳳仙もまた、そのひとりであった。

頭は良いがきつすぎる対応が万人向けではないものの、一部の好事家に受けているらしい。
まったく物好きがいるものである。

値も吊り上り、三月に一度会つのがやつとだった。

久しぶりに妓楼に行くと、あいかわらず無愛想な面のまま、爪紅を塗っていた。

赤い鳳仙花の花と小さな草が盆の上に置かれていた。

これはなんだとたずねると「ねこあしです」と答えられた。生薬にも使われ、解毒やむしをされに効くらしい。

おもしろいことに、鳳仙花とおなじく、成熟した実に触ると種がはじけ飛ぶらしい。

今度ためしにさわってみようと、黄色い花をつまんでみると、

「次はいつ来られますか？」

と、鳳仙がいった。

珍しい、定型どおりの販促の文しか送らなかつた女が。

「また、三月後に」

「わかりました」

鳳仙は爪紅を禿かむろに片付けさせると、将棋の駒を並べ始めた。

鳳仙の身請けの話を聞いたのはその頃だつた。

妓女の価値がどうこういうより、ただ、競り合ひの相手が気に食わないと値を釣り上げているらしかつた。

武官として出世したものの、異母弟に跡継ぎの立場を奪われた自分には、到底太刀打ちできる額ではない。

「どうしたらよいか。

ふと、悪いことが頭によぎったが、それは即座に打ち消した。

三月ぶりの妓楼では、囲碁と将棋、二つの盤を並べた前で、鳳仙が座っていた。

開口一番言つた言葉。

「たまには賭けをしませぬか?」

貴方が勝てたら、好きなものを与えましょうと。
私が勝てたら、好きなものをいただきましょうと。

「お好きな盤を選んでください」

将棋に分があるのは自分である。

しかし、座つたのは碁盤の前であった。

鳳仙は試合に集中したいからと、女童たちを下がらせた。

不運だったのはその後のことだろうか。

仲の良かつた叔父が失脚した。あいかわらず要領の悪い人だった。父は面汚しだと罵った。

家にまで害は及ばなかつたものの、叔父の影響を受けた自分が疎ましかつたらしく、遊説を命じ、しばらく帰つてくるなど言われた。

無視してもよかつたが、あとあと面倒になるだらう。

武官である父は、親である同時に上司でもあった。

半年ほどで戻るからと、妓楼に文を送るのがやつとのことだ。

身請け話は破談になつたと、文を受けたあとだつた。しばらくは大丈夫だとたかをくくつていた。

まさか、戻るのに三年もかかるなど思いもしなかつた。

家に戻ると埃かぶつた自室には、無造作に置かれた文の山があつた。結びつけられた枝は枯れ果て、歳月を感じさせた。

その中の一通、なぜか開かれたあとのあるそれに目をやる。見慣れた定型文がそこにあつた。しかし、その文の隅には赤黒いしみのようものが付いている。

そばにあつた口の半分開いた巾着をのぞく。それにも赤黒いしみがついている。

開くと、汚れた紙に包まれた、小枝か土くれかよくわからないものが二つあった。片方はとても小さく、つまむと潰してしまいそうになる。

小枝の先になにかついているのを確認すると、ようやくそれが何なのか理解できた。

自分の手に十もついているそれだと、気が付くのに遅すぎた。

一本の小枝を包み直し、巾着にいれて懐こしまつと、早馬を飛ばして花街に向かった。

以前より廃れた馴染みの妓楼には、碁石にしか見えないものしかいなかつた。あの鳳仙花のような女はおらず、ほつとき第で自分を叩くものがやり手婆だと声でわかつた。

鳳仙は死んでいた。

おおだな大店一つに見限られ、店の名を落とし、信用が地の底に落ちた妓女は、夜鷹の「ごとく密をとるしか道はなかつた。

少し考えればわかること、だが、碁と将棋しか頭にない自分にはたどり着かない答えだつた。

まだずきずきする頭を抱え、羅漢は寝台より身を起こす。

見覚えのある簡素な部屋、たまにやせぼりに使つ軍部の仮眠室である。

あまり勢いよく娘が飲むものだから、それほど強い酒ではないと思つていたのに。

羅漢に酒の種類はわからない。

一口飲み干すだけで、喉が焼けるような熱さだつた。

傍に水差しがあるので、器につがず口につける。

口の中にえぐい苦味が広がつて、思わず吐き出しあつた。

一日酔いの薬だらうが、やり方に悪意を感じる。

水差しのそばには桐箱があつた。

昔、悪戯の戦利品として、文をつけて届けたものだ。

枯らせてもいつまでも形を保つことができるとは知らなかつた。

片喰かたばみ、ねこあしのような娘を思い出す。

あのあと、緑青館の門口を何度もたたき、そのたびにやり手婆に折檻かんを受けた。

赤子などいない、早く帰れと簞で殴られる。本当に恐ひしい婆である。

側頭部から血を流し、けだるげに座り込んでいると、隣でなにかをむしつっている子どもがいる。

建物の脇に生える草は、黄色い花をつけた見覚えのあるものだつた。

何をしていろと聞いてみると、薬にすると答えられた。

碁石のように見えるはずの顔が、なぜか無愛想な子どもの顔に見え

た。

子どもは草を両手につかんだまま、走つていく。走つた先には、よたよたと老人のような歩き方をするものがいる。普段なら碁石に見えるその顔が、将棋の駒に見えた。しかも、歩や桂馬ではなく、大駒、竜王駒がそこにいた。

ひとつだけ開かれていた文、汚れた巾着をあけたのは誰だったのかわかった。

後宮追放のあと、消息不明となつていた叔父、羅門ロメンがそこにいた。

そのあとをひよこのよひこひこへ、ねこあしを持つた子どもは「マオマオ 猫猫」と呼ばれていた。

羅漢ロハは懐から汚れた巾着を取り出す。

中には、小枝のようなものが一つ、紙にくるまつていてはづだ。

猫猫の駒をうつ手はたどたどしかつた。将棋になれていいないのも理由にあるだろうが、もうひとつわかるのは左手でうつていていたことだ。

赤く染められた爪を見ると、小指だけが歪んでいた。

恨まれても仕方がない。

それだけのことをした。

それでも、そばに置きたかった。

碁石と将棋の駒に囲まれただけの生活はもう嫌だった。

そのために、力をつけた。父から家督を奪い、異母弟を排斥し、甥御を養子にひきいれた。

やつ手婆に何度も交渉し、十年たつて賠償の一倍相当の金を払い終えた。

今では三姫と呼ばれるよつになつた禿かむろたちと叔父貴には、猫猫の意思を尊重しろといわれた。

残念なことに、ひとの感情を読み取るといつことに長けていない羅漢は、ことじごとく裏目に出る行動を起こし続けた。

羅漢は、巾着を懷に戻す。

今回は諦めよう、今回ば。

粘着質といわれようと、諦めるわけにはいかない。

それに、なにより、娘の隣にいた男が気に食わない。
近づきすぎではないだろうか、試合中、三回も娘の肩に手をかけおつて。そのたびに、はねのけられたのはいい氣味だったが。

さて腹いせに何をしようか。

羅漢は水差しを取り、えぐい薬を飲み干しながら考える。
たとえ、どんなにまずくとも、娘のお手製には違いない。

しまじくは、花につく虫を落とすため、それだけを考えよう。

「てつあつ恨んでるものかと思つてたが
「なにがですか」

猫猫は水蓮^{スイレン}の用意した粥をすすつている。食べながらしゃべるのは行儀が悪いが、水晶宮で失った栄養を取り戻すほうが先決だつた。

羅漢を軍部の仮眠室に置いて、後宮に戾りとしたのだが、緊張がとれたのかふらふらと倒れこんだ。

比較的、壬氏の部屋が近かつたからといつことで、今に至る。

「う……」

「言わないで下さ……！」

やつぱり嫌つてこるじゃないかと、壬氏^{ジンシ}が不機嫌な顔をする。

「恨んじやいません。こちらとしては、上手く当ててくれたおかげでここに来ますので」

「当……」

他に言い方はないかと、壬氏が見る。本当のことなので仕方がない。

「なにを想像したか知りませんが、妓女の合意がなければ子は孕みません」

妓女は皆、避妊薬または墮胎剤を飲み続けている。たとえ、それできただとしても、初期であれば流す方法はいくらでもある。

生むところのは、その意思を持つていたからだ。

「むしろ謀^はりられたほうなのではないですか」

血の流れの周期を読めば、できやすい日時などある程度予測がつく。文で都合の良い日時にかえてもらえますむことだ。

「軍師殿をか？」

「女とは狡猾^{じょがつ}な生き物です」

なので、狙いが外れたときは我を忘れたことだらう。自分を傷つけることすらことわぬほどに、それだけでなく……。

「王氏^{おうし}さま、あの男に執務室以外で話しかけられたことはないですね？」

王氏は首を傾げた。

「やひいえばないよ」

回廊ですれ違う時は、こつもあつさう頭を下づられるだけだった。

「ひとの顔がわからないという人間がたまにいます。あの男はそれなんです」

「わからないのか？」

「ええ。どういうわけか。だから、顔以外の部分^{パーツ}で、誰なのか認識しているやうです」

おやじどのがいっていたのだから本当のことだらう。

「なぜか、私と義父だけはしっかりわかるみたいで、あのおかしな執着もそこに起因しているみたいですね」

ある日突然現れた、奇妙な男はいきなり自分を連れ出そうとした。やり手婆が現れて、簞で殴られ、血だらけになつた姿は幼心に恐怖を覚えたものだった。

それから何度も現れでは、予想外のことを行つて、血まみれで帰つていいくので、大抵のことには驚かない性格になつてしまつた。

自分を父だと言い張るが、猫猫にとつて父はおやじどのであって、あの変人は父ではない。役割から考へると、せいぜい種馬がいいところだ。

おやじどのある羅門を押しのけ、自分が父親になろうとする。それはありえない、どうしても譲れない点である。

妓楼の皆は、迷惑を被り、猫猫を生んだ女は死んだのだが、猫猫には関係ない。

あの男だけの責任ではないのだから。

なにより、自分に死んだ女の記憶はない。

嫌いであつても、恨んでいない。

それが猫猫の持つ、羅漢への感情だった。

苦手なものはあつても嫌いといつ感情はなかつたので、多少、度の過ぎた対応をとりがちになつたが。

猫猫は左手を上げると、自分の小指の先を見た。

「壬氏さま、知つてありますか？」

「なにがだ？」

「指の先つて切つても、伸びてゐるのですよ」

「……、食事中に言つゝことか」

珍しく壬氏が半眼で見てくる。いつもと立場が逆である。

「では、もうひとつ」

「なんだ？」

「あの片眼鏡に『^{パパ}? ?』って呼んで』と言われたら、どう思いますか

？」

「眼鏡かち割りたくなるな」

「でしょ？」

壬氏は猫猫の言いたいことがわかつたらしく、親父つて大変なのか
とつぶやいた。

隣に控える高順^{ガオシユウ}は、なぜか哀愁を漂わせていた。

なにがあつたのだろうか。

とつあえず、匙を運び、残つた粥を片付けることにした。

11 鳳仙花と「瞞（後書き）

指切りげんまん。

散々、嫌われた羅漢編終了です、まあこりてなによつでけど。

あと、お話は終盤です。中編 + 2話で。
もう少しそのへお願いします。

「どうやら、玉葉妃の妊娠がばれたらしい。」

妊娠二十週をこえ、腹も目に見えて大きくなってきた。

茶会の回数も減らし、外に出ることも控えてきた。

これまでばれなかつただけ、まだいいほうだろ？

昨晩の毒見のとき、夕餉に酸漿ほおずきが混ざつていた。

胎を縮め、赤子を流す作用を持つ。

花街では堕胎剤として使われている。

まあ、猫猫マオマオにとつてはさして面白くもない微毒である。

「極端な手できたな」

「ええ。いまさら流すのは、難しいと思われますが」

いつもの翡翠宮ひすいきゅうの応接室で、猫猫マオマオは、壬氏ジンジに報告する。壬氏は天女の相貌に憂いをのせていた。

（これは仕事中なのだな）

最近、きらきらしきのとそうでないときの違いがわかつてきた。

玉葉妃は元気そうに振舞つていたが、胎教に悪い話を聞かせるわけにいかない。とりあえず、紅娘ホシニヤンに同席してもらい、妃は横になつてもうつこととした。貴園ゲイエンが紅娘のかわりについているはずだ。

「相手はまだ、玉葉さまがどのような状態かはかりかねているのではないでしょうか。六月過ぎたことを知つていれば、もっと強い毒

を入れてくるかと

「けん制か？」

「わかりません」

猫猫は無表情のまま、正直に答える。

(これから、大変になるな)

壬氏は顎^あに手をやると、何かを考えているようである。

立場としては難しいところだろう、他の三人の妃も平等に、同時に毒を盛つたものを探さなくてはいけないのだから。

三人の妃といつても、絞られるのはひとりだろう。

梨花妃^{リファ}は性格よりこの手の方法を好みだらうし、そばにいる侍女たちは正直いって無能である。実家より、別の形で女官を後宮に送り込まない限り、暗躍^{あんやく}は不可能だろう。

里樹妃^{リ-シユ}も同様である。いまのところ、親身になつてくれているのは元毒見の侍女頭のみで、他の侍女はあいかわらずのようだ。多少、柔らかくなつてきてているらしいが、里樹妃のためにそこまで手を汚すものはないだろう。

だとすると、樓蘭妃^{ロウラン}だけが残る。

半年前に入ってきた妃は、十人の侍女と三十人の下女を連れてきた。

それだけでなく、医学に詳しいという宦官を二人連れてきている。

(たしかに、やぶ医者では不安だらうな)

宦官を連れてくることは、本来規定ないことであるが、よつは親

の「」押ししだ。
もともと入内じゅだいも、阿多妃アーダウオを追い出して上級妃から入った。本当は、中級妃から入り、阿多妃が降りるのを待つてから昇格アーバンクという形をとするはずだったらしい。

（ずいぶん、好き勝手にやつてるな）

「楼蘭妃はどうこつけたですか？」

正直、妃教育のとき、真っ赤な顔でにらんでいたことくらいしか頭に残っていない。

「ああ、理知的で冷静な妃だ……」

口を濁すような言い方である。隣に立つ高順ガオシュンも冷静そうに見えるがどうであらわ。

なにか隠している気がしてならない。

紅娘はその様子を逃すものかと、じつと見ている。たすができた侍女頭だ、敵側の情報を漏らす気はないらしい。

「理知的と小賢しいは別物ですよね」

「そうだ」

気を取り戻したらしく、冷静に答える。

「冷静といつても、土壇場に弱ければ意味はないですよね」

「そうだ」

口数少ないのが怪しかった。

(まあ、よいか)

一応、雇用主である。

これ以上にじめてやるのは勘弁してあげよう。

(それに、もう半年だ)

年に一回、現物報酬の時期だ。

あの冬虫夏草は、二つに分けて丸薬ボーナスと美容液にした。美容液は、肌に異常がでないか確認したあとで、玉葉妃および侍女たちに使ってもらっている。使い勝手は悪くないらしい、また作ってくれと言われた。

(また冬虫夏草でもいいが)

それでは少々芸がない。

無駄にいいところに住んでいるのだ、お偉い面サブのはなにかしらすばらしいものを用意してくれるだろ？

そんなことを考えてこらへんに、身を乗り出していくたらしく。

なんだか壬氏の顔が近い。

真剣な面持ちでこちらを見ている。

「もうしわけありません、近づきすぎました」

「いやいい。なんだ？」

優雅に足を組直す。しかし、いつのまにかひきりつてのがはがれていた。

ついでに、周りに高順と紅娘がない。

「とても期待しております」

「期待?」

むしろ、そわそわしてるのは壬氏のせいと思えなくもない。

「ええ、もうすぐ半年ですから」

猫猫の言葉に、壬氏はなぜだか顔を真っ青にした。

いつも昨日濁した壬氏の言葉が気になつたもので、いつもどちらに洗濯籠に茶菓子を入れて、小蘭シャオランのもとに向かった。

あいかわらず小蘭は聞かずとも、聞きたいことをどんどん話していくので話が早い。

どうにも、楼蘭妃の理知的という言葉はなんだか怪しいものである。学はあるらしい。科拳を受けてもおかしくないと言われているらしい。だが、それだけなのだ。

学はあるが、機転がきかない。

そういう意味では頭の回転が速いといえない人らしい。

(「一む。仕事は一緒にしたくない型だな

タイプ

妓女の中にもそういう女は何人かいた。

妓女にとつて知識があるというのは強みである。しかし、暗記した漢詩を述べるだけなら門前の小僧で十分である。そこから、上手く話をつなげなければ、売り物にはならない。恐ろしこほど容赦なくやり手婆は、すっぱり仕分けしてくれるのだ。

(私もひとの「」とはいえんがな)

薬学をのぞいて、日常会話をしろと言われたら、三秒で切れる自信がある。

やはり、会話は喋るよりただ聞いて相槌をうつのが楽でいい。

「それでね、それでね」

小蘭が干したライチ枝を栗鼠りすのよつて頬張りながら続ける。

「なんか最近、様子がおかしいんだよ」「おかしい？」

甘じ果肉をじくと飲むと、核心に近づくことを囁いてくれた。

「赤ちゃんできたんじゃないかつて。最近、噂になつてゐるよ」

(なるほど、そういうことが)

表向きは玉葉妃付の毒見役であるが、雇用主は四夫人に平等であるべき土氏である。

(しばらく知らないふりをするのが、一番か)

ただし、情報は多く述べたことはない。

小蘭に残りの菓子を全部あげると、やぶ医者の所に向かつた。

「やはづきましたか」

猫猫は酸漿ほおずきの入った皿だけを取り除く。
また、玉葉妃の食事に盛られていた。

実は、先日の中食は毒に気づかずに食べたことになつていて。猫猫が玉葉妃と紅娘に提案したのだ。

下手に大事にするよりも、相手のでかたを見たほうが得策だといった。

盛られた量を考えても、一回で終わるものと思えなかつた。持続して弱めようとしている気がした。

以前ならば、ここまで積極的に提案などしなかつただろうが、なんだから玉葉妃たちに肩を持つていいのだと思つた。気が付いた。

今日と一昨日の尚食の係りを調べれば、誰がやつたか目安がつくだる。

やぶ医者の話によると、H氏に頼まれて楼蘭妃のもとを訪れたといふ。

あいかわらず守秘義務という言葉を知らない男である。

簡単な触診をしただけで終わつたらしい。それでなにがわかるかといえ、わからない。

ただ、楼蘭妃は以前よりもふつくりとしていたらしい。そして、そばに仕える医の心得をもつてこの面倒見つけたところ。

「六か月になります」

と。

やぶ医者は美形だったとか、ぐだらないことを話したがひとつでもよい。

なるほど、やうなればどうなるか。

ほぼ、同時に赤子がふたつ生まれるとすれば、どちらが先か、男か女かとこう問題が起る。

(あいもかわらずおどろおどろしこりと)

猫猫は毒入りの香の物をぼろ布に包むと、中身のわからぬよつこへてひみつに捨てた。

これで、今日もまた、玉葉妃は毒を食らつたことになる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9636x/>

薬屋のひとりごと

2011年11月27日22時39分発行